昭和60年11月15日号（毎月2回1日、15日発行）第28巻・第22号　通巻643号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1985
22
11.15.



国際ブック・フェアを訪ねて

ソビエト農業の潜在力

第22号　1985年11月15日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

表紙　第5回国際ブック・フェアを訪れたモスクワの芸術文学出版所の編集者エベリナ・グレツカヤ（4ページに関連記事）

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141 東京都品川区東五反田3－9－13
振替口座　東京9－122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　（株）新時代社　電話03(293)4881
〒101 東京都千代田区神田神保町1－44
振替口座　東京0－13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。



歴史的チャンスを逃すな

――M・S・ゴルバチョフの訪仏の成果

ノーボスチ通信政治評論員　V・クズネツォフ

核破局の深淵のすぐそばまで追い込まれ、あわやという危険な状態にある人類に、歴史的ともいうべきチャンスがめぐってきた。つまりいま、この危険な淵から後ろへ身を引いて、核兵器の禁止と廃絶に通じる道、未曾有の破局の脅威を脱する道に立つチャンスが開かれたのだ。そしてそのチャンスを提供したのはほかならぬソ連だというのが、M・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長の訪仏（一九八五年10月2―5日）の成果とソ連の遠大で規模の大きい平和提案の重大な意義を論議している国際世論の意見である。

M・S・ゴルバチョフはフランスの国会議員との会談の席で「人類の最良の英知は、われわれの意識が日常生活の急変に立ち後れる危険性を警告してきた。これは現代においては特に切実である。人間はすべてに遠く銀河系にまで進出しようとしている。しかし、地球上にはどれほどやり残しがあることだろうか！」と述べた。いぜん肝心なことが行われていないし、一〇〇%の〝保証付き〟で人類を滅亡することができる兵器から、人類が救われるという保証は全くないのだ。

つまり、いまもし現有兵器で地球上のあらゆる生物を何度も皆殺しできるとすれば、これ以上の軍拡競争は無意味で、馬鹿げており、狂気であるということであり、核戦争に勝利者はありえないことに皆（狂人は別）が同意するなら、つまりは核戦争のあらゆるバリエーションやドクトリンはお蔵行きということになる。自己保存の本能や生き残りの論理を生かして、人類の理知と経験からさし迫った、切実に必要な解決を引き出さねばならないし、死のコンベヤーを止め、軍事的対立と競争を弱めなければならない。一方が軍事的優位をめざして狂奔し、他方がそれに伴ってそのつど止むをえず均衡を取り戻すというような悪循環に終止符を打たねばならない。敵意や〝潜在軍事敵国〟という心理を取り除き、相互の「核による威嚇」や「恐怖の均衡」よりもはるかに確実な世界平和と国際



安全を保障する体制をつくらねばならない。一言でいえば、戦争の歴史にピリオドを打ち、国際関係を白紙から始め、兵器や戦争のない世界をつくる実際的措置をとらねばならない。

真理はいたって単純なようであるが、決して皆がこの真理を認識し、身につけ、〝消化〟できるわけではないし、真理を実際の政策に移すとなると、もっと困難である。

では何が障害になっているのか？不信や疑惑、離反や対決姿勢といった古いお荷物を背負った伝統的な思考と現代の現実とのずれがその一つであり、現在の現実に対する認識と政治的実践とのずれが二つ目の障害である。これら二つの障害を克服しなくては、われわれすべての者の頭上にのしかかっている危険を取り除くことなど考えられない。いま進行中の科学技術、テクノロジーの革命のほかに、戦争と平和の問題に核・宇宙世紀の知的レベルで対処するための知能革命も必要である。

ソ連の平和提案は現代の最も切実な要求に合致している。ソ連の真に革命的で創造的な思い切ったアプローチは、M・S・ゴルバチョフが強調したように、軍事分野と、もちろん政治分野を含むさまざまな分野で、習慣となった多くのものを再検討し、新しい現実に完全に一致させ始めたものであり、全世界の注目をひいた。

右　10月2日、エリゼ宮で会談するM・S・ゴルバチョフとミッテラン・フランス共和国大統領。
左　凱旋門の無名戦士の墓に献花するM・S・ゴルバチョフ（10月3日）
下　パリ近郊のプジョー自動車工場を視察して、労働者と話を交わすM・S・ゴルバチョフ（10月4日）。



ではワシントン筋はこれにどう答えているか、またはどう答えるつもりだろうか？　ワシントン筋は、米ソ関係、東西関係の尺度を含めてあらゆる存在の尺度と見なしている軍事力や他国がどうなろうと意に介せずもっぱら自国のために確保しようと願っている安全に関する、昔ながらの考えに立って遠く銀河系に進出しようとしているのであり、地球上だけでなく、宇宙でも核の警棒を振り回すことに知力を集中している。米国は唯我独尊、お山の大将われ一人という態度を捨てて、まわりの世界を新鮮な大きな目で見るということをせずに、さも米国の頑とした厳しい態度と〝西側の確固たる態度〟がソ連に平和提案を出させる圧力になったかのように思い込み、この分ではもっと圧力をかければ、モスクワは「スターウォーズ」計画でも譲歩してくれると思っている。

「石をどかさねば、水は流れない」ということわざがあるが、とくにワシントンの軍国主義政策の苔むした石は、平和と軍縮へ向かう米国民と国際共同体全体の進路を塞いでいる。ホワイトハウスがソ連の意図を受け入れ、流れをよくしたいとどれだけ言おうとも、そのつどこの苔むした石に妨げられているのだ。「レーガン政府の軍備管理分野のブレーン集団は、態度が柔軟だといって非難されるのを恐れている」とワシントン・ポスト紙は報じ、「相手側が現在のデッドロックから超大国を引き出す思い切った措置を先にとる」のを待っていると書いている。

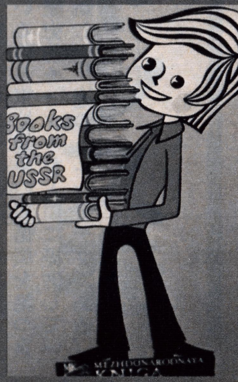
ワシントンがほんとうにそれを待っていたのであれば、すでにその措置はとられたのであり、軍拡競争の中止に反対する連中がつくり出したデッドロックに、ソ連の平和提案、建設的で現実主義的な措置の流れがどっとばかりに落下したのである。はたしてその流れは、地球上の軍備の雪崩の停止と、雪崩の宇宙への拡大防止を要求している人類が強く望むような決定的な通路を開くだろうか？

しばらく前からワシントン筋は、宣伝の立ち後れを進んで認めており、ロシア人は宣伝の名人かもしれないが、宣伝だけでは足りない、ということを吹き込みたがっている。しかし、実際のところは軍備抑制分野の実際措置をとる準備がひどく立ち後れていることを隠そうとしているのだ。まさに宣伝だけでは足りないが、それも宣伝すべきことがあればの話である。

平和を愛するソ連の宣伝は、平和愛好政策、現実的な提案や実際的な施策に立脚している。このことを裏書きしているのが軍拡競争の悪循環を絶つ真の歴史的チャンスを人類に提供している新しいソ連のイニシアチブである。



モスクワの国際ブック・フェアを訪ねて



本誌記者　アレクサンドル・コチェルガ
カメラ　L・パラジン

第5回モスクワ国際ブック・フェアの会場内部

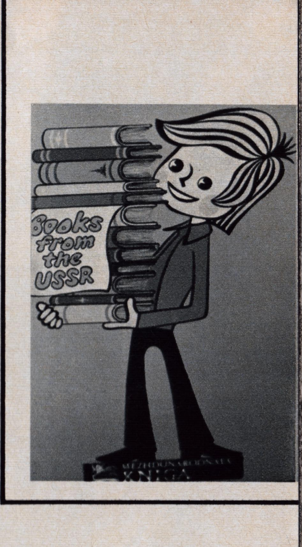
さる9月10日から16日まで「平和と進歩に奉仕する本」をモットーに掲げた第5回国際ブック・フェアがモスクワで開かれ、一〇二カ国の三〇〇〇の会社と組織の代表が参加した。

ブック・フェアには、社会・政治関係図書、科学技術書、文芸図書、写真集などの出版物二〇万点余りが出展された。

モスクワのブック・フェアはすでに伝統的行事になっており、とても人気がある。ソ



国際ブック・フェアの会場





商談中の日本側代表

連邦著作権協会（ＶＡＡＰ）はこんどのフェアで約二八〇〇件の著作権譲渡・取得契約を結んだ（前回は二五八〇件）。また全ソ国際図書輸出入公団（メジクニーガ）が外国の会社や組織と結んだ図書、定期刊行物、レコード、切手などの相互取引契約の総額は前回の見本市の契約額を一四〇〇万ルーブル上回り、一億二〇〇〇万ルーブル以上に達した。

ことしは対独勝利・第2次世界大戦終結40周年とあって、ブック・フェアのプログラムもそれにちなんだ催しが多く、すでに伝統となった「実務会合クラブ」会議の一つも、こんどは反核闘争と青少年問題の解決における図書の役割をテーマに取り上げた。この会議には本島長崎市長と松永長崎国際文化会館（原爆資料館）館長が参加した。

ブック・フェアの付随行事として催された第5回児童画コンクールでは、日本の子供の作品が多数入賞した。

ブック・フェアにソ連が出展した図書は二万点で、参加国中最も多かった。ボリス・パスツホフ・ソ連国家出版・印刷・図書販売委員会議長の話によると、一九八三年のブック・フェア以来2年間にソ連で出た一六万点の出版物の中から最良のものを選ぶのは、なま易しいことではなかったという。

何分ソ連は世界最大の図書出版国であり、世界屈指の読書人口を持つ国だから、この出版点数は別に驚くにあたらない。ソ連では毎日五七〇万部の新刊書が刊行されており、毎年二〇〇〇点以上の外国人著者の本が出版されている。この10年間の外国人著者の本の総発行部数は一〇億部を上回った。

日本は一九七七年の第1回以来、毎回ブック・フェアに積極的に参加している常連であり、ソ連の図書出版・販売関係者、翻訳者と日本の同業者との接触は、長く、安定している。

ソ連の図書出版所は東京の国際ブック・フェアの常連でもある。図書展示会の交換は図書の相互交換の効果的な形態であり、たとえば八〇年代に入ってから札幌で数回ソ連の本の展示会が開かれ、それに対応してベロルシア共和国の首都ミンスクとモスクワで、日本の本の展示会が開かれた。モスクワのブック・フェアに日本の代表が参加しているおかげで、ソ連の出版所は興味のある日本の新刊書を知ることができ、これらの本はその後ロシア語に翻訳されている。

10月革命以後ソ連では、日本の詩人、小説家の作品がソ連の25の民族語で出ており、一九四五年以降ソ連で出版された日本の著者の図書とパンフは七三八点で、発行部数は二〇八三万七〇〇〇部にのぼった。

こんどのブック・フェアの日本コーナーを組織したのは、出版文化国際交流会であり、岩波書店、福音館書店などの出版社やナウカ、日ソ図書などの商社が自社の出版物を出展した。

本誌記者はまず岩波書店の小林茂樹・自然科学書編集長にブック・フェアの印象を聞いた。

「岩波書店にとってこんどのブック・フェアは成功以上の成果をあげた。うちは昔からソ連と親しくしており、ロシア、ソ連の著者の本の普及に努めてきた。岩波はプーシキン、トルストイ、ドストエフスキーなどのロシア文学の古典やイーゴリ遠征物語といった古代ロシア文学の作品を出版した。

フェア期間中にわれわれは、予期した以上の多くの契約を結んだ。ソ連側がうちから買ったのは、工業製造技術、マイクロエレクトロニクス、セラミックス製造に関する本の出版権で、『ＶＬＳＩコンピュータ』はきっとソ連の専門家の目にとまると信じていた。また現代数学に関するサマリンスキー・アカデミー会員の著作が、日本で教材として出版される」

さらに日本の読者はソ連のどういう本に関心をもっているか？　と問うと、小林氏は、「日本でとくに関心がもたれているのは科学技術、テクノロジーのさまざまな分野の先進的方法に関する本である。ソ連は世界最大の科学力をもつ国だから、当然である。ところでわが社はソ連の児童文学や民話、絵画その他の芸術の普及にも努めている。

前回のブック・フェアは日ソ両国、両国民間の交流を深め、拡大するのに大いに役



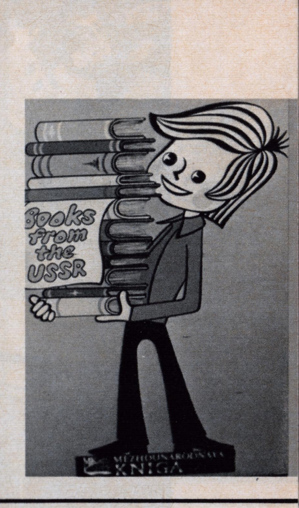
日本コーナーで岩波ジュニア新書の一冊を説明する岩波書店の小林茂樹さん



「ロシア語」出版所の展示コーナー



ソ連各共和国の出版所の地方出版物も展示されて、客の目をひいた。写真は会場のウクライナ・コーナー



全ソ図書愛好家協会のスタンドでお客と話す協会のペトリャコフ＝ソコロフ会長



ソ連コーナーのオーロラ出版所（レニングラード）の美術書と写真集



立った。われわれはこうした交流を深め、拡大しなければならないと信じている」と答えた。

ブック・フェアの日本コーナーの責任者落合博康氏（出版文化国際交流会）は次のように語った。

「日本人の全部が全部ソ連について客観的な認識をもっているわけではないから、われわれは本と本の交換を通じて、日本の人々に広くソ連の真実を知らせる必要がある。

ソ連の本が日本でよく読まれているのは、ご同慶のいたりで、とくに科学技術もの、人文関係のものとロシア・ソ連の古典文学、児童図書に対する関心が高い。

こんどのブック・フェアはわれわれのこれまでの長いよい交流を受け継いだものである。そのことはソ連の〝プログレス〟、〝ロシア語〟〝児童図書〟などの各出版所との間に結ばれた契約が裏書きしている。

ソ連側の出版関係者と話し合ったり、商談をやってみてわかったが、新刊の文芸書や科学技術書に関する日ソ間の情報の現在の交換レベルでは、どちらも物足りないようだ。

結局日ソ双方の出版関係者の交流は今後も続けるだけでなく、もっと大幅に交流を広げようということになって、喜んでいる。交流を拡大するための条件はそろっている。このことは、出版文化国際交流会とソ連側の国家出版委員会との新5カ年協定にも書かれている」

VAAPのデータによると、まもなく40点余りのソ連の著作が日本に紹介される予定であり、またさまざまな分野の日本の本14点がソ連に紹介されよう。

記者がVAAPで聞いたところによると、日本に紹介されるものの中には、有名な現代作家のダニール・グラニンの『絵』、ボリス・パステルナーク、ビャチェスラフ・クラピービンの作品が入っているという。

フェアの期間中に日本の代表が結んだ三つの契約は、ありきたりのものと違っていた。たとえばほるぷ出版が出す世界の民話シリーズのソ連の民話には、アルメニア（カフカズの共和国）のアンドロニク・カリキャン、モルダビア共和国のイーゴリ・ビエル、カザフ共和国のハセン・アバエフがさしえを書く予定である。

ブック・フェアの日本コーナーは、ソ連の連邦構成共和国の出版関係者たちの注目を集めた。こうして商談の結果、キエフのベセルカ出版所は伊東壮の『1945年8月6日—ヒロシマは語りつづける—』を出し、リトワ共和国の首都ビリニュスのミンチス出版所は森村誠一の『死の器』をリトワ語で出すことになった。

「平和と進歩に奉仕する」を毎回モットーに掲げるこのブック・フェアにとって、取引利益は一応重要ではあるが、それはあくまでもブック・フェアの一面にすぎず、フェアでの思考と知識の交流は世界の健全な精神的気候づくりに役立つというのが、大方の意見である。

ソ連共産党第27回大会に向けて

ソビエト社会とソ連共産党 (2)

前号に引き続き、ソ連共産党と、ソビエト社会の生活における党の役割について、読者から寄せられた数多くの質問のなかから、最も典型的なものにお答えします。

――ソビエト社会の社会・経済生活にソ連共産党の各大会はどのような役割を演じているか？

ソ連の社会は、共産党による科学的な社会指導を指針にして発展している。とびきり重要な役割を果たしているのが、ソ連共産党大会である。大会は党の最高機関であり、党の内外政策の路線を定め、共産主義建設の最重要問題を検討し、解決する。

党の政策は経済の集中的な表現であるが、同時に政治は、レーニンが指摘したとおり経済よりも優位に立たざるをえない。つまりどんな経済問題といえども、政治を抜きにしたり、経済の動きに対する党的・政治的影響を抜きにしては、正しく解決できない。

党大会は党の経済政策、戦略、戦術を定める使命をもつ。

ソ連では一九二七年の第15回党大会以降、党大会が国民経済発展5カ年計画作成のための指令（基本方向）を採択している。つまり社会・経済的発展計画にこそ、共産党の経済政策が具体的に表現されているのであり、これらの計画の達成の過程で党の経済政策が実現されているのである。

現在ソ連では2月25日に開かれる第27回党大会を迎える準備が大々的に進められている

党大会の議題で特別の位置を占めるのは、国の社会・経済的発展の諸問題である。第27回党大会は「一九八六―一九九〇年と二〇〇〇年までの期間の経済的、社会的発展の基本方向」に関する文書を討議しなければならない。

また大会は、何らかの理由でソビエト社会のこれまでの発展段階で解決されなかった諸問題を審議する。

たとえば一九七〇年代の初めから、ソ連の経済は伸び悩んでいるが、主な原因は、構造政策と管理の形態・方法の改革や経済活動の心理そのものに、ねばり強さがタイムリーに現れなかったことである。従ってマイナス傾向を克服し、事態をよい方向に急転換させることは、党と全国民の課題である。

他のグループの問題は、成熟した社会主義の基本原則、まず第一に集団主義と社会主義の諸原則の強化、発展と関わりがある。党大会は、社会主義の主要目標である社会のすべての成員の自由な全面的発達を実現する具体的な形態と方法を定めなければならない。

この主要目標は、食料供給の改善、国民向けの商品とサービスの生産の増大といった、より具体的で緊急の課題を解決してこそ実現できる。党は今後とも住宅建設を大々的に進め、保健を改善し、教育、科学、文化を発展させる必要があると強調している。

しかしこれらの具体的課題を達成するためには、科学技術進歩をベースに社会・経済的発展に拍車をかけなければならない。だから党大会を前にして、さる6月11、12日の両日科学技術進歩促進問題に関する会議が開かれ、二〇〇〇年までに国の経済の集約化への急転換を確保する新しいアプローチを確立するよう、国民に呼びかけた。

最後に党大会は、国の社会・経済的発展の諸問題を討議するさい必ず長期課題を定めなければならない。これらの長期課題の解決は、発達した社会主義の改善に役立ち、この社会を共産主義へ近づける。

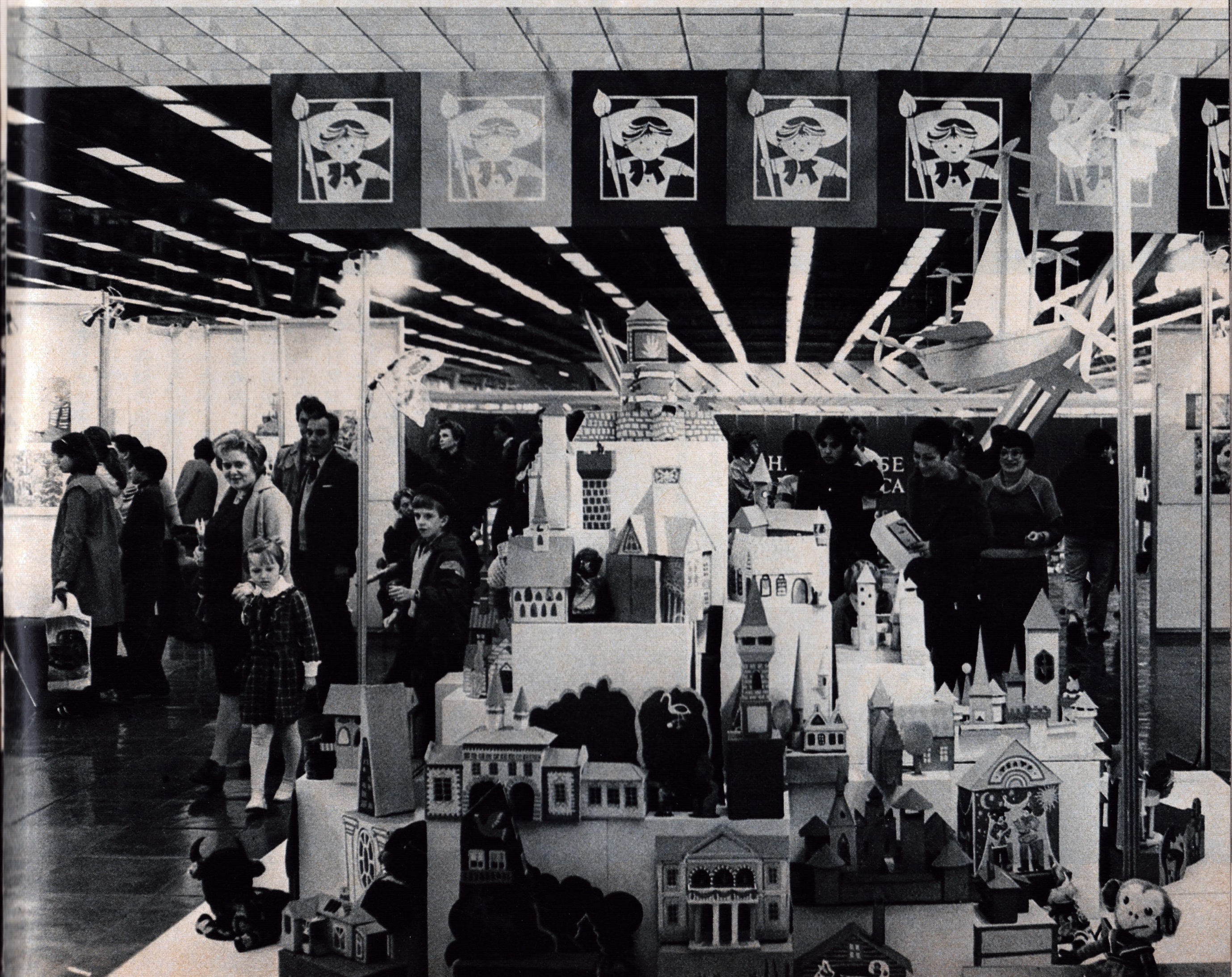
ソ連国民は明日の生活に強い関心をもっている。だから国民にとって、食料問題やエネルギー問題のようなグローバルな問題の解決の方途と方向は、重大な意義をもつ。しかしむろん何といっても最大の問題は、軍縮、世界熱核紛争の脅威の除去の問題である。この問題を解決することが最優先であり、明らかに他のあらゆる問題は、世界の人類文明を守るというこの問題の解決に大きく左右される二次的問題である。



児童画コンクールに応募したソ連の子供たちの求めに応じてサインをするオランダの有名な漫画家ビドストループさん



▼
ブック・フェアの付随行事として開かれた第5回児童画コンクールには、日本からも多くの作品が応募し、優秀作品はフェアの中央展示館に展示された。



ソ連共産党中央委総会でのM・S・ゴルバチョフ書記長の報告

（一九八五年10月15日）

ソ連共産党中央委総会に関する公報

10月15日、ソ連共産党中央委員会総会が開催された。

総会は以下の諸問題を審議した。

(1) ソ連共産党綱領の新稿について。

(2) ソ連共産党規約の改正について。

(3) 「一九八六—一九九〇年度および二〇〇〇年までの期間のソ連の経済・社会発展の基本方向」草案について。

これらの問題についてソ連共産党中央委書記長M・S・ゴルバチョフ同志が総会で報告を行った。報告のテキストは新聞雑誌に発表される。報告についての討論で次の諸同志が発言した。A・A・チタレンコ（ウクライナ共産党中央委第二書記）、R・F・デメンチエワ（ソ連共産党モスクワ市委第二書記）、Y・F・ソロビヨフ（ソ連共産党レニングラード州委第一書記）、V・G・アファナシエフ（プラウダ紙編集長）、S・I・マニャキン（ソ連共産党オムスク州委第一書記）、M・S・シカバルドニャ（ソ連計装・自動化手段・制御システム工業相）、A・M・コロリョフ（S・オルジョニキゼ記念ウラル重機械工場旋盤工）、V・P・デミデンコ（カザフスタン共産党クスタナイ州委第一書記）、K・S・デミルチャン（アルメニア共産党中央委第一書記）

ソ連共産党中央委総会は検討に付せられた諸文書を承認し、ソ連共産党第27回大会に先立って開催される党員集会、協議会、連邦構成共和国の共産党大会で審議するために、さらにまた「一九八六—一九九〇年度および二〇〇〇年までの期間のソ連の経済・社会発展の基本方向」草案は労働集団、学校、軍の諸部隊、社会組織の集会で審議するために、これら文書を新聞雑誌に発表することを決定した。

ソ連共産党中央委総会では、組織問題が検討された。

総会はN・V・タルイジン同志をソ連共産党中央委政治局員候補に選出した。総会は、ソ連閣僚会議議長への任命に伴いN・I・ルイシコフ同志をソ連共産党中央委書記のポストから解任した。健康上の理由による年金生活入りに伴いN・A・チーホノフ同志をソ連共産党中央委政治局員のポストから解任するむねの決定が採択された。

これをもってソ連共産党中央委総会は議事を完了した。

われわれはソ連共産党綱領新稿草案、第12次5ヵ年計画および二〇〇〇年までの期間のソ連経済・社会発展の基本方向草案、さらにソ連共産党規約改正案を検討しなければならない。

これらは絶大な政治的意義をもつ文書である。その中で問題にされているのは、われわれの綱領的目的、党の総路線、その経済戦略の基本的諸問題であり、現在のきわめて複雑で責任重大な歴史の一時期——内政面でも国際面でも多くの点で転換期の性格をもつ時期における大衆の中での活動の形態と方法である。

ご承知の通り、ソ連共産党中央委4月総会と、その後開かれた科学技術進歩の諸問題に関する会議は、現状を詳細に分析し、わが国の社会・経済発展を加速し、それにもとづいてソビエト社会を質的に新しい状態に到達させるという大がかりな構想を打ち出し、根拠づけた。これが根本的な点であり、われわれの問題の本質全体がこの点にある。

今日わが党は加速の構想を国民に提示し、それをひっさげて定例の第27回大会に臨もうとしている。これは今回のソ連共産党中央委総会の審議にかけられる三つの文書のすべての核心である。国の社会・経済発展の加速は、平和の条件のもとでソ連人の豊かな、社会的にダイナミックな生活を物質面、精神面で保障し、社会主義体制に具現される歴史的に新しいタイプの文明の可能性と長所をさらに完全に、はっきりと明るみに出す使命を帯びている。

まず第一に、第26回大会の委託によって起草されたソ連共産党綱領新稿について述べよう。真剣な慎重な作業の過程で、すでに踏破した道の結果を意味づけ、国の今後の発展の展望を規定することに関連して、理論面でも政策面でも容易ならぬ諸問題が出てきた。

われわれが見ている通り、最近の四半世紀にわが国では、客観的な性格をもつ重要な経済的、社会的変化が生じた。こういった変化は、当面の目的と長期的目的を深く分析して精密化し、これらの目的を達成する道を明らかにすることを要求し、さらにまた党の組織活動、社会・経済活動、イデオロギー活動に対する新たなアプローチをも要求してきた。国際情勢も綱領の規定の精密化を要求してきた。階級的、社会的な面でも、国家間の関係、国際関係全体の普遍的基準としての平和の原則の確立をめざす闘争をめぐっても進行中の力関係の変化について、新しい理解をつくりあげる必要があった。

言い換えると、過去の成果を総括するだけでなく、人間と地上の平和のための行動の明確な、根拠づけられた綱領を作成することも要求されたのである。これに関連して以下の点に皆さんの注意を喚起したい。

まず第一に、ソ連共産党の基本的な理論上、政策上の方針の継承性である。われわれはこれに原則的な意義を与えている。実生活は第3次党綱領の基本内容の正しさを裏書きした。この綱領を実現しながら、わが国は共産主義建設のあらゆる方向で大きく前進した。第3次綱領の基本的な理論的、政治的命題は、その新稿にもそのまま残されている。

党の理論と綱領方針の発展での継承性の問題——これは党の理論上の原則性、一貫性の問題であり、マルクス・レーニン主義を忠実に守るかどうかの問題である。もしソ連共産党が自分自身の理論的帰結や政治的評価をしかるべき責任感なしに取り扱っていたならば、この党は世界共産主義運動の中でこれほど高い権威をもつことも、ソ連国民からこれほど信頼されることもなかったであろう。

とはいえ、理論の一貫性と継続性は、つねにその創造的発展を前提とし、歴史的経験に応じてその原則的命題を豊かにしていくことを前提とする。これは全く当然のことだ。今やわれわれは社会主義を完成に近づける道、われわれの最終目的である共産主義に到達する道をよりよく、より精密に頭に描いている。これらすべては、文句なしに、党の理論と政策の主要文書に反映されるべきであったし、反映されたのである。

綱領の内容を豊かにし、発展させていくと同時に、われわれは時の試練に耐えなかった諸定式を批判的に再検討した。これはわが党の伝統に沿ったことである。レーニンが指摘したように、綱領の「個々の条項と定式の批判は、あらゆる溌剌たる党では全く正当で必要な事柄である」（全集、大月書店版、第10巻、15ページ）

この活動全体においてわれわれは、レーニンの党綱領構成原則を出発点としてきた。綱領は現実のプロセスの正確な定式でなければならず、基本的な見解、政治課題を明確に叙述しなければならず、過度に詳細にわたることや根拠のない空想からも、こむずかしい理くつや定義の遊戯からも解放されたものでなければならない。綱領——これは党がそれをめざして努力し闘っている目標についての明確で精密な声明なのである。

中央委政治局は、ここに提出された文書は全体としてこれらの要求にこたえていると考えている。この文書はマルクス・レーニン主義理論に、国内と世界舞台で進行中のプロセスの現実主義的分析にもとづき、国の発展の共産主義的見通しから出発して党、ソビエト国家、全国民の活動の戦略方向を明確で広範に性格づけている。

今回の新稿の形での第3次党綱領は、社会主義の計画的、全面的改善の綱領であり、国の社会・経済発展の加速にもとづくソビエト社会の共産主義への一層の前進の綱領である。これは平和と社会進歩をめざす闘争の綱領である。

単一の共産主義構成体の二つの局面の間にははっきりした境界はありえないという立場に立って、われわれは共産主義をめざす路線を堅持している。社会主義をとび越えて共産主義の高度の局面に直接に移行することはできない。社会主義を独自の構成体と考えることも、同様に正しくない。社会主義の共産主義への成長転化は、社会発展の客観法則によって規定される。経験が示しているように、社会の物質的、精神的成熟のレベルを考慮しないでお先走りし、共産主義の原則を導入しようとするあらゆる試みは、失敗の運命にある。しかし、機の熟した改革の実施、新しい課題の解決を引き延ばすことも許されない。

綱領新稿では、資本主義を上回る人類進歩の段階としての社会主義の歴史的達成と優位性の特徴づけが豊かにされ、綱領実現の結果われわれが獲得するはずの経済、社会、政治の分野や精神生活での輪郭が描かれている。国の社会・経済発展の加速を通じてソビエト社会の質的に新たな状態へ——これが党の現在の路線の本質を表現する定式である。

綱領は社会の発展での経済の決定的役割から出発している。党の経済戦略は、科学技術革命の一層の深まりを考慮に入れて規定されている。それは真に歴史的な規模の改革——国民経済の新たな技術再建を実施し、それを集約的な発展のレールに移し、ソ連経済を

組織と効率のより高いレベルに進出させること——をめざしている。これらすべては人間のため、人間の幸福のためなのである。

社会的領域にずっと大きな注意が向けられている。わが党は、労働と生活の条件、健康、レジャーから社会・階級関係にいたるまでの人間の生活空間全体を包括する社会的に強力な政策をもたなければならない。社会問題、科学、文化に注意を向ける必要性を語って、レーニンはこう書いた。「これが最良の政策であろう。これが最も経済的な経営方法であろう。そうしないなら、われわれは、数億ルーブルを節約したため、数十億ルーブルでもつぐなえない大損失をこうむるかもしれないのである」（全集、大月書店版、第29巻、一六九—一七〇ページ）

まさにこの視角から、草案では社会的領域に対するわれわれの態度が規定されている。党は社会政策を、国の経済発展を加速し、大衆の労働意欲と社会・政治的積極性を高める強力な手段として、社会的安定、新しい人間の形成、社会主義的生活様式の確立の重要なファクターとして見ている。

ソビエト社会の政治システムの発展、国民の社会主義的自治のますます完全な実現についての草案の命題に、われわれは原則的意義を与えている。力いっぱい強調しておきたいのだが、社会主義的民主主義をあらゆる手をつくして拡大し深めることなしには、つまり国家と社会の生活の諸問題の解決にすべての勤労者が、その集団や組織が日常的に、積極的、有効に参加するための条件をつくり出すことなしには、われわれは順調に前進することができない。大衆のイニシアチブ、エネルギー、生き生きした創造、新制度創出の課題に対する彼らの自覚した関心ある態度——まさにこれらの中にレーニンは社会主義の力と生命力の最重要な源泉があると見ていたのである。

われわれが生産、文化、管理の分野における困難きわまりない諸課題の解決に取り組んでいる今日、真の人民権力の展開はますます大きな意義をおびてきている。すべての国家・社会組織の活動における公開性の拡大、下からの監督の強化、民主的基盤の深化の面での一つ一つの現実的措置が貴重である。要するにわれわれは、社会主義の民主主義的本質や、大衆の創造を汲み入れる切実な必要性を最大限に利用しなければならない。

イデオロギー活動の分野においても、綱領の方針は社会・経済的発展の加速と不可分に結びついている。経済・社会問題の解決や、国政、生産・社会事業の管理への勤労者のますます幅広い参加と、政治的啓蒙や思想的影響とを結びつけ、マルクス・レーニン主義思想の上に人々を教育し、正しい言葉と現実の行動によって教育する必要がある。よく熟考された経済戦略、強力な社会政策と明確な目的をもったイデオロギー教育活動をすべて密接に統合してはじめて人的要因をすべて活性化することができるのであり、この要因なしには提起されている課題はどれ一つとして解決できない。今日の問題はまさに以上のようなものである。

綱領新稿には、世界発展の主要傾向もかなり十分に反映されている。それは、現実の社会主義の立場の一層の強化、その権威と影響力の増大、公正な基盤の上での生活の刷新を求める人民大衆の役割の向上であり、それは、世界の前向きの変革に対する帝国主義反動・侵略勢力の側からの抵抗の増大であり、それは、社会主義諸国、国際労働運動と共産主義運動、幾十もの新興独立諸国、広範な反戦民主主義運動を統合する平和の力の強化である。

われわれはみな、主要資本主義諸国の政策の中に非常に危険な傾向が現れたことを知っている。時の流れや、帝国主義、特に米帝国主義の実際の行動は、この政策の本質をますますはっきりとさらけ出している。社会主義に対する軍事的優位の達成にもとづく社会的報復、進歩的な運動、解放運動の力ずくの弾圧、新型大量殺りく兵器のあいつぐ開発や宇宙軍事化を正当化するようなレベルでの国際緊張の維持がそである。

その結果、国際情勢の進展は、軍拡競争に終止符を打ち、戦争への進展をくいとめることをめざす高度の責任ある決定を下さなければ克服することのできない段階にまで来ている。それらの決定を先延ばしすれば、人類の存在そのものを脅かす危険なプロセスを抑制のきかないものにする恐れがある。軍国主義と戦争の勢力の抑制、恒久平和と確実な安全の確保は、現代の根本的な問題である。

世界の舞台で行動している社会勢力、政治勢力がきわめて多様性に富んでいるなかで、死活の重要性をもつ諸問題への新たなアプローチを探求するには、これらの勢力の往々にして一致しない、時には相反する利益を現実主義的に考慮して、正しい政治路線を策定する必要がある。中央委政治局の考えによれば、綱領新稿はそのための良好な指針を与えるものだ。

新稿は、地上の平和と社会進歩と諸国民の民族解放の確立に対するわれわれの概念をそっくり表したものであり、そこには、政策の基本や、私に言わせてもらえば、依然不動のままであるその主要な柱が定式化されている。それと同時に綱領は、国際問題に対するわが党のアプローチの幅の広さ、情勢の変化を適時に考慮し、先入見にとらわれずに現実を直視し、起こっていることを客観的に評価し、その時点の要求に柔軟に対応する党の能力を示すものだ。

われわれは、われわれの国際政策目標とその達成の道について率直に述べている。この意味でわれわれの政策は十分予想がつき、そこにはナゾやあいまいさはない。それはレーニンの二つの相対する体制の平和共存理念に基づいた政策である。われわれは、矛盾に満ちた時代にあって平和の運命に対する自らの責任を自覚している国や党には、安定した、着実な政策のみがふさわしいという立場から出発している。

進歩勢力は綱領の中に、われわれが

彼らの闘争と一貫して連帯し、彼らの見解や立場を尊重し、彼らの統一——現実の社会主義世界、労働運動、共産主義運動、反動と侵略に反対し平和と進歩をめざすすべての運動の生きた組織全体に及んでいる多種多様さの弁証法的統一——の強化の促進をめざす姿勢の表れを見いだすであろう。

次は基本方向の草案についてだが、これは言うなればソ連共産党綱領のテーゼを具体化し、第12次5カ年計画期と二〇〇〇年までの期間という綱領実現の責任重大な段階に合わせてそのテーゼを具体的な計画の形で表現する使命をもっている。

大がかりな作業が行われたが、それは楽々とスムーズに進んだわけではない。それは、わが国の経済のような巨大な規模の経済に裏づけられた発展の見通しを策定するのはきわめてむずかしい仕事だからというだけではない。わが国が質的に新しい課題に直面しているとなれば特にそうだ。国民経済のテンポや均衡や効率に影響を及ぼす、それも影響の仕方がまちまちな客観的要因のすべてを考慮しなければならなかった。

われわれは、必ずしもわれわれの幹部全員が惰性や古い図式、外延的経済運営への信奉をまだ捨てきれていないことから起こる別の種類の問題にもぶつかった。必ずしも全員が新たな条件下での活動や、第12次5カ年計画期に集約性と質への根本的転換をはかることに対する心構えができていたわけではなかったのだ。こうした気分を克服しなければならなかった、それも基本方向策定作業がすでに急ピッチで進められていた時に、いわば行軍中に克服しなければならなかったのだ。ここで大きな役割を果たしたのが、余力の探究や5カ年計画の張りつめた課題の策定への労働集団の参加であり、共和国、地方、州レベルまでの党組織の積極的姿勢である。

その結果多くの点を正すことができ、今日審議される草案は、中央委政治局の考えによれば、経済成長の加速と同時に、国民福祉の向上、経済力の強化、しかるべきレベルでのわが祖国の防衛力の維持といった戦略課題を解決するという党の綱領的要求に基本的に合致している。

新5カ年計画では、国民所得とあらゆる物的生産部門の生産の増加分が初めてすべてそっくり労働生産性の増大によって達成されるという事実は注目に値する。5カ年計画に予定されている単位生産物あたりの資材使用量の著しい削減によって、節約を追加の物的資源に対する国民経済の必要を満足させる決定的源泉にすることが可能となるだろう。

経済の機構改革、国民経済の優先的な発展方向への投資の集中がこれまで以上に精力的に行われるだろう。重点は、まず第一に、既存企業の技術更新と改修におかれている。機械製造部門、化学、電子、電機の各工業部門が急速に発展する。最新世代の機械・設備の生産や先進素材やテクノロジーの応用が拡大される。

要するに、第12次5カ年計画には効率の方向への大幅な前進が盛り込まれている。しかし、この方向での抜本的な転換をなしとげるためには、努力を弱めてはならない。それどころか強化する必要がある。ここでも計画化と管理、経営方法の改善、事業の組織の改善、すべての部署での規律と責任の強化、大衆の創造的イニシアチブの全面的発展が最重要の意義をおびてくる。

どの程度速く効率への転換が完了し、国民経済の新たな技術的再建が実施されるかが、二〇〇〇年代までの所期のレベルの達成を左右するだろう。今後15年間に、ソビエト政権のこれまでのすべての歳月に蓄積されたものとほぼ等しい規模の経済力をつくり出し、国民所得と工業生産高を約2倍に増やすことが予定されている。労働生産性は2・3—2・5倍に向上する。

これによって、人々の要求の充足に向けられる資源量を倍増させることが可能になるだろう。提出された文書は、その社会計画の実現が今後3次にわたる5カ年計画期にソ連人の生活水準を質的に新しい段階に引き上げることを可能にするとわれわれが述べるあらゆる根拠を与えていると思う。

国内政治においても、国際政治においても解決されつつある課題の規模、奥の深さ、複雑さは、党の指導のレベルに対する新たな要求を提起し、党活動のあらゆる側面に対する新しいアプローチを必要としている。当然のことながら、これらすべてがソ連共産党規約、党の基本法、わが党生活の掟に反映されなければならない。

提案されている規約の改正の原則的な意味はどこにあるのか？

簡単に言うなら、これは一方では、党内民主主義の一層の拡大、共産主義者、すべての党組織、なによりもまず初級組織の創意と積極性の発展であり、他方では共通の問題の解決に対するその責任の増大である。党内生活が多様で充実していればいるほど、あらゆる重要な問題——入党者の受け入れから幹部政策まで——の解決における民主主義が深まれば深まるほど、すべての社会プロセスに対する党の影響はますます強まり、効率的なものになる。

規約ではこの方向で国家機関や社会諸団体に対する党の指導の基本的な原則が明確化されている。これらの機関や団体のそれぞれが自己の機能を完全に果たす使命を担っており、これらの機関・団体の活動に対する党の指導はひときわ目立った政治的性格を帯び、あらゆる環、あらゆるレベルでの国民の社会主義的自治の一層の発展を促進するものでなければならない。提案されている改正は、党員の権威、資格、意義を高め、政治的闘士、大衆のオルガナイザーとしてのその役割、党の総路線と指令の実現に対する責任を高めるのに役立つだろう。

全体として、提案されている規約改正は、実生活の諸要求に応じた新しい要因によって規約を豊かなものにし、試練に耐えた民主集中制の諸原則にもとづく党の組織的強化、国が直面している新しい課題に取り組むソ連共産党

の指導的役割の向上を促進するであろう。

昨日、綱領委員会の会議が開かれた。この委員会が党綱領新稿草案を提出しているわけである。この総会での草案の審議は実務的で有益なものになるものと思う。これは、基本方向草案と提案されているソ連共産党規約の改正についても言えることだ。

提出された諸文書が中央委総会で採択されれば、ソ連共産党第27回大会の準備のきわめて責任ある段階、経済と政治の重要な問題に関する党と国民との大きな、そして直接的な協議の段階が始まることになる。

政治局は、これらの文書を公表し、それらを党員集会、地区、市、州、地方の協議会、連邦構成共和国の共産党の大会で広範に審議し、基本方向草案も労働集団、学校、軍の諸部隊、社会諸団体の会議でやはり検討することを提案している。各級ソビエト、労働組合、コムソモールも言うべきことを言う使命をもっている。幾百万のソ連人――党員と非党員――の全党審議、全国民審議への参加は、将来に向けた党の方針をよりよく検討し、すべての階級、すべての国民層の意思、利益、必要をより十分に考慮に入れることを可能にする。

審議の過程でわれわれが保障しなければならない最も大切なことは、実務性と具体的で実際的な問題の解決への方向づけである。集会や討議が外見を飾ったり騒ぎ立てたり、やたらに形式だけを整えたりすることなしに内容豊かに行われるよう努めねばならない。党、国家、経営体の指導的幹部は、それに最も積極的に直接参加する義務がある。

労働集団、その末端の部署と作業班、畜産場、実験室が大会前の文書の学習と解説の全活動の中心とならねばならない。ここでは、われわれの事業、巨大な余力の活用、資源の節約利用、現存する欠陥の克服、先進的な経験の普及について、対象をきめて話し合いを展開しなければならない。ソ連人の一人一人が党の綱領的目的と課題、その内外政策の本質を良く理解し、自分の日常の仕事をそれに結びつけることができるように努めることが重要だ。

言い換えれば、最初から審議に創造的な性格を与えなければならないのだ。われわれの発展の緊要な諸問題への革新的なアプローチをめざし、時代遅れとなって前進を妨げているすべてのものの断固たる克服をめざす中央委員会の路線は、勤労者の完全な支持を得ている。われわれは全国民の意思と創意に依拠しつつ、今後ともこの路線を首尾一貫実施していく。

大会前の諸文書が反響、提案、投書の波を引き起こすことは、疑いない。大きな国家的な規模の意見と並んで、具体的な問題も提起され、党、ソビエト、経営機関の活動に関する苦言も述べられるであろう。有益な考え、提案を一つとして無視してはならない。重要なことは、文書の審議の過程で勤労者が、自分たちの批判的なシグナルが聞き入れられ、自分たちの提案に関してしかるべき措置が講じられつつあることを知ることなのだ。これは、われわれにとって原則的な問題である。

基本方向の作成作業の経験を利用しつつ、それらの審議と同時に5カ年計画の作成を展開すべきであろう。そうすれば、大会後すぐに5カ年計画を検討し、承認することが可能となるだろう。

大会準備の最終段階はマスメディアと宣伝機関に高度な要求を提起している。これらは審議の全人民的演壇となり、大衆のアイデア、意見、経験を吸い上げ、それなくしてはあらゆる計画の実現が不可能な高い労働意欲や思想・道徳的心構えをつくり上げる使命を担っている。

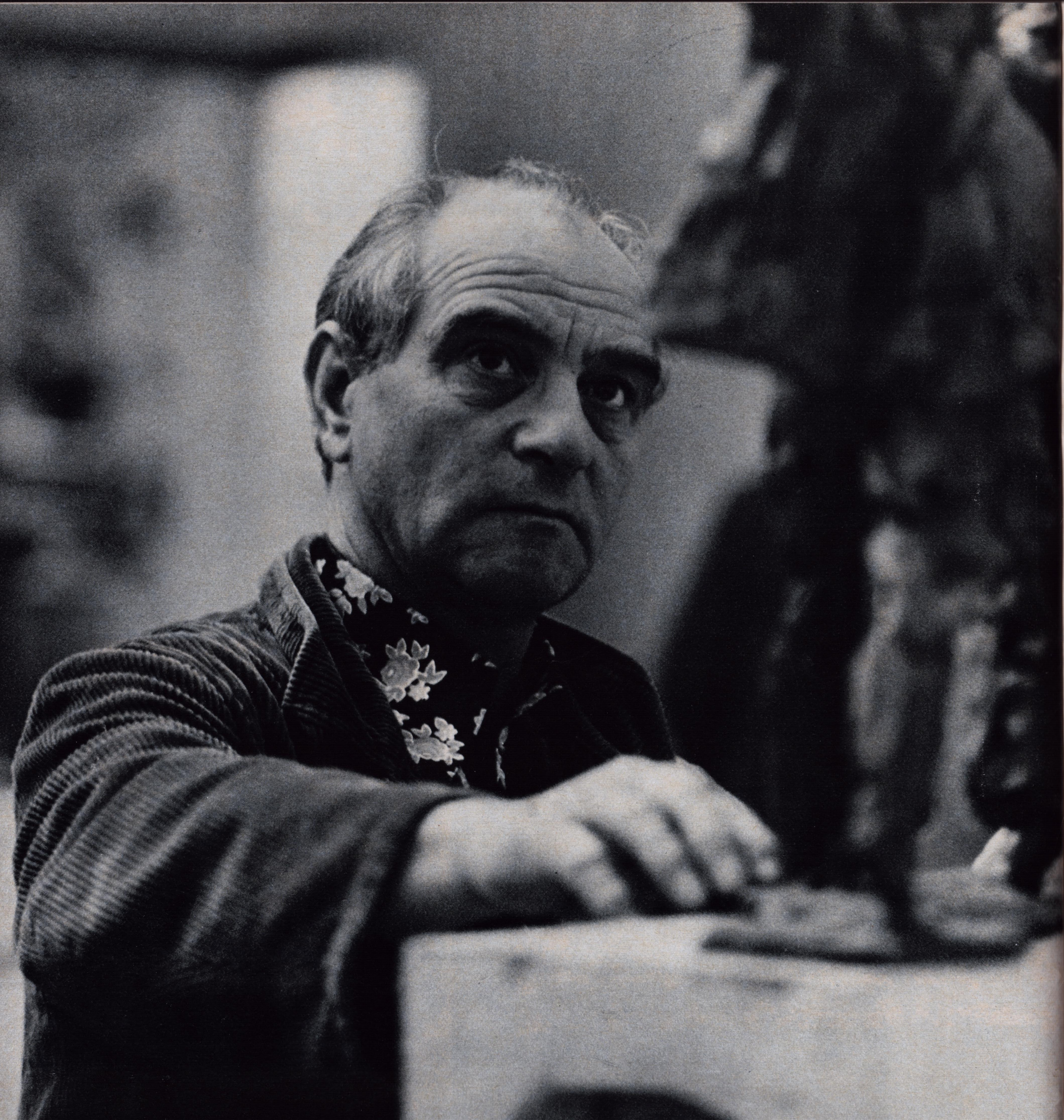
作成された諸計画がいかに人を奮い立たせるものであっても、張りつめた生産性の高い労働によってのみ予定されたレベルを達成できるのである。今日、ソ連人一人一人の、すべての労働集団の、すべての党組織の具体的な行動がとくに必要である。より積極的に行動する時期がきている。これが今日最も大事なことである。党、ソビエト、経営、労働組合の各機関はすべての力、われわれのすべての資源と可能性、なによりもまず人的要因を当面する課題の首尾一貫した遂行に動員する義務がある。

われわれは、こうした行動を開始した。重要な決定が採択され、経済、社会、イデオロギーの分野で大きな措置が講じられている。今後とも策定された政治路線の精神で行動し、定められた方針に絶えず従っていくことが必要だ。あらゆる面での規律と秩序を強め、精神的、物質的刺激を積極的に利用し、大衆のイニシアチブと創造に大きな余地を開きながら、今後とも前進運動のテンポを速めていくことが重要だ。

すべての組織的、政治的、経済的努力、労働集団の全エネルギーを、今年度をも5カ年計画全体をも最高の結果で終わらせ、わがレーニン党の第27回大会をそれにふさわしく迎えることに集中しなければならない。いま、このことは実践的にも政治的にも最も焦眉の課題である。

歴史の経験が納得のいくように示しているように、人民の幸福という至高の夢は、たとえそれが天才のものであっても、数百万人の理性と心情をとらえない限り、依然として崇高な夢にすぎない。先進的な思想は人民大衆の財産となった時に進歩の強大な原動力に変わる。

レーニン党の政策、その理性と良心は、国民が意識していること、その考え、願望と期待を正しく反映している。われわれは、党が献身する共産主義の偉大な事業が打ちかちがたいものであることを確信している。



制作中のミハイル・アニクーシン

平和の願いを彫る

――彫刻家ミハイル・アニクーシン

本誌記者　ニコライ・シェホフ



6月1日、長崎市平和公園での『平和』の像の除幕式で。右から横山利秋・日ソ親善協会理事長、V・デニソフ・在大阪ソ連総領事、本島　等・長崎市長、作者のM・アニクーシン、V・アルハンゲリスキー・ソ日協会副理事長（イズベスチヤ紙編集局次長）。

今年6月1日の国際児童擁護デーに長崎市の平和公園で、著名なソ連の美術家ミハイル・アニクーシン作の彫刻『平和』の像の除幕式が行われた（本誌14号で既報）。本号ではこの優れた彫刻家とその作品についてご紹介しよう。

社会主義労働英雄でレーニン賞受賞者のミハイル・アニクーシン（68歳）の名は、ソ連の美術界でほぼ30年のあいだ注目を集めてきた。彼の彫刻作品は生まれ故郷のレニングラードと深くつながっている。同市にあるロシア美術館に行った人は誰でも、正面の芸術広場に立つ見事なアレクサンドル・プーシキン像の前で思わず立ち止まることだろう。アニクーシン作のこの像はロシアの大詩人プーシキンの最も優れた像の一つに数えられている。彼のほかの作品もレニングラードを飾っている。モスクワ広場のレーニン像、レニングラードの英雄的防衛者のメモリアル、レニングラード出身の名優ニコライ・チェルカソフの像。これらはソビエト芸術の貴重な財産である。

アニクーシンの作品の特徴は何か。何よりもまず人間の精神世界を明るみに出す繊細な心理主義と高い彫塑術だろう。彼の作品のモデルからは心のおののきと、ある種の鋭敏な、内なる神経を感じとることができる。これが他の多くの彫刻家からアニクーシンを際立たせている記念碑の作風である。

「彫刻で私がいつも心にかけているのはその壮大さではなく、そこに込められた思想の明確さと深さ、フォルムや均衡、リズムの精密さです」と、ミハイル・アニクーシンは言う。「芸術が喜びをもたらすためには、芸術に対し真摯になることです。作家によって作風はそれぞれ違っても、思想はつねに正しくなくてはなりません。そうすれば作品は作者独自のものとなり、ほかの誰かの作品と間違えられることはなくなります」

……私はアニクーシンの仕事ぶりを見せてもらった。作品に向かうときの彼は別人のようになる。精神を集中し、口をきかなくなる。いまや全創作エネルギーは彼の両手の中にあった。それは長年にわたって、何の変哲もない粘土に生命を吹き込んできた力強い、熟練した手だ。アトリエではモスクワ近郊メリホボ村のチェーホフ記念館用にこの大作家の像が制作中だった。像はもう出来上がっているように見えたが、彼は何度も作品に近づいては、眺めまわし、何か手直ししている。

「私のチェーホフは健康をとり戻しつつある時のチェーホフです。いままでは病気だったのです」と言って、アニクーシンはたくさんのチェーホフ像のひな型が並んでいる方へ行った。

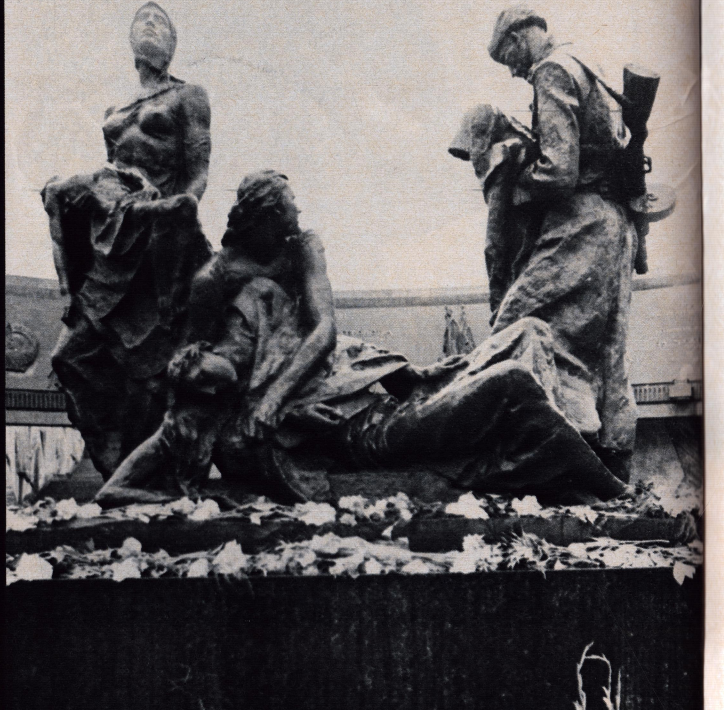
そのちょっと向こうにはアレクサンドル・プーシキンやロシアの偉大な神経心理学者で精神病医だったウラジーミル・ベフテレフ（一八五七—一九二七）、ソ連の名バレリーナ、ガリーナ・ウラノワらの石膏像、レニングラードの英雄的防衛者たちのたくさんの像がある……広いアトリエも、数多い彫刻のせいで狭く感じられる。ひな壇にずらりと並べられた半身像、彫像、立像などの作品群のそばを通ると、これが全部一人の人間の作品とは信じ難い。





『1941—1943年のレニングラードの英雄的防衛および1944年のレニングラード近郊でのドイツ・ファシスト軍の壊滅をたたえるモニュメント」（彫刻M・アニクーシン、設計S・スペランスキー、V・カメンスキー）



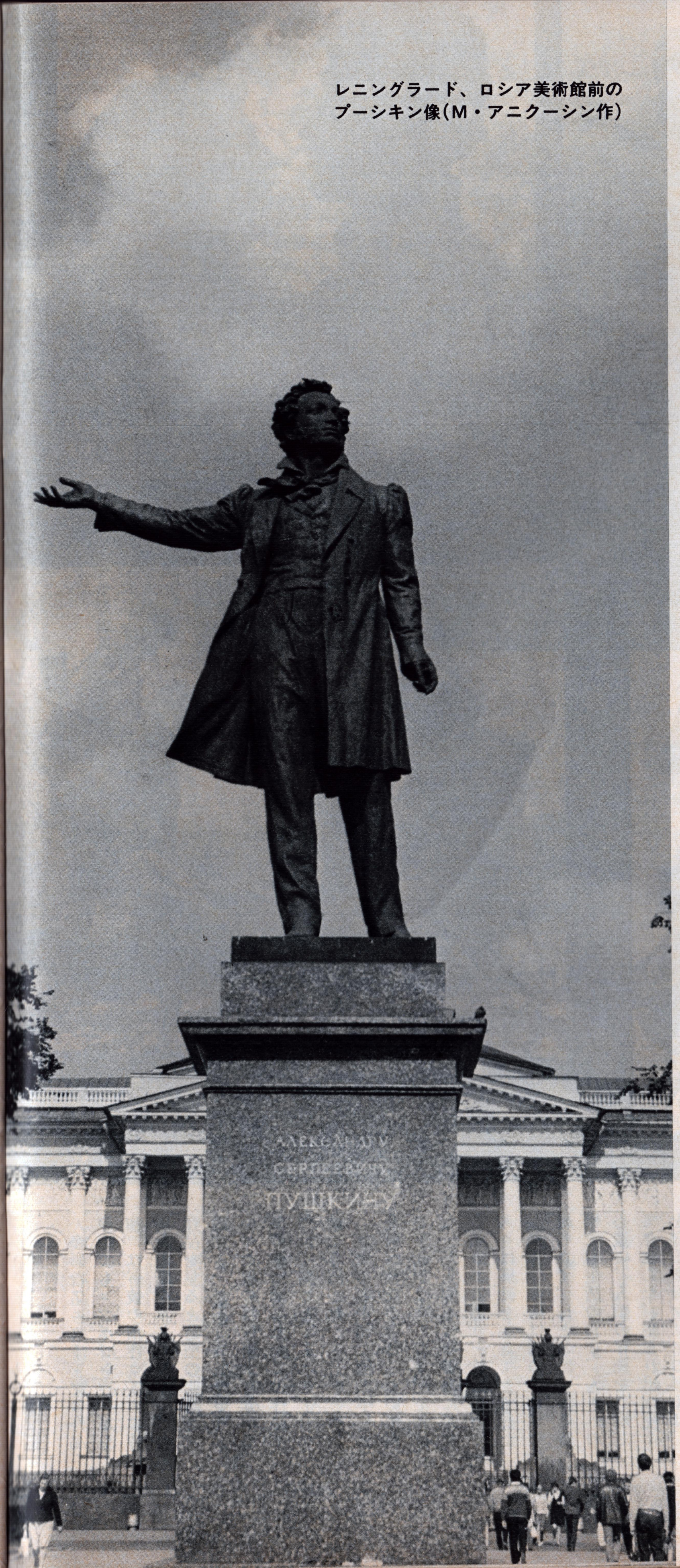


多彩なアニクーシンの作品の中でもコンポジション『平和』は、彼の創作コースの特別な段階を示している。この作品を見ると造型の明確さ、簡潔さ、霊感性、叙情性といった彼の特徴がよく分かる。長崎市に贈られたこの作品について聞くと、アニクーシンはこう語った。

「長崎市の平和公園の中心は北村西望氏のすばらしい彫刻『平和記念像』です。それはもう35年間も侵略勢力に対する威厳ある怒りと抗議の力で人々に感動を与えてきました。『平和』の像は別のタイプに属します。母と子はいつの時代でも生活の喜び、人々への心遣い、人類の存続を具現してきました。生まれ出た生命を守る聖母マリアの形象は、地上の美の勝利をたたえる芸術家たちを何世紀もの間ひきつけてきたのです」

——あなたがあの彫刻で訴えたかったことは？　あの作品の何がわれわれ両国民に身近に感じられるとお考えですか？

「生命に打ち勝つことはできない、ただ絶滅することはできる——これが私の作品の底



レニングラード、ロシア美術館前のプーシキン像（M・アニクーシン作）

を流れる思想の一つです。日本国民は核攻撃の恐怖を、ソビエト国民はファシズムの恐怖を身をもって体験しました。私たちは生命のシンボルである母と子が決して放射能を発する灰にならぬよう共に全力を尽くさねば、と思います」

……レニングラードと長崎は数千km も離れている。しかし二都市の運命には共通したものがたくさんある。第2次世界大戦中両都市は壊滅の脅威にさらされた。ファシストたちはレニングラードを地上から抹殺しようとした。だが彼らは市の防衛者たちの堅固な意志を打ち砕くことはできなかった。愛するまちを防衛する第一〇二狙撃大隊の隊列の中には、ミハイル・アニクーシンもいた。戦争中のそうした出来事に自ら関与したことが、戦争の非人間性、戦争根絶の必要性をこの彫刻家に特に強く感じさせるのである。

この感覚は原爆の悲劇を体験した人々の感覚に近い。だから平和とヒューマニズムを賛美するレニングラードの彫刻家の作品が長崎で大きな関心をもって迎えられたことは偶然ではない。彫刻家アニクーシンは訪日のさい、日本の数都市を訪れ、市民の前であいさつした。彼は力をこめて言った。

「私が日本の方々に言いたかった主なことは、ソ連は誰をも脅かしていないということです。自分たちと同じような人々を絶滅しようとすることは蛮行であり、ばかげたことです。わが国では戦争宣伝は憲法で禁止されています。われわれ芸術家は、人々に美を示し、美を主張することによって、悪と闘わなくてはなりません。これがわれわれの最も重要な課題です。日本に据えられたコンポジション『平和』の像が核破局の脅威に反対する諸国民の正当な運動への私なりの寄与となれば幸いです」

ソビエト農業の潜在力

——ソ連科学アカデミー農工コンプレクス問題学術会議副議長ユーリー・ブイストラコフ経済学博士に聞く



——西側ではソ連の"農業危機"をうんぬんする声がやまないが、それ相応の根拠があるのか？

FAO（国連食糧農業機構）のデータによると、ソ連は食料品の消費水準では世界でも先進国に入っている。農産物の生産と作付面積の構造改善は、"農業危機"とは関係がなく、食構造の改善によって必要になってきたものだ。ソ連と米国を単純に地理的に比較してみると、米国の主要農業地帯は北緯34度と48度のあいだにあるが、ソ連の主要農業地帯はそれよりはるか北の、48度から60度のあいだにあることが分かる。つまり、ソ連の農業ははるかに気温の低い条件下で行われており、このために、食糧、飼料、工業原料用作物の種類を増やす可能性はソ連では非常に小さい。ソ連の作付"メニュー"（面積の配分）では米国と比べてトウモロコシ、大豆、高タン白質牧草の作付面積が少ない。トウモロコシの生産を増やすことができれば、穀物の自給問題や濃縮飼料の需給バランス問題などはもっとうまく片付いてしまうはずである。また高タン白質農作物である大豆（大豆にはタン白質が利用しやすい形で45％も含まれている。小麦の粒には12—16％しかない）を必要量生産できれば、現在畜産業に見られるようなタン白質の供給不足はなくなってしまうはずだ。周知のように、米国の農産物輸出収入の大部分は実にこの大豆によるものなのだ。農作物の作付計画をうまくやりくりしようとしても、作物の生育可能期間の長さの制約を受ける。この点でも米国と比較するとソ連は不利だ。たとえば、作物の生育可能期間が一七〇日の地域はソ連の場合は全耕地の15％だが、米国は70％もある。

まだある。降雨量はどこの国でも農業の生産力を決める根本要因の一つになっている。たとえば、年間最低降雨量を四〇〇mmとすると、ソ連の耕地の50％は最低降雨量がそれ以下の地域だが、米国はそういう地域はわずか11％だ。ソ連の、穀物地帯を含めた農業地帯の半分以上は降雨量が足りない地域にあり、八〇〇〇万ha以上の耕地が降雨量の多すぎる地域にある。

こんなわけで、（気温、降雨量、土地の高低、表土など）いろいろな要因を総合してみると、ソ連の農業地域の自然的・気候的潜在力は米国の$\frac{1}{2}$以下であり、英国、ドイツ連邦共和国、デンマークの約$\frac{2}{3}$である。したがって、残りの条件がすべて同じだとしても、ソ連は客観的に見て生産物の単位当たりの支出がどうしてもずっと大きくなる。最近3回の5カ年計画のあいだだけでも、農業向け投資はほぼ五〇〇〇億ルーブルに達している。

——ソ連の農地の潜在力とその利用をどう評価するか？

ソ連の総面積は二二億二七五〇万haで、国民一人当たり平均8・1haとなる。だが、国土の約50％は永久凍土帯にあって、そこでは家庭の必要を満たすだけのごく小規模な農業が行われている。一億一〇〇〇万haを上回る沼沢地、一億ha以上の含塩地、国全体の作付面積よりも広い砂漠、山、森林地、湖、都会地を国土総面積から差し引くと、社会化農業生産（コルホーズ＝集団農場とソフホーズ＝国営農場による生産）に利用されている土地はだいたい五億五〇〇〇万haということになる。この内訳は耕地二億二七〇〇万ha、草刈り地三五〇〇万ha、牧場二億九〇〇〇万haである。つまり、ソ連では国民

1人当たりの耕地は0・83haということになる。

この数字は大きいか、それとも小さいか。食糧用農産物と工業原料用農産物から製造する消費財を国民に十分供給するのに必要な最低限の耕地面積は一人当たり0・27―0・33haだ。だから、耕地はまあ十分であるはずだ。だが、余裕分が0・5haあるからといって、それは土地を無駄使いしたり、あるいはこれまでのようにただ作付面積を増やすことのみによって農業生産を伸ばしていいということではない。

――現段階でソ連の農業政策が提起している新しい課題は、土地改良事業を大規模に展開することで、これが国の食糧備蓄量をさらに伸ばす基礎だと見られている。だが、これまでだって土地改良はやってきたではないか。

一九六六年以前は土地構造の量的変化が主だった。土地改良事業を含む農地の質的変化は限られた規模のものだったが、これは当時の国家の経済力のせいであった。ソ連共産党中央委5月総会（一九六六年）は大がかりな土地改良計画を立てた。それ以来この目的にすでに一一五〇億ルーブルの資本投下が行われた。この間に灌漑地・干拓地の面積は一七〇〇万haから三三〇〇万haに伸びた。

新灌漑地・干拓地の農作物生産額は、一九八三年には一九六五年の六〇億ルーブルに対して一六〇億ルーブルを上回った。灌漑・干拓による増収分が農作物全体に占める比重は20%から33%に増えた。

土地改良をした農地での年平均穀物生産量は現行5カ年計画中に一九六六―七〇年期に比べてほぼ3倍に増えた（一九八三年は二〇〇〇万t以上）。綿花の生産はこの数年のあいだに一九六五年の五七〇万tに対して九〇〇万tを超えた。現在では綿花と米は全部、野菜は75%、果物・ブドウは約50%、穀粒用トウモロコシは約40%が新灌漑地と干拓地で収穫されている。また土地改良によって飼料の安定した増産ができるようになる。昨年は灌漑地と干拓地での飼料の生産は約三七〇〇万tだったが、この数字は一九六五年のほとんど6倍である。

――土地改良をすれば、いずれにしても土壌の構造が変化し、耕耘機の利用が制限されることになる。こうした点を経済学者はどのように計算に入れているのか？

土地改良をすれば、経済的価値の低い用地（たとえば牧場）を畑に転換して、用地の効率を高められる。新灌漑地・干拓地では純然たる休耕地を設ける必要がなく、事実上畑はその面積全部に作付けされる。

耕耘機の利用が制限されるというのは、誤解だ。話はあべこべで、土地を改良すれば、耕耘機を利用する余地がずっと大きくなり、畑やそのほかの農業用地の細分化がなくなる。その最も特色のある例はベロルシアだ。一連の州で土地改良を実施する以前は畑の大きさは1―10haのものが多かった。現在は干拓農地の総面積の半分以上が25ha以上の畑、1/3強が40ha以上の畑である。耕起幅の大きな耕耘機を使うことによって耕耘機の利用度を高める大きな可能性が生まれるわけだ。

これと同時に、まだ欠陥や手ぬかりも少なくない。土地改良投資の回収率は依然まだ低い。その原因は実に種々様々である。土地改良施設の性能が悪いこと、修理予定ダイヤを守らないこと、土地改良作業の科学的裏付けが不足していること、農業技術上の基準を守らぬために土壌の化学成分がめちゃめちゃになり結局農作物の収穫不足をきたすことなどだ。最も深刻な欠陥は、土地改良施設の操業水準が低くなってしまったことだ。技術上のずさんさや熟練した人員が足りないために、灌漑すべき農地の一部に水が行かなかったり、新灌漑農地が全然利用されなかった例がある。また干ばつ地域の一部では灌漑すれば穀物の収穫率は上がるには上がるが、大したものにはならないところがある。こういう場合増収分のコストは非常に高くつき、土地改良費の実質的な回収が長引いて何十年もかかった。

――地力とか、土地の経済的価値ということは、ソ連では一般にどう定義されているか？

土地の登録、土地の評価は行われているが、役に立つような土地台帳はわが国にはまだない。そして、多くの場合われわれは旧態依然として土地を、経済学の立場からすれば抽象的な〝物理的単位としてのヘクタール〟で考えている。

ソ連では土地の計画的管理方式と、かなり完全な土地利用方式とが全国的に行われているにもかかわらず、黒土地帯やそのほかの耕地に工場を配置したり建設を行ったりする事例が知られている。もちろん、工業、交通運輸、都市や都市型集落を発展させるには、かなり大きな面積の農地をそのために割かなければならなかった。ところが、これまでも、また現在でもそういう目的の用地を供給してきたのは、原則として、人口が密集した農業地帯なのであって、そこから、国民一人当たりの耕地面積も小さくなってくるのである。

農業自体にも問題が多い。ソ連共産党中央委4月総会（一九八五年）は、農作物の進歩的な生産技術を広く導入する必要がある、と指摘している。

――ソ連共産党中央委10月総会（一九八四年）で土地改良長期計画が採択されたが、これは実質的には、土地改良事業の対象となる地域の不利な自然条件を根本的に改良するために実施される種々の技術的対策、経済的対策、法律的対策の総合システムだ。この計画はどう実行されているか？

ソ連は土地改良施設を建設した大きな経験がある。フェルガナ運河（ウズベク共和国）の建設、ゴロードナヤ・ステップ（カザフ共和国）の開発、カラクム運河（トルクメン共和国）の建設、ポレーシエ地方（ベロルシアとウクライナの国境地域）の干拓事業、非黒土地帯（ロシア連邦共和国欧州部）の農地の生産力引き上げ事業などをあげれば十分だ。土地改良事業で大きな経済効果が上がっている個々の農業経営だけでなく、地域全体としてその恩恵を受けている場所も多い。たとえばカラクム運河地帯のように、以前は利用されなかった土地が運河など土地改良施設の建設で集約的農業に利用されるようになっている。北クリミア運河の第1期工事が完成しただけで、クリミアの二三万九〇〇〇haが灌漑され、降雨量の少ないステップの六〇万haに給水できるようになった。さらに、北クリミア運河ができたおかげでケルチ半島の複数の都市と集落の給水問題が解決した。

ベロルシア共和国コレリチ地区の各農業経営は、土地改良ずみ農地から1ha当たり穀物3・5―4t、ジャガイモ20・2tの収量を上げているが、土地改良作業費がまだかなり高い。また、レニングラード州ボロソボ地区の〝キケリノ〟ソフホーズのha当たり干拓費は一五〇〇―二〇〇〇ルーブルであるが、非黒土地帯の平均干拓費はha当たり一五〇〇―一六〇〇ルーブルだ。運河建設などの灌漑経費はもっと高い。したがって、まず第一に、投資分の回収をもっと早くしなければならない。

投下した資本を早く回収するために、いろいろな作物の作付面積の最適構成を立案すること、畑別、作物別の作業チャートをつくること、水利施設の建設工事に現代的技術手段を装備させることなどが見込まれている。

かつて工業はばらばらの単品で農業機械や道具を農村に供給していたが、いまは完全なセットの技術コンプレクスがつくられている。そのなかには土地改良事業専門のものもある。設計技師たちには農業機械や道具の基本データ（有効作業幅、効率、重量）を決める際、土壌の特性やそのほかの農地の技術的特徴を考えるという課題が課せられている。わが国では同じ一つの自然・気候地帯のなかでも土壌の特性などにいろいろ違いがある。いろいろなデータを科学的に集計して初めて、広い範囲におよぶいろいろな地域で使う具体的な機械の生産・供給計画の作成に移れる。これは経済的にきわめて有利である。

土地改良長期計画のなかには各省庁に対する詳細な課題が定められ、そのための必要資金の支出が予定されている。またそれ以前に行われた仕事のマイナスの結果も計算に織りこんで、それをなくす具体的対策がつくられた。

ソ連共産党のM・S・ゴルバチョフ書記長は一九八五年9月7日ツェリノグラード市の党・経済活動家会議で演説し、農工コンプレクス発展の機の熟した諸問題について党が下した決定事項を実行する作業はあらゆる方面で進んでいると指摘した。農業とその関連部門を発展させる問題は全国民的課題として検討され、農村の注文は最優先でかなえられている。一九八三―八四年の統計データによると、農産物の生産額は現5カ年計画中の先行諸年度より二二〇億ルーブル、すなわち9%増加した。穀物、ジャガイモ、ビート、野菜、果実類の収穫が増えたためだ。このあしかけ2年の間に赤字経営の数がぐんと減り、それに反してコルホーズとソフホーズ生産の採算性のレベルが全体として上昇した。

これと同時に指摘されたことは、科学的に裏付けられた基準どおりに食料品を国民に供給する問題や、工業原料用農産物を工業に供給する問題を早急に解決することは、農工コンプレクスがその総力を効率よく発揮することと切っても切れない関係があるという点だ。われわれの最も貴重な資本の一つである土地資源を合理的に利用すること、灌漑地・干拓地を細心に取り扱うこと、地味を絶えず高めること、これらが食糧計画の実現に成功するカギである。



著者

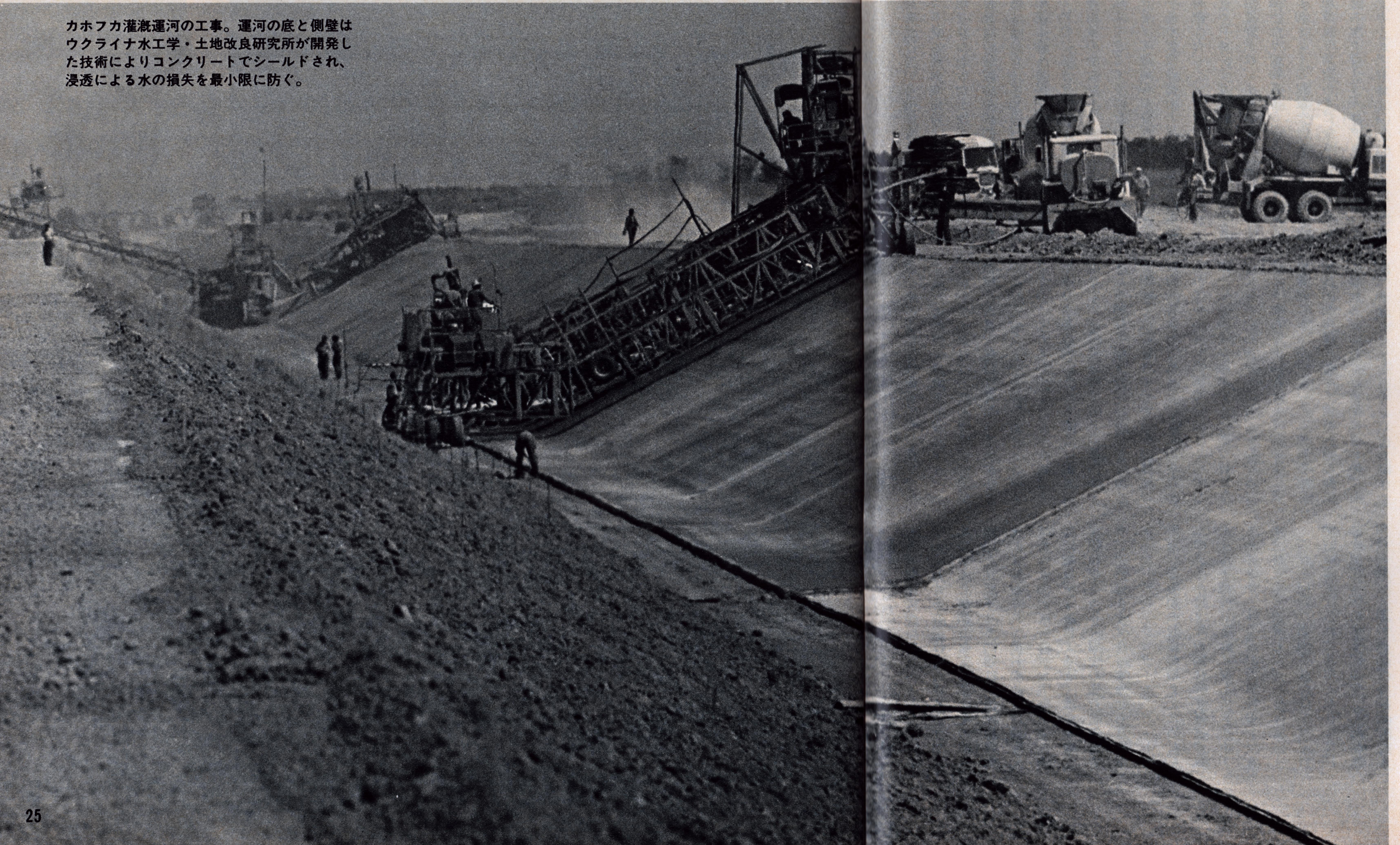
安定した農業を保証する灌漑

教授、ウクライナ水工学・土地改良研究所長 ピョートル・コワレンコ
カメラ I・コスチン

ウクライナはソ連欧州部ではロシア連邦共和国に次いで面積と人口で2番目に大きい共和国。そのウクライナの南部は極めて肥沃な黒土地帯である。しかし、水がなければ、黒海に面したこの肥沃なステップ地帯も、炎熱でひび割れた土地が広がり、その上を熱風が駆けぬける場所となる。干ばつにしばしば襲われるため、ほんの20年前にはこの地帯全域が農業不安定地帯と見られていた。しかし、今ではここに大規模な水工施設が誕生した。カホフカ灌漑システムの新規着工分が工事中だが、このシステムは最終的にはこの種の施設として世界有数のものになり、約八〇万haの農地をうるおすことになる。これに続くのがアゾフ海沿岸灌漑システムで、灌漑面積は八万ha、将来は二五万haになる。これらの運河網の取水源は、欧州の大河の一つでウクライナの水の大動脈ドニエプル川である。ドニエプル川が黒海に流れ込むドニエプル湾では、興味深い水工プロジェクトが実施されている。湾は長さ2・5km以上の土の堤防で締め切られる。堤防はドニエプル川へ黒海の塩水が入るのを防ぐ。というのは、ここでは珍しくない暴風が海水を川の中へ押し上げるため、河口では川の水は飲料水や灌漑用水に適さなくなるからだ。堤防が完成すれば下流部でもドニエプルの水を灌漑に広く利用できるようになり、八〇億立方mの水によって約一〇〇万haの農地の灌漑が可能になる。

南ウクライナは欧州で最も水の乏しい地域なので、大規模な灌漑システムがあると言っても、水を節約する問題は決してなくならない。運河を流れる水の浸透による損失はここでは最小限に防がねばならない。われわれの研究所では運河の底と側壁をコンクリート、ポリフィルム、その他の材料でシールドするさまざまな技術を定着させた。今日ではわれわれは暗きょ型の用水路しか作らない。水は畑にスチール、プラスチック、アスベストセメント製のパイプで送られる。われわれは地下灌漑、滴下式灌漑の一連の方法を開発した。地下灌漑はパイプを地表から50—80cmのところに敷設しなければならない。滴下式灌漑では水分は特別の適量ノズルで直接、根のところへ届けられる。こういった現代の灌漑方式によって水の消費量を数分の一に減らすことができる。

水の節約と作物の収穫率向上の見地から大事なのは、どのように灌水する



カホフカ灌漑運河の工事。運河の底と側壁はウクライナ水工学・土地改良研究所が開発した技術によりコンクリートでシールドされ、浸透による水の損失を最小限に防ぐ。



稲は水を大量に必要とする作物。大規模な土地改良事業により、南ウクライナでも稲作が効果的に行われるようになった（写真はヘルソン市にある灌漑農業研究所の試験圃場で土壌の水分含量を測定する研究員）。



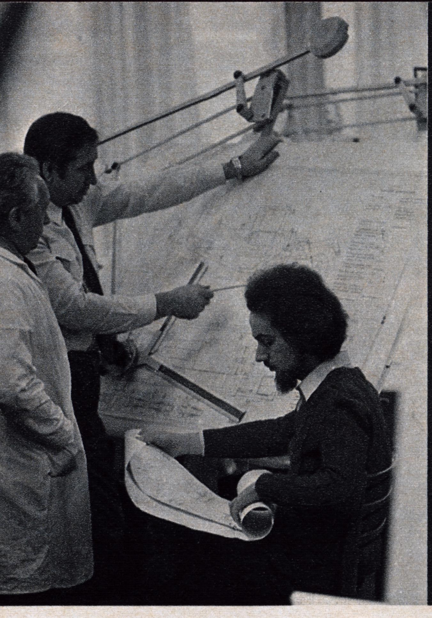
南ウクライナはもともと乾燥地帯。しかし、この銀色の水しぶきが上がるところでは小麦が豊かに実り、トウモロコシが勢いよく伸びている（写真はヘルソン州の畑で使われているスプリンクラー）。

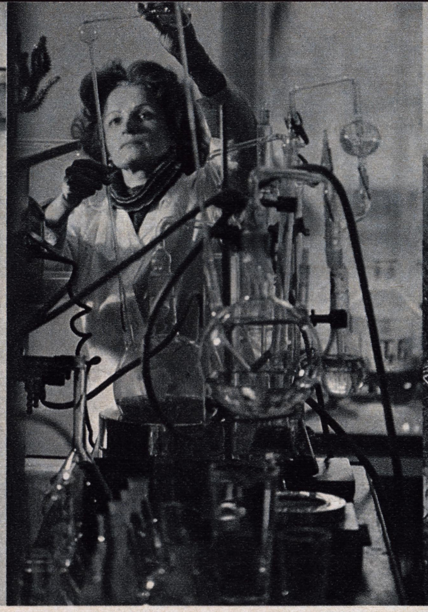
▼
灌漑されているこの畑では、どんな日照りでも高い収穫がある（写真は追肥の空中散布）。





ウクライナ水工学・土地改良研究所の水文地質学実験室。ここでは灌漑の影響で起こる自然のプロセスをシュミレーションし、水利施設の建設で土地改良関係者に助言をしている。







かということだけではなく、いつ灌水するかということでもある。すでにわれわれの灌漑システムの六五万haは、コンピューターによって管理されている。いわゆる情報・助言システムのコンピューターが作物の発育相、土壌中の貯水量、蒸発のレベルを考慮し、これらの資料にもとづいて灌水時期を助言し、最適の灌水方法を見つけだす。このような自動化システムは灌漑の管理だけでなく、排水によって洗い流される肥料分と作物によるその消費量を考えて施肥についての助言もできる。

目下われわれは、ドナウ川、ドニエストル川、南ブーグ川、ドニエプル川の水系を一つに結びつけるコンピューター管理の灌漑コンプレクスの建設を計画している。工事は一九九〇年に始まる。この施設により南ウクライナの安定農業地帯は大幅に増えることになる。こうして紀元二〇〇〇年までにはウクライナ共和国の土地改良ずみ農地は1倍半に増大する見込みである。

上右　土地改良施設の設計と建設は測量作業から始まる。写真は将来の灌漑・排水運河の路線を調べる測量隊員。

上中　ウクライナ水工学・土地改良研究所の水化学分析実験室で行われている土壌の研究

上左　新しい給水管敷設機の設計図を検討するウクライナ水工学・土地改良研究所の設計陣



灌水農地用にウクライナの育種学者は穀物、野菜、飼料作物の高収量品種の開発に取り組んでいる。写真は灌漑農業研究所（ヘルソン市）の試験圃場でテスト中の灌水農地用の各種大豆。

集約化路線を直進する “新生活”コルホーズ

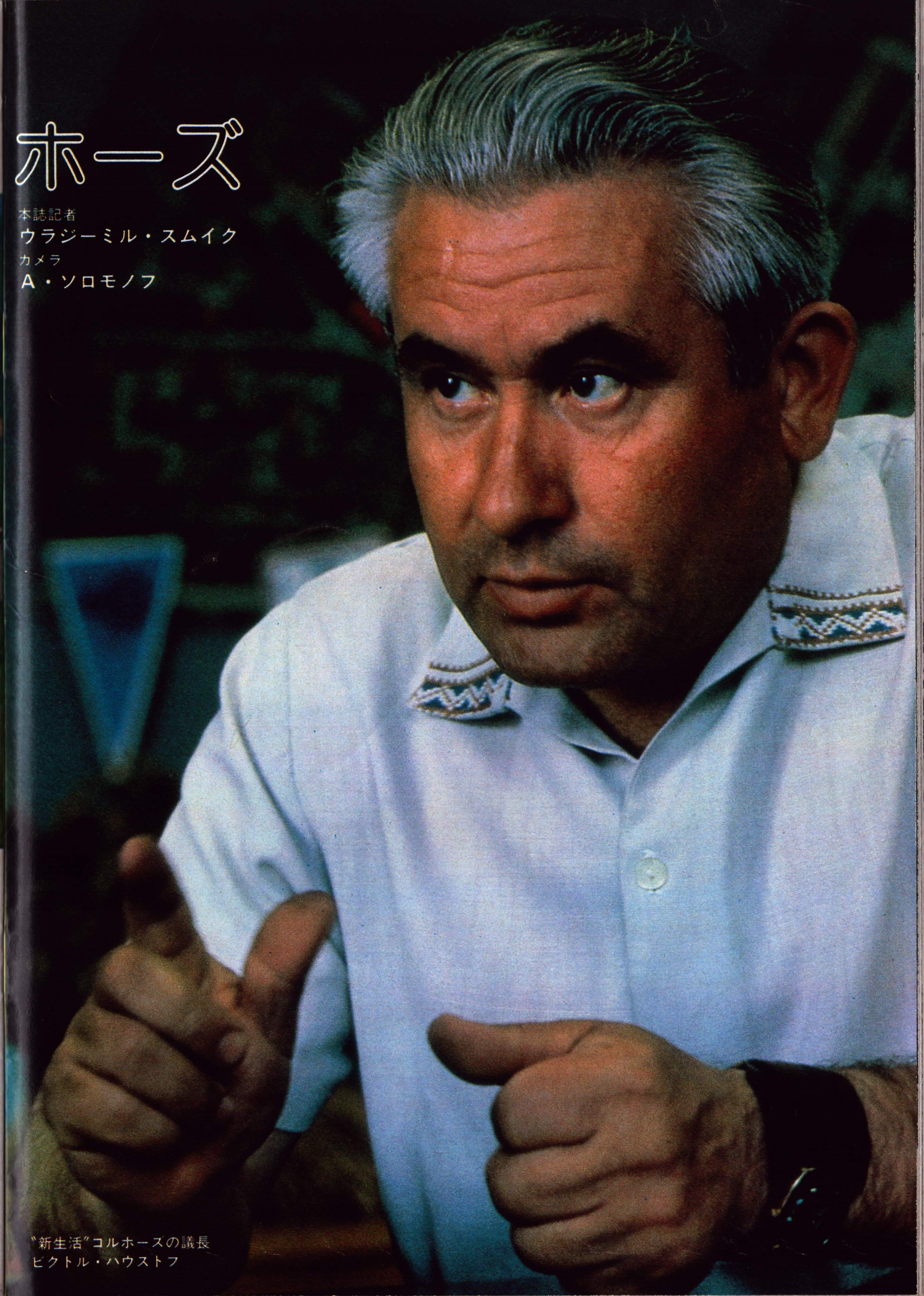
本誌記者
ウラジーミル・スムイク
カメラ
A・ソロモノフ



▲村の新しい家並み



畜産場で牛乳の脂肪分を検査する係員



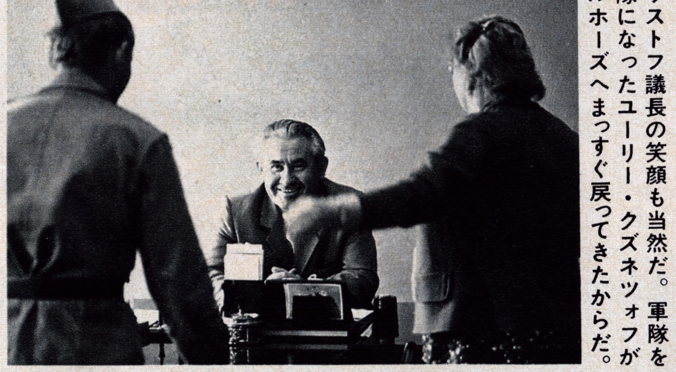
“新生活”コルホーズの議長
ビクトル・ハウストフ

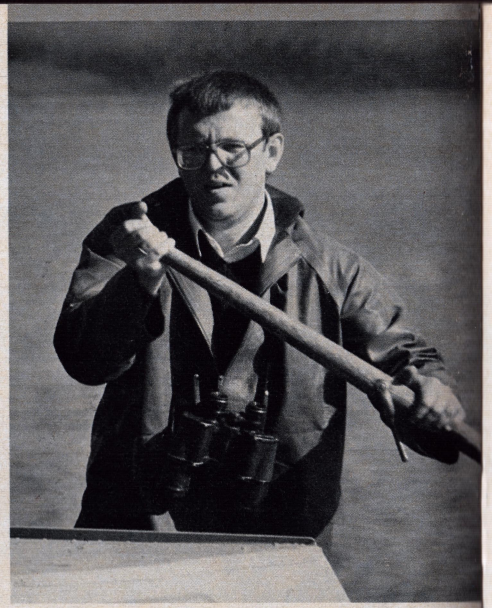
〝新生活〟コルホーズ（集団農場）では一九八〇年に議長のイワン・セミョーノフが亡くなった。セミョーノフは30年にわたりこのコルホーズを指導していた。セミョーノフのもとで〝新生活〟コルホーズはツーラ州（モスクワの南約二〇〇㎞）でも最優秀の経営状態のコルホーズとなり、ソ連最高の勲章——レーニン勲章を受けた。セミョーノフは権威のある人で、ソ連最高会議代議員にも選ばれた。コルホーズ員たちは彼を慕っていたので、葬儀のあと、コルホーズにイワン・セミョーノフの名を記念することに決議した。それから新しい議長の人探しに取りかかった。

コルホーズ員たちの白羽の矢が立ったのは、州の農業研究所の技師長で博士候補のビクトル・ハウストフだった。州の農業研究所は新しい種子の試験と進んだ農業技術の開発をしている機関である。

新議長が活動を開始した時期は、国の農業政策に若干の変更が加えられた時期と一致した。八〇年代の初め、国はコルホーズとソフホーズ（国営農場）の農業生産をこれまでとは別の方法で刺激することに決定した。畜産と耕種農業の主要生産物の買上価格を20—30％引き上げることにし、その代わり、コルホーズが計画を超過して生産したものを供出する時に付けていた割増価格を廃止したのだ。〝新生活〟コルホーズは新制度にすぐに適応することができず、コルホーズの所得は八〇万ルーブル（1ルーブル約三〇〇円）にまで落ちこんだ。これまでの15年間の最低水準だった。

ハウストフ議長は考えた——「コル


ハウストフ議長の笑顔も当然だ。軍隊を除隊になったユーリー・クズネツォフがコルホーズへまっすぐ戻ってきたからだ。


コルホーズの養魚場を1年前から担当するアレクサンドル・レベチュク。養魚場の年間水揚げ量は彼が担当してから1.5倍に増えた。

ホーズがこれまで通り裕福であり続けるためには、もっと多くの穀物、食肉、牛乳を生産する必要がある。そしてこれらのものをもっと生産するためには、作物の収穫率と家畜の生産性を高める必要がある。収穫率と生産性を高めるために必要なのは……一体どこでこの〝ためには〟と〝必要がある〟は終わるのか？ どこへ行きつくのか？何から出発したらいいのか？」

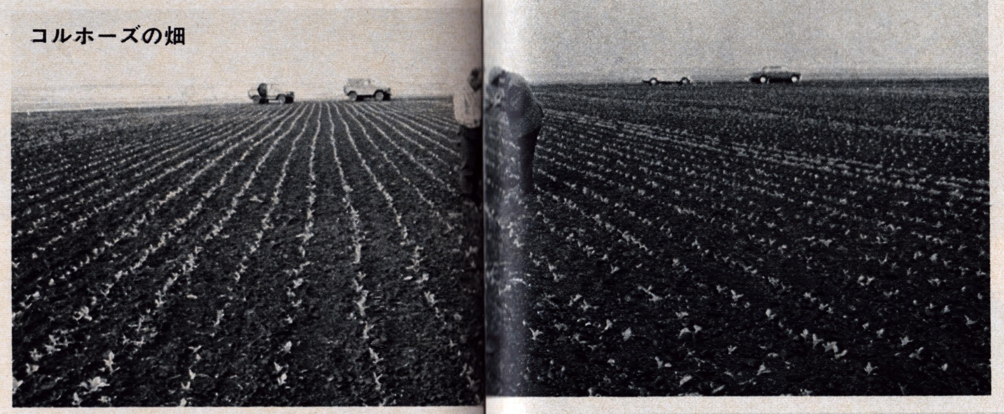
そして議長とコルホーズ員は、一九八一年当時経済学者たちがひんぱんに口にしていた〝集約化〟という単語から出発することにした。

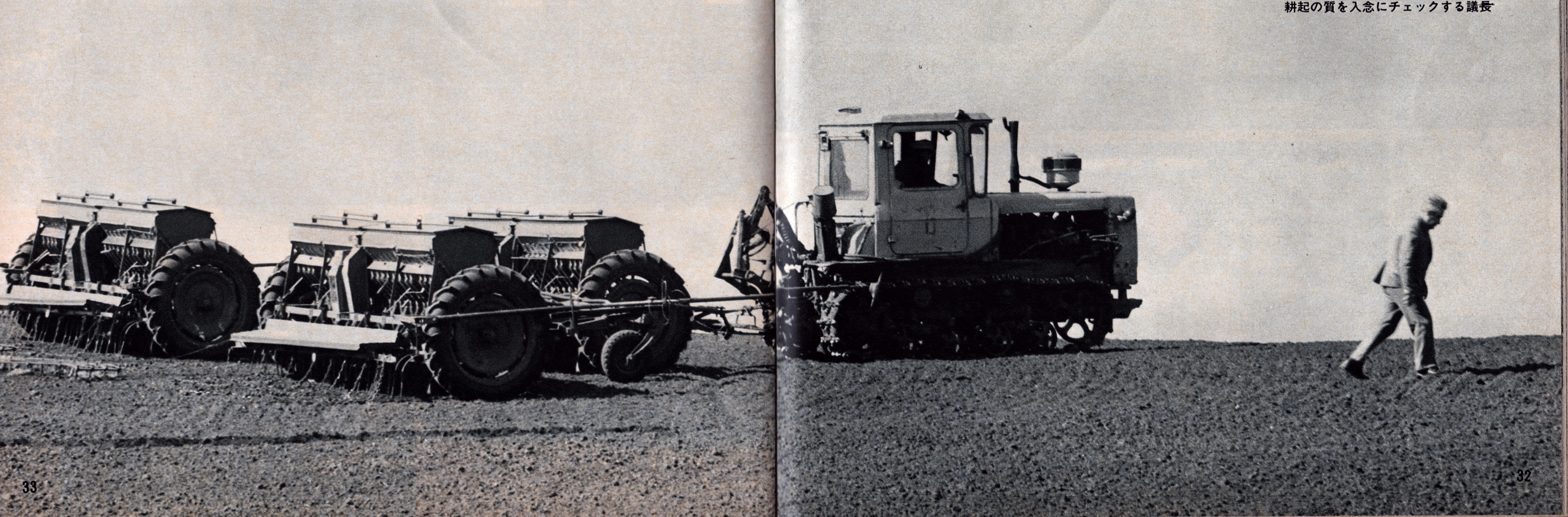
コルホーズを老けさせるな

ハウストフ議長は、今こそ経営の集約化に全面的に力点を移す時だと確信していた。自分のコルホーズの例から、経済発展の要因としての拡張的な方法は寿命が尽きたことを理解していた。これが量に重点を置いた要因であるという一点を取り上げても、そう言える。この方法は多くの土地と多くの人を必要とする。しかし、今や新しく開拓する土地はどこにもない。最後の空き地は七〇年代に開墾された。しかもコルホーズの労働力は減っている。イワン・セミョーノフ前議長と共に〝新生活〟コルホーズを作り上げた人たち（これは農業を非常によく知り、愛していた専門家たちだった）は、引退して年金生活に入ろうとしていた。

若者たちは、古い世代の勤勉さに尊敬の念を抱いていたが、コルホーズ員になってその後継者になることには積極的ではなかった。彼らは旧態依然とした肉体労働をすることを望まず、新しい労働条件を要求し、都会的な快適な生活を希望していた。

青年男子は法律で定められている2—3年間の兵役を終えても、故郷の村へ全員が帰ってくるわけではなかった。多くの者が都会に〝落ち着いて〟しまった。地元の中等学校の卒業生たちにも工場へ就職する者が珍しくなかった。近くに大化学コンビナートの都市——シチョーキノがあるからだ。コル


コルホーズの畑

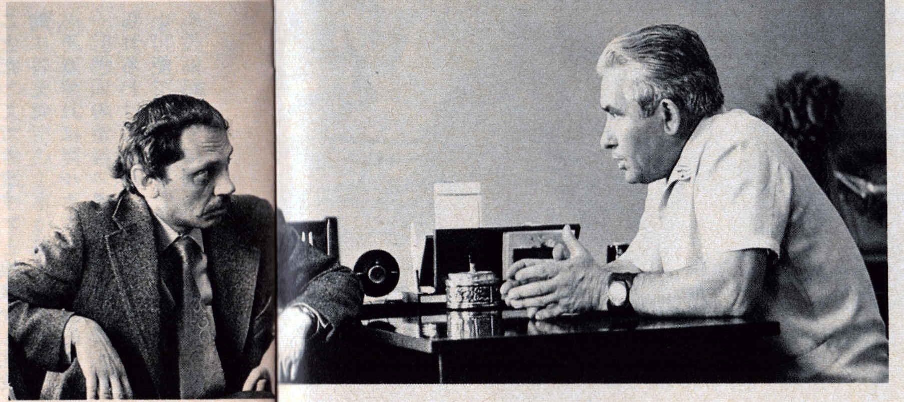

耕起の質を入念にチェックする議長



▲コルホーズの移動養蜂場



〝新生活〟コルホーズの保有農機具



ハウストフ議長に取材する筆者のウラジーミル・スムイク記者

ホーズ員たちの平均年齢は47歳にまで高まった。ハウストフ議長は、〝新生活〟コルホーズを老化させてはならない、集約化で村を若返らせよう、そして若者たちに集約化を推進させよう、と考えた。

就職を希望する人

若者のコルホーズへの定着には、一つのかなり重要な事情も役立った。まだセミョーノフ前議長の時代から、〝新生活〟コルホーズでは住宅建設が始められていた。それもかなり大々的に2世帯用の2階建てコッテージ、都市型の中層アパートが作られていた。前議長と打ち合わせて作られた計画では、村の住宅建設工事は5年間を予定していた。建設機関はこの前議長との合意を盾にして、工期を早めることに同意しなかった。

ハウストフは建設機関の労働者たちとの交渉に多くの時間を割かねばならなかった。ツーラ市（ツーラ州の中心地）にある建設トラストの所長に会いに日参し、モスクワの農村建設省へも何回も陳情した。「うちは将来性のあるコルホーズだ。これからも工事の発注をしたいものが沢山あるんだ」とハウストフは説得に力を入れた。建設機関側もこのエネルギッシュな議長の押しに次第に譲歩し、とうとう工期を早めることに同意した。それも大幅に早めることに同意した。そして翌年には全住宅を完成し、〝新生活〟コルホーズの要望を今後の作業計画に組みこんでくれた。

一九八二年にすでに都会の住宅に負けない一五〇フラットの快適な新築住宅を持っていたということで、〝新生活〟はコルホーズ生産の集約化路線を推進できるような人材を集めるのに有利な立場に立った。



養蜂係のニコライ・アガフォノフ

灌水はコルホーズに安定した収穫を保障している。



「初めまして。ニコライ・アガフォノフです。あなた方のコルホーズで働きたいのですが」

「現在、どこで何をして働いていますか?」と議長。

「シチョーキノ市で消防士をしています」

「だけど、村では火事はそれほど問題じゃないですよ」

「火は燃えるものですし、蜂は刺すものです。実はぼくは農業中等専門学校の養蜂科をもうすぐ卒業します」

「それは面白い。何か自分でアイデアがありますか?」

「移動養蜂場を作りたいのです」

「なるほど。野草の花が咲く時は巣箱を牧場に置き、ソバの花が咲く時はソバ畑に、ヒマワリの花が咲く時はヒマワリ畑に、というわけだね。なかなかいいアイデアだ」

「ところでその報酬としてコルホーズはぼくに何をしてくれますか?」

「住宅と養蜂係の給料と、コルホーズのために50家族の蜜蜂とその巣箱を購入する資金を提供しよう。それで君の方がコルホーズに保障するものは?」

「蜂蜜と作物のよい収穫です。たとえば、ソバの収穫量は蜜蜂のおかげで2倍に増えます……」

スカウト

「どうぞ、おかけ下さい」と、ハウストフ議長は娘たちに椅子をすすめた。

「話は少し長くなるかもしれません。実はお二人にコルホーズ員になっていただけないかと思いまして」

ハウストフはこのニーナ・ウォロンツォワとターニャ・チカダノワの二人を畜産研究所で見つけてきた。二人は1年前に大学を卒業して、研究所で育種の最新の方法を担当していた。議長の見るところでは、この方法を利用すれば畜産の優良種繁殖を急速に改善することができる。

「コルホーズには八〇〇頭の乳牛がいます」と、ハウストフは話を始めた。

「乳牛で一番生産性が高いのはホルスタイン種で、年間八〇〇〇リットルの乳を出します。しかし、ホルスタインはうちのコルホーズには10頭しかいません。そこでお二人に、できるだけ早くホルスタイン種を50頭まで増やすことを助けていただきたいのです。そうすればコルホーズの親牛群をホルスタイン種だけにすることができます」

「それは可能です」と、娘の一人が答えた。「もしお宅のホルスタインにホルモン剤を投与すれば人工授精で1頭の母牛に最高10個までの受精卵、つまり接合子ができます。牛はもちろん、元々これほどの多産向きにはできていませんから、1頭で10頭の子牛を産むことはできません。だから、受精卵を分離してほかの乳牛に移植してやればいいのです……」

「私の知っているところでは、お二人は受精卵の分離の技術をお持ちだ」と、ハウストフは始まったレクチャーを中断した。

「もし必要な装置があれば、1頭の受精卵を10頭の〝貸し腹〟牛に移植することだってできます」と娘は少し挑戦的に答えた。

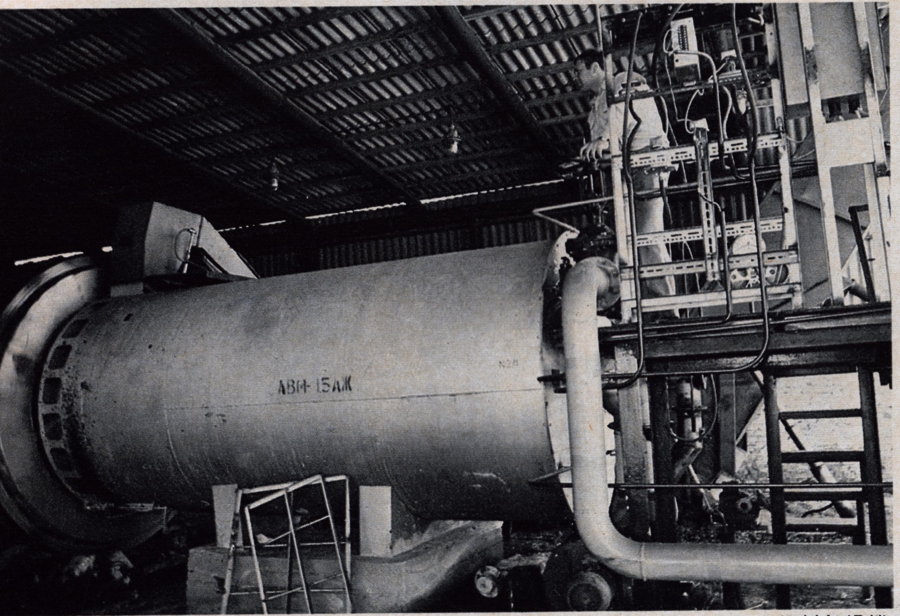
「そうすればコルホーズは理論的には一〇〇頭のホルスタイン種を手に入れられるわけですが、実際には何頭ぐらい可能ですか?」と議長。

「設備が十分に調った実験室があれば、多分、50頭というところでしょう。でも、受精卵を保存する極低温装置が必要です」

「建物と顕微鏡、注射器はあります。極低温装置も買いましょう。もうすぐ新しい実験室の工事が終わります。そこでお二人にお願いするわけだが、1年か1年半このコルホーズに住み込んで、新しい仕事が軌道にのるのを助けていただきたいのです。そして、コルホーズの生活が気に入ったら、ずっといていただいてもいいのです。コルホーズを代表してあなた方にあらゆる援助をお約束します。あなた方からは知識と熱意が欲しいのです」

▶コルホーズの実験室では乳牛の優良種を増やすため、受精卵の移植を手がけている。写真は胎芽の質を調べるタチヤナ・パラダイニク。





飼料乾燥機

コルホーズの乳牛のエリート集団ホルスタイン種



若者たちのUターン

ハウストフ議長が特にうれしかったのは、村人たちがコルホーズに戻りはじめたことだった。

Uターン組の一人、アレクセイ・ネドゥゴフは、青い目のがっしりした体格の若者だ。両親は今もコルホーズで働いている。アレクセイはコルホーズの中等学校を卒業し、農業機械オペレーターの講習を受けた。トラクター運転手として1年間働いた。2年間兵役に就き、除隊後しばらくツーラ市に住んで兄と一緒に兵器工場で働いていた。だが、やがて故郷に帰って農業をやりたくなった。

「工場が気に入らなかったの?」と、ハウストフ議長は聞いた。

「いや、そうじゃない。工場も悪くなかったですよ」と、アレクセイはこまったような顔をした。「兄もいろいろ助けてくれたし。でも、ここも悪くないし、ぼくは農業に慣れている。コ



村の中学校の生徒たち（コルホーズの本部前で）

ルホーズに戻らせてもらえますか？」

「町に恋人を置いてきたんじゃないの？」

「いいえ。だけど、どうしてそんなことを聞くんですか？」

「なぜなら、コルホーズは独身者には新しい住宅を提供しないことにしているんでね。当分は親御さんの家に置いてもらいなさい。結婚して、大地に根を下ろしたら、新しい住宅を上げよう。3日ほど上げるから、トラクターのことを思い出すんだ。どういう運転をするか、私が自分で見に行こう。それが終わったら、ボチャロフの班で働きたまえ」

ベテラン班長

ニコライ・ボチャロフ班長にはハウストフ議長も特別の期待をかけている。これこそ若い連中が手本にしなければならない人物だ！というわけだ。高い技能を持つ畑作の専門家で社会主義労働英雄だが、謙虚さが二大徳目の一つだと考えているような人だ。ボチャロフの倫理的価値の物差しでは二大徳目のもう一つは、自己に対する厳しさということだ。知り合った最初の日、班長はハウストフ議長にこう言った。

「社会主義労働英雄の称号をもらったのは一九六六年のことで、理由は高い収穫率を達成したということだった。しかし、その収穫率では、今の〝新生活〟コルホーズなら畑作担当者はクビになってしまうでしょう。1ha当たり小麦2・5tというのが当時の成績だった。ここの土地なら、この2倍は取れるようにできるし、そうしなければならない」

ボチャロフ班長はこの土地で生まれ育った。班長の言によると、この土地に自分の心臓を、それも情熱的に捧げたので、最近では心臓が時々痛むようになった。畑作担当者の仕事がヒマになる11月になったら、カフカズの保養地キスロボツクへ心臓の養生に行くことになっている。以前ハウストフ議長はもっと体の楽な計画担当者のポストに移るようにボチャロフに勧めたことがあるが、きっぱり断られた。班長はその時、いまいましげに、もし自分に心筋梗塞が起こるとしたら、それは椅子に座って事務机に向かっている時でしょうよ、と言ったのだった。

ボチャロフは創意工夫の人だ。彼はツーラ州で最初に、秋耕のあと直ちに土を均圧する方式を提唱した。それまで、畑の土は秋に耕したあと、プラウが起こしたままの状態で翌年の春まで放置されていた。ボチャロフ方式で耕された畑では土壌の含水量が改善され、風で土が吹きとばされることがなくなった。

新しい改革を好むとはいえ、ボチャロフ本人は自分を伝統主義者だと思っている。彼に言わせれば、「穀物作りは一日が一年を養う」というロシアのことわざは、集約化の立派な標語にできるという。

ハウストフ議長は他の班長たちに、「ボチャロフ班長の仕事は、どんなにささいなことでも、みな大したことなのだ」と、手本にするように促した。

§　§　§

……ことしの農業は好調だった。8月にはコルホーズでは1ha当たり平均4・6tの小麦を収穫した。ボチャロフの班では1ha当たり5・1tと、非黒土地帯にあるツーラ州では未曾有の高収穫を上げた。

豊作だったのは小麦だけではない。牧草も豊作だった。ムラサキウマゴヤシ（アルファルハ）は3回も刈りとることができた。ハウストフ議長の提案でこの気まぐれだがタン白質に富む牧草が飼料用の禾本科植物に取って代わりつつある。搾乳量と家畜の体重が目に見えて増えた。干し草の収穫と加工をする完全に機械化されたラインが4本つくられた。ことしも新しい住宅が建てられたほか、ホテルが完成した（コルホーズを視察に来る人が多い）。夜間用のスポーツクラブが開設され、特に若者たちに利用されている。コルホーズの平均年齢はもう41歳に下がった。専門家の話では八〇年代末には38歳になるという。そして若い人が多いところでは、新しい企画や改革が多くなる。つまり、〝新生活〟コルホーズはその名前を実証しようとしているのである。



コルホーズの馬術クラブの面々

催し物のお知らせ

☆エストニアの人形劇エストラーダ

東京・プーク人形劇場（11月7—12日）、旭川・拓銀ビル8Fホール（11月14日）、札幌・大谷会館（11月15日）、山形・市民会館大ホール（11月18日）、仙台・白鳥ビルホール（11月19日）、茨城県美浦村・中央公民館（11月20日）、飯田・市公民館（11月23日）、飯田・県文化センター（11月24日）、北九州・子ども文化会館（11月27日）、大阪・阪急5オレンジルーム（11月28日）、和歌山・市民会館小ホール（11月30日）、前橋・群馬県民会館小ホール（12月2日）、松江・福祉センター（12月4日）、名古屋・名演小劇場（12月6日）、静岡・市民文化会館大会議室（12月7日）、浜松・福祉文化会館（12月8日）、東京・プーク人形劇場（12月9—11日）、取手・福祉会館（12月12日）

▽お問い合わせは、プーク人形劇場（東京都渋谷区代々木2－12－3、電話03・379・0234）へ。

☆ソ連国立室内オーケストラ（V・トレチャコフ指揮）演奏会

酒田市総合文化ホール（11月1日）、秋田・秋田県児童会館（11月2日）、大阪・ザ・シンフォニーホール（11月5日）、京都・京都会館第2ホール（11月6日）、東京・中央会館（11月8日）

▽問い合わせ先・日ソ協会（電話03・429・8231）か同各地支部。

☆第17回全道ロシア語弁論大会

11月9日（土）

札幌婦人文化センター（札幌市中央区大通西19丁目）

優勝者はサハリンへ招待。

▽問い合わせ先・日ソ協会北海道連合会（電話011・631・2503）

便利で快適な生活のために
——モスクワの第4回都市生活展



「85年第4回モスクワ都市生活展」の会場入口



日本の玩具コーナー。ここでは玩具を見るだけでなく、手に触れ、動かしてみることができた。

9月3日から12日までモスクワで、生活を便利にする国際技術成果見本市——「85年第4回モスクワ都市生活展」(主催=ソ連商工会議所全ソ公団「エクスポセンター」)が開かれた。10日間にわたって世界24カ国の主要な商社、企業、組織が生活を便利にする上で必要不可欠な公共機器と生活機器を展示した。

都市生活展には32の日本の商社が参加した。7つの商社、17のメーカが出品した日ソ貿易協会のコーナーには各種のパソコン、理髪店用の設備、エンジン診断機器、ファクシミリが展示された。川上貿易は遠心分離機を、東京貿易は複写機と印刷機を紹介し、蝶理は新型のミシンと編機を展示した。

この見本市ではソ連館が大変好評だった。

「私たちは現代の公共機器、生活機器がいかに人々に奉仕しているか、さまざまな個人的要求を満たすと同時に、住民の福祉向上にいかに役立っているかを示そうと努めました」と、都市生活展組織委員会議長のウラジーミル・ポポフ・ロシア連邦共和国住宅・公営事業相は語った。

展示品は極めて多種多様で、いわゆるどんな趣味にも適っていた。主婦たちは新型の温度調節器付きガス・電気オーブンレンジ、各種システム・キッチン、浴室用温水混合水栓をあれこれ品定めしていた。男性たちは一般の家庭やオフィスで利用できる各種コンピューター、工具や大工道具、オートロックシステムなどに関心を示した。ソ連館に設けられた時計修理所は大変な人気を集めた。ここでは時計の汚れを落とすユニークな方法が披露された。湿気が禁物の時計を時計修理師は入場者たちの目の前で水の入った超音波洗浄器に入れた。超音波による振動が文字通り機械から汚れをすっかり〝吸い取った〟。

ソ連館に設けられたゴミ加工施設も大きな興味を呼び起こした。ここで行われるさまざまな工程によって、生活廃棄物は完全に活用される。従って大小の都市のガンであるごみ捨て場がいらなくなる。廃棄物から貴重な原料——鉄・非鉄金属が取り出され、可燃性ガスとタール、ピロカーボン(木材、繊維、ポリマーの廃棄物の高温分解生成物、冶金業で黒鉛の代用品になる)、カーボンブラック(ゴム製造業で用いる)が得られ、コンポスト(堆肥)が製造される。このような工場一つだけで年間二四万tまでゴミを処理できる。

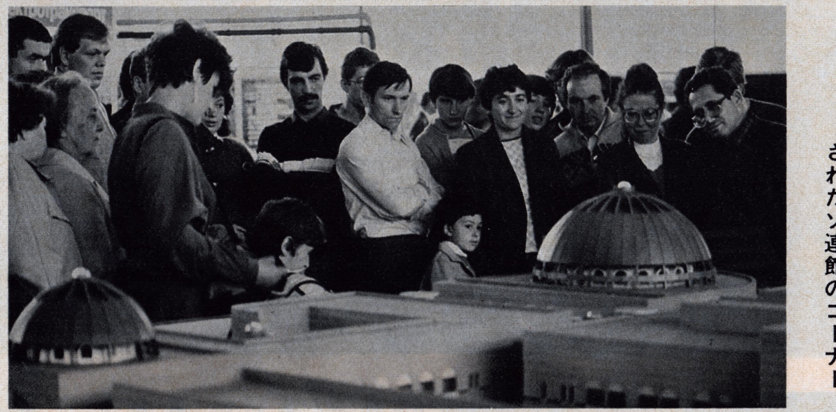
ゴミを燃料として利用し、建物を暖めることもできる、と専門家は説明する。どちらにするかは具体的な諸条件による——北方では熱がどこよりも必要だし、中緯度地方では肥料が必要だ。

見本市では新しい浄水施設も展示された。汚水浄化問題には現在最も注意が集中されている。汚水の無統制な放流を完全に中止させることが課題になっているからだ。学者は生物学的浄化に期待をかけている。生物学的浄化装置はすでにソ連の多くの都市に設置されている。水は7—8時間の処理で汚水物質が$\frac{1}{80}$に減り、畑の灌水に利用でき、沈殿物は肥料として使われる。

都市生活展に参加した各国は何よりもまず人間の暮らしを便利にし、人間の切実な要求を満たすことを目的とした分野での最良の成果を展示した。


◀意匠を凝らしたシャンデリア


ソ連館では腕時計をその場で修理する時計修理所が人気を集めた。▼


▶アルマアタ(カザフ共和国)の浴場付き総合ヘルスセンターの全体模型。


▼園芸用の道具や設備が展示されたソ連館のコーナー

国家関係の改善をめざして

——日本国会議員代表団の訪ソ



9月24日 A・グロムイコ・ソ連共産党中央委政治局員・ソ連最高会議幹部会議長は、クレムリンで日本国会議員代表団と会見した。

9月23日から27日まで坂田道太衆議院議長を団長とする日本の国会議員代表団が、ソ連を公式訪問した。

9月24日A・グロムイコ・ソ連共産党中央委員会政治局員・ソ連最高会議幹部会議長が、代表団と会見した。会談のさい現代の国際情勢とソ日関係の一連のさし迫った諸問題について意見が交換された。

A・グロムイコは米国のせいで国際情勢が悪化しつづけていることに注意を喚起し、宇宙の軍事化計画を実現しようとするワシントンの意図が日の目を見れば、軍拡競争は新しい危険な段階に突入し、戦争の脅威はさらに強まるだろうと強調した。

さらに、A・グロムイコは、すべての国々、すべての諸国民のために、平和を守り固め、核破局の脅威を取り除く効果的な措置をとる必要があると述べ、そのための緊急課題の一つは、宇宙空間の軍事化の防止であると力説した。

ソ連側から、諸国民の平和と安全を守るけだかい目的を達成するためのソ連の新しい提案が説明され、とくにソ連が一方的にいかなる核実験をも一時中止したことや、宇宙の非軍事化の条件のもとでの宇宙空間の平和利用における国際協力の問題を、国連のわく内で討議するというソ連の提案が、きわめて重要な意義をもつことが指摘された。



クレムリン内を見物する坂田衆議院議長一行（9月24日）



▲エストニア共和国の第2次大戦犠牲者記念碑に献花

ソ日関係を審議したさいA・グロムイコは、善隣と互恵の協力を原則とする政治、経済、科学技術、文化その他の分野の対日関係を前進させようとするソ連の原則的な一貫した方針を確認し、ソ連側はそれを推進する実際行動をとる用意があると何度も述べてきたし、日本側の同じような行動を歓迎すると強調し、中曽根首相あてのM・ゴルバチョフの最近の親書の中で強調されたとおり、ソ日両国民が利益を得るような具体的な内容によってソ日関係を満たす必要がある、と述べた。

会談の最後で双方は、最近ソ連最高会議と日本の国会の代表団の相互訪問が活発になっていることに満足の意を表明し、議会間の交流の強化は両国国民間の相互理解と信頼を深め、ソ日関係全体の空気を改善するのに役立つだろうと述べた。

帰国前坂田道太代表団長は本誌の質問に答えることに同意された。

問い　あなたは訪ソの成果をどのように評価されているか？

答え　われわれの訪ソとソ連の議員の方々とのハイレベルの会談は、過去20年間に初めてのものである。ソ連側はわれわれの滞在がうまくいくよう入念に準備してくれ、おかげでわれわれはA・グロムイコ・ソ連最高会議幹部会議長、L・トルクノフ・ソ連最高会議連邦会議議長をはじめソ連政府の要人の方々とひざを交えて会談すること



エストニア共和国最高会議幹部会で会談する日本国会議員代表団

ができた。もちろん若干の問題について双方の意見はくい違ったが、そんな場合でもお互いに冷静に話し合えたので、喜んでいる。立場の違いを述べることで、双方の立場がはっきりすれば、関係調整の道が探しやすくなり、その点で立場の違いの説明は大きな意義をもっていると思う。

問い　あなたは、最近ソ日関係に新しい前向きの傾向が現れていると思われるか？

答え　率直に言って新しい傾向が現れていると思う。ソ連の指導部は活力と柔軟な態度を見せており、教養のある若い、手腕のある国政担当者がそろっている。われわれは世界政治で重要な役割を果たしているソ連の新しい建設的な行動に期待を寄せている。

日本は唯一の原爆被災国であるので、平和を強く念願し、核の脅威の完全除去を望んでいる。核戦争には勝者も敗者もなく、この戦争は全人類を滅亡させるだけである。

われわれは、ソ連と米国が平和の維持と核軍備のレベルの引き下げに全力をあげることを切望している。そのための前向きの措置がとられれば、ソ連と日本を含むあらゆる国の福祉の向上と生活条件の改善に役立つに違いない。もしわれわれのソ連訪問とソ連の指導者の方々との会談が、日ソ関係の改善にいささかなりとも役立つなら、私個人の大きな幸せである。こんどの訪問を実現する機会を与えて下さったソ連の指導部の皆さんにもう一度衷心からお礼を申し上げたい。

問い　ソ日関係の将来についてどう思われるか？　両国の国会議員はソ日関係の発展にどのような役割を果たすことができるだろうか？

答え　私は、国会議員の相互訪問は両国の国交を改善する重要な措置だと思っている。日ソ間ではこうした訪問が現に行われているが、もっと活発にすべきである。

日ソ政府間にはいろいろと問題が沢山あるが、両国民が関係の改善と友好の発展を望んでいるのは確かである。両国の国会議員が定期的に会えるようになれば、政府間の話し合いも前進するだろうし、科学、文化、経済その他の分野の交流も活発になるだろう。

こんどのわれわれの訪問は、昨年訪日した議員のD・クナエフ・ソ連共産党中央委政治局員を団長とするソ連国会代表団から伝達されたご招待によるものであり、この機会を借りて、有力な指導者たちから成るソ連の国会代表団の次の来日を心から切望するものである。



"近視を治したければ手術を"

――来日したフォードロフ教授のすすめ

近視を手術で治す外科医として本誌でも何回か紹介した高名なソ連の眼外科医、スビャトスラフ・フョードロフ教授（モスクワ眼科顕微手術研究所長、ソ連医学アカデミー準会員）が9月11日から20日まで日本に滞在した。多忙なスケジュールの中を教授（写真）はV・デウーリン本誌記者のインタビューに応じてくれた。以下はフョードロフ教授の話。

現在世界には約八億人の近視の人がいるが、そのうち二五〇〇万人はソ連に住んでいる。その他ソ連には白内障手術の必要な人が五〇万人いる。一九六〇年以来われわれは白内障（水晶体の混濁）患者に人工水晶体を移植する手術を行ってきた。一九七四年からは手術によって近視を矯正している。近視矯正手術の要点は次のようなものである――目の角膜の端にダイヤモンドメスで対称に四つか八つ切れ目を入れる。切れ目の数と長さは視力の矯正の程度と患者の年齢によって違ってくる。角膜を傷つけることによって、角膜表面の曲がりが変化し、眼に入ってくる光線が網膜の手前ではなく網膜上に焦点を結ぶようになり、近視が解消される。要求される精密手術は、角膜の中心を正確に固定できる外科用顕微鏡を用いることによって可能だ。

このような手術にこぎつけるまでにわれわれは、視力回復のためには眼の外側の表面、角膜の曲がりを変化させれば十分であることを明らかにしなければならなかった。

この種の最初の試みは既に一九五〇年代に行われている。日本の佐藤勉医師は角膜に数本の切れ目を入れることによって近視が治せることを発見した。傷が治ると角膜はより扁平になり、視力障害も消失した。しかし、この奇跡は長くは続かなかった。手術を受けた角膜はにごりはじめ、そのうち不透明になった。この原因が解明されたのはずっと後になってからである。佐藤教授は角膜の外側の表面に切れ目を入れただけでなく、内側の表面をも傷つけた。この時角膜の内表面にある組織――内皮細胞をも傷つけていた。その他、中心視帯にも切れ目を入れてはならない。

こうして次の結論に達する――第一に角膜に切れ目を入れる時には角膜を突き抜けてはいけない。第二に、切れ目は最大限深くなくてはいけない。これは非常に困難な課題だが、コンピューター・センターの助けをかりて解決できる。現在、われわれの研究所でも積極的にコンピューターを利用している。そうすることによって例えば、最も複雑な手術前の計算――角膜の刻み目の深さの決定が出来る。たったの一〇〇分の一㎜の誤差が手術の効果を0・5ジオプトリーも低下させてしまう。

一九七〇年に私は米国に行った。そこで遠い未来に起こる出来事を描いたSF映画を見た。人類はもう自動車なぞは使っておらず、空飛ぶ円盤に乗っていて、舗道は動き、建物は透明で、何やら大変ファンタスティックな衣装をつけた美女たち！　奇想天外な光景がわんさとあった。そして未来の科学者たちが凍結保存されていた現代人を生き返らせるのだが、その人は目を覚ますとまず最初に眼鏡をつかんだではないか。まあ、それはそれでいいとしても、現代人を生き返らせた科学者たちもみんな眼鏡をかけているとは！　映画の製作者たちは未来の人々の生活を表現するためにすべてをことごとく現代とは違うものにしたのに、眼鏡はそのままだったのだ！

私は映画人に反駁してやろうと思った。米国から戻ると私は角膜切開の実験を集中的にやり始めたのだが、最初は不信感が大変強かった……

現在までの術例は約二万一〇〇〇件、今は日に一〇〇―一二〇件の手術が行われている。最近、ソ連国内12の眼科診療所で同様の手術が行われるようになった。クラスノヤルスクの診療所が最も活発で、毎年一〇〇〇件の手術をこなしている。

今は外国人の患者さんにも手頃の値段で近視を治してさし上げられるようになった。このニュースを読者の皆さんにお知らせ出来てうれしい。モスクワの「コスモス」ホテルに外国人専用の診療所が開設される。来年の初めには開所の予定だ。両眼の近視を治すには1週間が必要だ。

ソ日両国合同画家の展覧会

本誌記者　マリナ・ルイクリナ
カメラ　B・プリホジコ



この9月、モスクワのソ連美術家同盟中央展覧会場で、ソ日合同美術展が開かれた。さまざまの技法（墨、テンペラ、水彩）を駆使した日本南畫院所属美術家の風景画を主とした作品42点と、現代ソ連作家の肖像画と自画像33点（ソ連美術家同盟提供）が出展された。

ソ連と日本南畫院の画家の第一回合同展は一九八三年にキエフで、キエフ・京都姉妹都市関係12周年記念行事の一環として行われた。この合同展を機に日本とウクライナ（ソ連15共和国の一つ）の美術家の間に緊密な関係が生まれた。今度の合同展もモスクワの文化生活の中で注目を引くエベントになった。

ソ連国内で時折おこなわれる日本の美術作品の公開には、ソ連の美術ファンたちはそれが絵画であれ応用美術であれ、多大の関心をもって接している。今回の合同展も例外ではなく、毎日数百人の入場者があった。

展示作品を通して人々は、現代世界における人間の位置、人間と自然との有機的結びつきの問題が両国の芸術の中でどのように解決されているかを知ることが出来た。ソ連の作品の展示ホールと日本の作品の展示ホールは、この展覧会のまったく異なる2部門と言ってもよく、互いに似かよったところのない、それぞれその奥深い民族的伝統、風俗的特徴、画法をもつ二つの流派の作品が展示されている。

両者を比べる必要があるだろうか？普通やるように類似性を探し、対比させてみる必要が？　私はその必要はないと思う。

両方の部門がそれ自身の価値をもっている。それはあたかも、まったく違う創造の世界を持つ二人の天才画家が、互いに知り合い、芸術を語り、自分の固有の経験を豊かにするために出会ったようなものである。

ソ連の「肖像画と美術家の自画像」展は構成がよかった。ここには同僚画家や師である大家の創作に捧げられたソビエトの美術家の作品が集められていた。肖像画の一点一点が別の画家の才能に対する敬意の表れであり、と同時にその人の個人的世界観の反映であったり、時には絵かきと絵かき間の哲学的会話であったりする。ここには18世紀のロシアの古典的肖像画の伝統に貫かれた作品があり、またまったく予想外の超近代的スタイルと構図の作品もあった。

ソ連の部に出展していた美術家のミハイル・ロマジンはインタビューに応じて次のように語った。

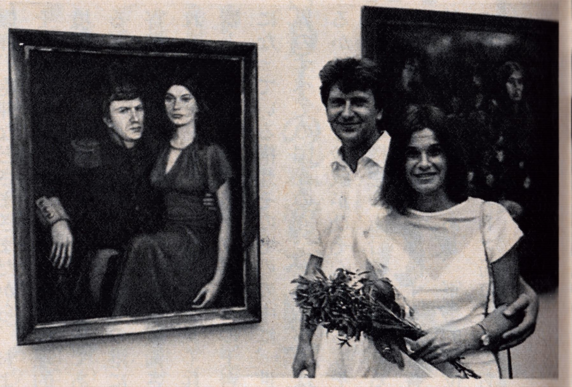
「日本の部をとても興味深く見た。日本の画家たちの作品はおそろしく伝統的で、自分の祖国、その自然への愛に満ちている。それでいてモダンで、いくつかは西欧の新表現主義派の作品に似ている。似ているがその影響はいささかもこうむっていない。ここに、日本の画家の作品が持っている力――時のつながりを感じる、その力があるのだと思う。」



◀日本のお客さんにサインをもらうソ連の小学生



サインを交換し合う河野氏と画家のミハイル・ロマジン



▲自作『夫のいる自画像』のそばでポーズをとるタチヤナ・ナザレンコ

右上　ソ日合同展で河野秋邨作『時空虚実』を鑑賞する鹿取泰衛・駐ソ日本大使（左から2人目）。右端は河野画伯（日本南畫院会長）。



展覧会場の日本の部

ソ日合同展のオープニング（9月5日）には日本南畫院の会長――96歳の河野秋邨氏が列席した。河野画伯の展覧会は毎年、日本や外国で開催されており、常に成功を収めている。モスクワ展には大作『時空虚実』が出展された。これは大変哲学的な作品で、河野画伯の言葉によれば、ご自身が最近ずっと取り組んでいるテーマの典型的作品とのことだ。

河野画伯はオープニングのあいさつで次のように語った。

「人類共通の財産である芸術は、諸民族間の理解を深め、民族文化を相互に豊かにするのを助成する。21世紀の入口――新しい歴史の黎明にいるわれわれ、世界中の画家は、思想・民族的習慣・伝統の違いにかかわらず、団結しなければならない」

これに応えてソ連美術家同盟員の著名なグラフィック画家ビクトル・ゴリャイノフが次のように述べた。

「展覧会や博物館のコレクションの相互交流を通じて、両民族はお互いの芸術をより完全に知ることが出来る。まったく別の文化的情況で創出された作品は、徐々に他国の精神生活の現実的部分になり、相互理解の重要な要素になっていく。この展覧会はソ日両国の文化財交流の重要かつ実り多い過程に新たな一ページをつけ加えた」

一九八六年3月には多少の内容変更はあるがこの合同展が東京と京都で開催される。

ソ連の視点

化学兵器の脅威—明日はわが身に

本誌評論員　ボリス・ペニンスキー

一九八六年度の軍事予算の審議中に米国上院の調整委員会は、米国防総省から強い圧力を受け、米国での二成分式（バイナリー）化学兵器の製造開始を実現するために、一億五五〇〇万ドルの支出を勧告した。ソ連の専門家は、米国が西独ばかりでなく、世界の他の地域にもバイナリー兵器を配備する危険性があると見ている。いわゆる〝緊急展開部隊〟は、化学戦実施に備えて特別の訓練をしている。他の国々でもバイナリー化学兵器の成分の生産が組織される脅威が現れている。こうした状況は化学兵器が広がる重大な危険をつくり出しており、従って局地紛争などに化学兵器が使われる公算が濃厚になっている。

専門家の計算によると、以前から米国務省の〝化学戦〟計画で特別の地位を占めている西独内の有毒剤の現有量だけで、西欧の一億人以上に被害を与えることができ、しかも民間人の損害は、軍隊のそれの20—30倍になるといわれる。それにもかかわらず西独では、現在4箇所あるバイナリー兵器貯蔵庫をさらに5箇所増設する予定である。

アジアのある人々は、西独ないしは英国はあまりにも遠く、これらの国の問題はどうもピンとこないし、先の数字はもっぱら人口密度の多い欧州だけに関わりがあると、考えがちだろうが、数々のモーメントから見て、こうした考えは間違いであろう。いまバイナリー弾薬の運搬手段はミサイル、航空爆弾、砲弾などさまざまだから、およそどの地域まで使えるなどと、地理的境界をうんぬんしても全く無意味である。またバイナリー兵器は極東の港に寄港する米国の艦艇や空母にも装備される予定である。しかしバイナリー兵器と化学兵器の製造プログラムの土台になっている構想そのものの中に、世界のすべての国々の安全を揺るがすはるかに重大な脅威がひそんでいる。そしてこれらの構想の土台になっているのは、すべての問題を解決する最も有効な手段は軍事力であり、軍事的優位であるというワシントン筋の信念である。これが、〝スターウォーズ〟の根回しのための気狂いじみたねばりと貯蔵核兵器の近代化、あらゆる局地紛争に軍事力を行使するための準備態勢づくりの根源なのである。

他方、よく知られているように、朝鮮でも、インドシナでも米軍はすでに化学兵器を使用した。ベトナムだけで約二〇〇万人が化学剤の被害を受け、森林の43％が枯れ、農地の44％が汚染された。アジアの戦場にとって米国の化学兵器は全く現実的地位を占めている。このことを裏書きする最近の例は米国のブライト・スター85演習であるが、この演習中に米国はどうして化学兵器使用のイミテーションを示す必要があったのだろうか？

欧州諸国以外の国々に対するバイナリー兵器の問題には、もう一つ非常に重要な面がある。バイナリー兵器はまもなく、イスラエル、南アフリカ共和国、パキスタンなどの米国の〝戦略的〟同盟諸国に装備される可能性があると十分に考えられる。それを裏書きする事実はゴマンとある。たとえば周知のとおり、イスラエルはレバノン侵略のさい、化学兵器のカテゴリーに入る燐弾薬を使った。プレトリアの人種差別主義者は、ナミビアの愛国者討伐作戦を容易にするために、ベトナム戦争で使われた枯葉剤〝エージェント・オレンジ〟を積極的に使った。

ソ連はバイナリー兵器の製造・配置計画を強く非難するとともに、あらゆる種類の化学兵器を即時禁止し、その貯蔵分を廃棄するために全力を尽くしている。化学兵器の使用禁止に関する一九二五年のジュネーブ議定書にいち早く加入したソ連は、すべての国が議定書を厳しく順守することを、一貫して求めている。ソ連はジュネーブ軍縮会議で、全世界で化学兵器を禁止する国際協定の策定をめざしてねばり強くたたかっている。それと同時に、地域的な部分的措置でも積み重ねていけば、全世界的な規模の努力にプラスするという立場から、ソ連はこの問題を地域的に解決する用意がある。

〝研究〟計画のかげに隠れて

——SDIの本質を隠す米国政府

軍事専門家　ウラジーミル・チェルヌイシェフ

米国は軍縮と国際情勢の改善を目的とするあらゆる措置に頑として反対し、宇宙を軍事化する米国の行動が国際世論から正当なものと見られるよう、あの手この手に訴えている。9月17日のホワイトハウスでの記者会見でレーガン大統領は、〝戦略防衛構想〟（SDI）の枠内での研究活動はどんな条件にも違反しないので、あくまでも続けると断言した。大統領の立場を説明した国務省のスポークスマンは、SDIの枠内での研究計画は、ABM制限条約やその他の国際的義務に少しも違反しておらず、その研究を禁止することは不可能であり、望ましくないと語った。

だが実際のところ米国のいわゆる〝研究〟の目的そのもの（攻撃用宇宙兵器の開発）は、ソ米条約の精神にも字句にも根本的に矛盾している。

ABM制限条約の第5条には「海上発射、空中発射、宇宙発射、地上移動基地発射のABMシステム、あるいはその構成要素を建設、実験、配備しない」という双方の義務が明記されている。しかし米国政府が〝SDI研究計画〟といっているものの実体は、宇宙発射の諸要素をもつ大規模な対ミサイル防衛システムの開発計画の第1期分である。

その第一の証拠は、米国での研究の規模と研究費である。向こう数年間に七〇〇億ドルが支出される予定であり、ネイション誌の報道によると、一九九四年までに米国は、〝スターウォーズ〟計画に九〇〇億ドル以上を支出するといわれる。

すでに今年の4月、米新聞編集者協会で講演した第1次ソ米戦略兵器制限交渉（SALTI）のJ・スミス元米国代表団長は、SDIが〝純粋に研究的な性格〟のものだというホワイトハウスの主張を否定し、〝スターウォーズ〟に支出される数億ドルは、工業と実験室によって積極的に消化されていると強調した。米国の東西和合委員会の幹部の一人、退役海軍提督N・ヘラーは、SDI計画は研究段階を終わり、開発段階にあるとズバリ指摘した。

その開発も、軍当局の注文と契約による開発であり、しかも必ず模型や試作品ができていなければならない段階、実験室外の野外実験と仕上げが行われなければならない段階での開発である。つまり、いましかるべきシステムのその後の設計・生産段階に必要なことが万事実現されているのである。

SDIを実現する機関の指導者J・アブラハムソン将軍が述べたように、〝スターウォーズ〟計画は次の五つの基本方向を含んでいる——(1)探査手段、情報の収集・処理手段、目標の誘導・撃破手段の評価。(2)指向性エネルギー・システム。(3)運動エネルギー・システム。(4)情報分析システムと戦闘指揮システム。(5)これらのシステムの残存率の問題と保障計画の研究。トリビューン・レェコノミ紙（フランス）によると、米国はレーザー兵器やビーム兵器（〝指向性〟エネルギー・システム）分野の研究に約三〇〇億ドル、電子制御システムの開発に五〇〇億ドルを使うことになるという。

以上から明らかなように、〝悪気のない科学研究〟の段階は過ぎて、研究はもうとっくに核爆発のエネルギーを利用する兵器をも含む攻撃用宇宙兵器の開発計画に変わっているのだ。

ペンタゴンは〝スターウォーズ〟計画を実現するために、五つのコンソーシアム（軍産企業と研究機関のグループ）を組織した。一九八五年9月初旬に計画の第2段階の開発を担当する最後の第5グループが決まった。クリスチャン・サイエンス・モニター紙の報道によると、ペンタゴンだけで三〇〇件以上の契約を割り当てることになるという。

現在10企業がABMシステムの全体の構造を開発中であり、作業の目的はすべての新しいセンサー、新型兵器、新鋭コンピューターを単一のコンプレクスにいかに結合すべきかを解決することにある。ディセント誌の証言によれば、ペンタゴンの請負業者である20以上の大企業は、さまざまなシステムの攻撃用宇宙兵器の開発だけでなく、それを最も効果的に使う戦略の研究にも従事している。

以上の事実は、SDI計画が〝純粋に研究的な〟性格をもつという米国政府スポークスマンの声明が、見え透いたうそであることをはっきり証明している。

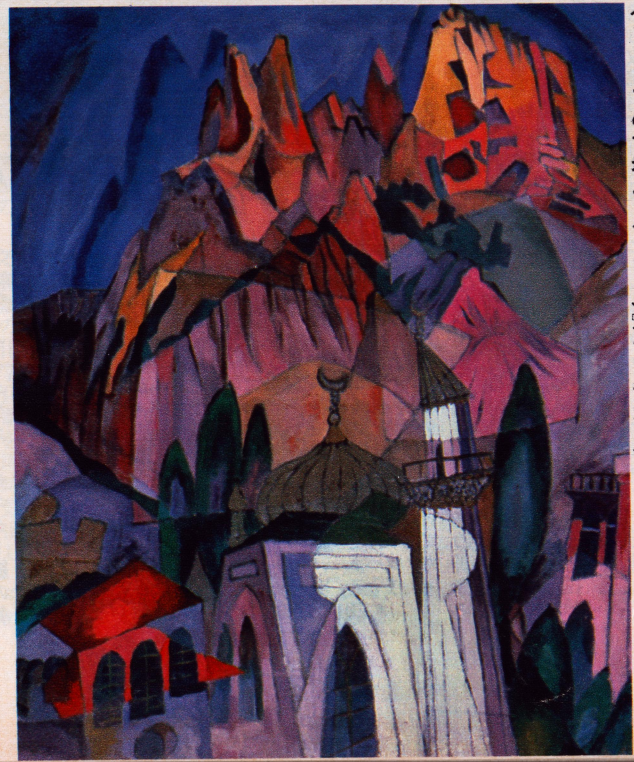
100周年を迎えた

ロシア最初の公開美術館

本誌記者 アレクサンドル・エプレイノフ



サラトフ美術館の18世紀後半のロシア美術の展示ホール



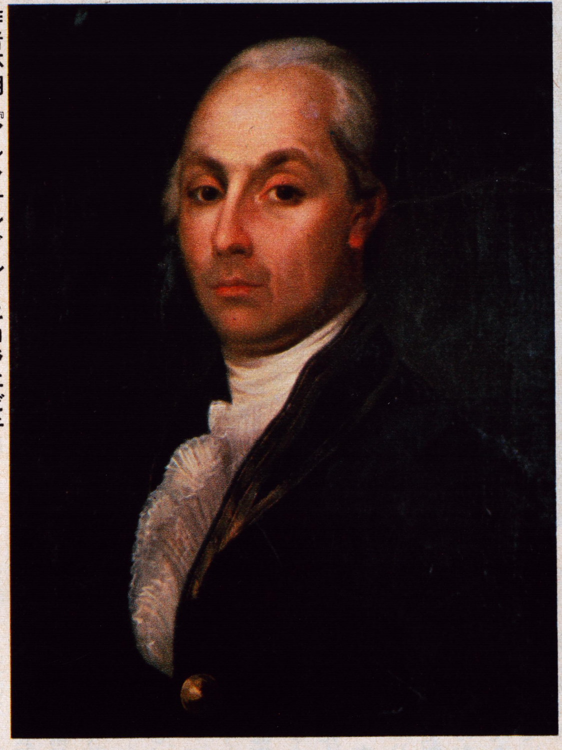
アリスタルフ・レントゥーロフ『東方の都市（クリミアの古城。アルーブカ）』（一九一六年）



フランソワ・ブーシェ『ビーナスとブルカン』（天井画のためのエスキース）



▲ロベルト・ファリク『ヨットのいる風景』（一九一二年）



作者不明『アレクサンドル・ニコラエビチ・ラジーシチェフの肖像』（一七九〇年以前）



アレクセイ・サブラソフ『春』（一八八三年）



サラトフ美術館の正面階段

今年、ロシアで最初の美術館——サラトフ美術館が開設一〇〇周年を迎えた。サラトフはロシア連邦共和国欧州部中央のボルガ河畔の都市（人口約九〇万）。一八八五年当時二〇〇〇点だった美術館の所蔵品は、現在では一万六〇〇〇点。そのうちの多くは、世界の大美術館に飾っても決して見劣りしない、すばらしいものである。

ロシアの文化生活上の出来事の中には、約四〇〇年の歴史を持つサラトフと関係が深いものも少なくない。

たとえば一八一〇年、ここに最初の劇場が生まれた。19世紀末には、この一座はロシアで最も力のある劇団の一つに数えられていた。一九一八年10月、サラトフに世界で最初の無料の子ども劇場が生まれた。その伝統は今日、ユーリー・キセリョフが半世紀にわたって指導してきたサラトフ児童劇場によって受け継がれている。一九〇九年には総合大学が、一九一二年にはペテルブルグ（現レニングラード）、モスクワに次いでロシアで3番目の音楽院がそれぞれ開設された。

最初の公開美術館が開設されたことは、わが国の文化史における重要な道標となった。当時、いまでは世界的に有名なモスクワのトレチャコフ美術館もまだ個人のコレクションだったし、ペテルブルグのロシア美術館が公開されたのは、サラトフ美術館が開設されてからようやく13年後のことである。

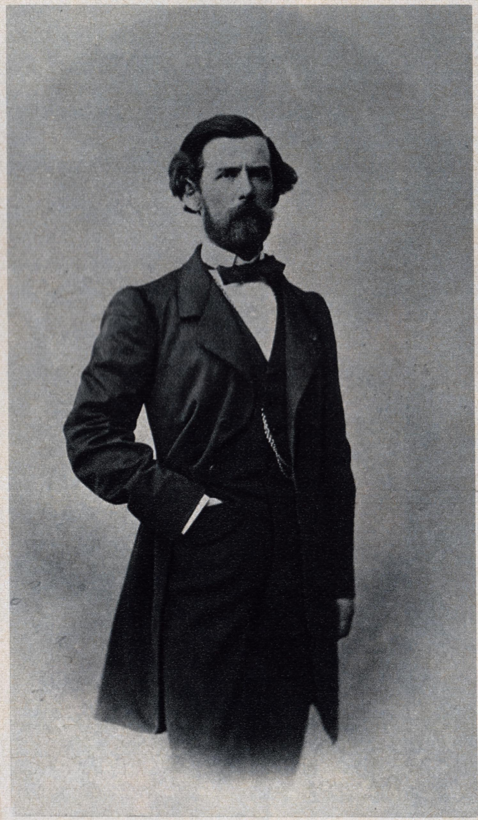
美術館を組織し、公開したのはアレクセイ・ボゴリューボフ（一八二四—一八九六）だった。本職は海軍士官だったが、美術アカデミーを優秀な成績で卒業した人でもあった。退役すると、海軍参謀本部の画家の職についた。彼は〃ロシア艦隊の史料編纂官〃と呼ばれた。その海戦画は芸術的な価値だけでなく、歴史的な価値も持っていたからである。彼の風景画もまた、非常な名声を博した。

最初に展示されたのは19世紀のロシアの大画家ワシリー・ペロフ、イワン・クラムスコイ、イリヤ・レーピン、ワシリー・ポレノフ、フランスの画家カミーユ・コロー、シャルル・ドービニの作品だった。コレクションにはボゴリューボフ自身の絵やグラフィックも加えられた。

美術館は開設当初から、ロシアの革命的思想家で作家のアレクサンドル・ラジーシチェフ（一七四九—一八〇二）の名が冠された。ラジーシチェフは作品『ペテルブルグからモスクワへの旅』の中で、ロシアの専制の暴虐ぶりと農奴体制を批判し、そのためにシベリアへ流された。ラジーシチェフは長いこと反逆者と見なされ、『ペテルブルグからモスクワへの旅』は一九〇五年の第1次ロシア革命の直前まで出版されなかった。

アレクセイ・ボゴリューボフはこのラジーシチェフの孫だった。だから美術館を作るにあたって、美術館にラジーシチェフの名をつけることを当局に許可してもらうために努力した。ボゴリューボフのこの運動はロシアの先進的な人々から支持された。その中には有名な作家イワン・ツルゲーネフのような人もいた。

アレクサンドル三世治下の反動期にラジーシチェフの名を冠した美術館が開設されたのは、注目すべき出来事と言わなければならない。ほとんどすべての展示品は、ロシアや西欧の巨匠たちの作品を集めていたボゴリューボフが美術館に寄贈したものだった。



アレクセイ・ボゴリューボフ

年とともに美術館の所蔵品は、主として個人の寄贈によって、補充された。寄贈された作品は多かったが、質の面でばらつきがあり、また体系的なものでもなかった。

ラジーシチェフ記念国立サラトフ美術館のガリーナ・グロツコワ館長は言う——「ソビエト時代になって、コレクションを積極的に補充する可能性が生まれました。一九二〇年代に初めて、年代や地域別にしたがって、科学的に体系づけられた展示が行われました。ソ連の大美術館のストックの中から、すばらしいロシアの画家の作品を譲り受けました。所蔵品は現在一万六〇〇〇点を数え、それで三つの基本部門——ロシア部、西欧部、ソビエト芸術部が形成されています」

いちばん充実しているのはロシア部のコレクションで、中でも19世紀後半の写実画家、民主的な組合——移動展協会に属し、それ故に〃移動展派〃と呼ばれる画家たちの作品が自慢のタネである。

コレクションの目玉はレーピンの作品で、特に画家の娘の肖像は異彩を放っている。イワン・クラムスコイ、ワシリー・スリコフ、ニコライ・ゲー、アレクセイ・サブラソフ、アルヒープ・クインジの作品はロシアの形象、その自然と人々をあますところなく伝えている。

これら移動展派画家の作品のコレクションによって、この美術館は世界的にも有名である。一九七八年にはそのうちの10点がイタリアの「ロシア風景画」展に出品されたし、一九八〇年にはレーピン、ペロフ、ゲーの作品がスウェーデンで展示された。同じ年にドイツ連邦共和国のジュイスブルクで「ロシア移動展派」展が行われたが、これは美術館が外国に持ち出した最大の展示会で、40点以上の絵が出品された。

一九八三年にはハバナの19世紀ロシア造型美術展に参加。ソビエト時代の絵はルーマニア、ブルガリアで展示された。パリで行われ非常な成功を収めた大規模な「パリ・モスクワ」展にも出品された。

美術館の職員は忘れ去られてしまった画家の名前や作品を掘り起こすために大変な努力をしている。たとえば、若くして死んだサラトフ出身の才能ある画家ウラジーミル・カシキンも、忘れ去られてしまうにはあまりにも惜しい。この画家の作品を発見したのは美術館の保管主任アリビナ・シーモノワだった。カシキンの作品を初めて見て、館員一同は非常に興奮した。いま彼の作品は修復されて、ホールの一つのいちばんいい場所に展示されている。

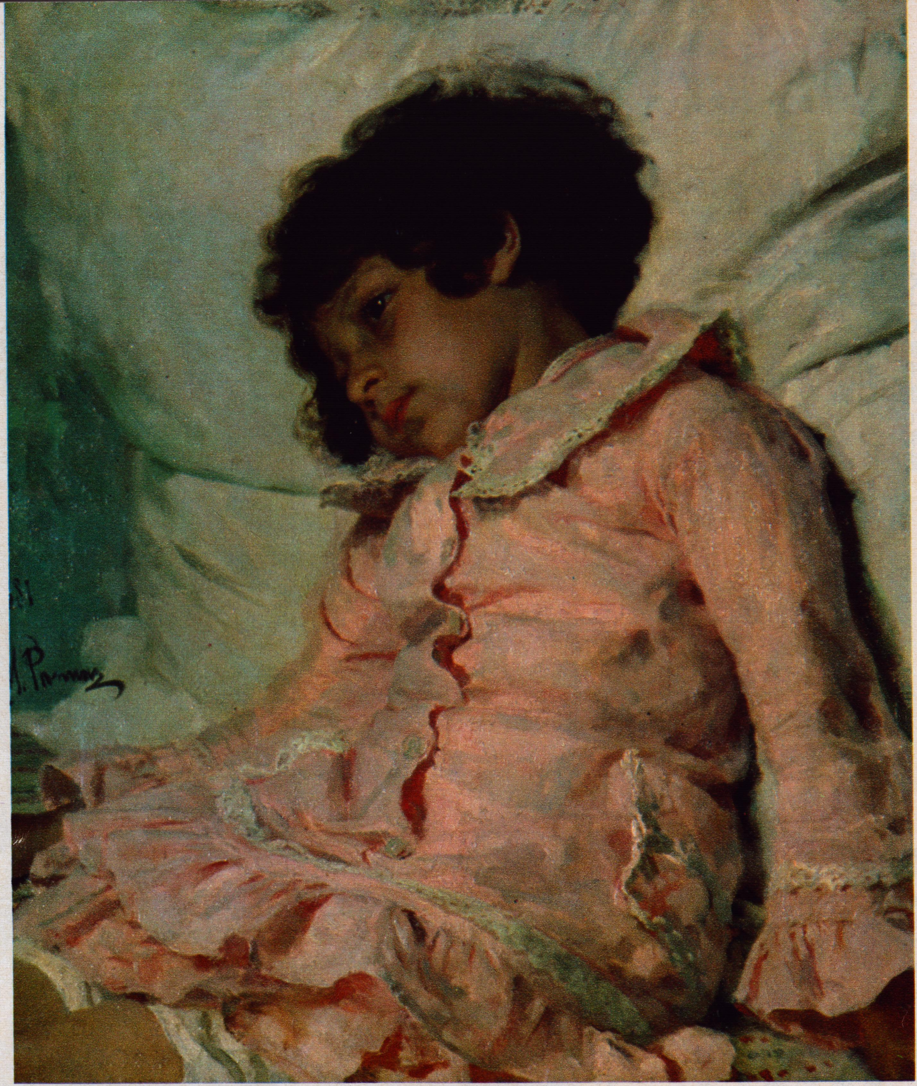
いくつもの絵が、経験豊かな修復技師ウラジーミル・ソリャノフのおかげで生まれ変わった。

ソリャノフは言う——「私は四半世紀前にこの美術館へやってきました。ここには、私の手を加えられていない絵はほとんどないでしょう。巨匠の作品に息を吹き込むことができたと感じられるときは、誇らしい気持ちになり、幸せです」

ソリャノフはサラトフ美術学校卒。この学校にもまた独自の物語がある。美術館を作るにあたって、ボゴリューボフは特別の〃絵の学校〃のことを考えた。それなしには、将来の画家の美学教育は不可能だ。一八九七年に学校は開設されたが、ボゴリューボフはすでにこの世の人ではなかった。

開設以来、この学校は有名な画家や彫刻家を少なからず世に送り出した。ビクトル・ボリソフ＝ムサトフ、ピョートル・ウトキン、パーベル・クズネツォフ……美術研究家はロシア・ソビエト造型美術の発展に対するサラトフの美術家たちの大きな貢献を考慮して、〃サラトフ派〃という用語を使っているほどだ。

毎年一九万人がこの美術館を訪れる。この一〇〇年間で七〇〇万人もが訪れた。サラトフ市民は美術館を誇りにして、それを〃ボルガ河畔のエルミタージュ〃と呼んでいる。開設一〇〇周年記念日には、アレクセイ・ボゴリューボフの作品展が開かれた。それは、わが国有数の美術館の一つを築いた恩人への感謝の気持ちの表れだった。



イリヤ・レーピン『ナージャ・レーピナ（レーピンの娘）の肖像』（一八八一年）



イリヤ・マシコフ『静物』（一九一二―一九一三年）



▼マチアス・ストメル『幼児礼拝』



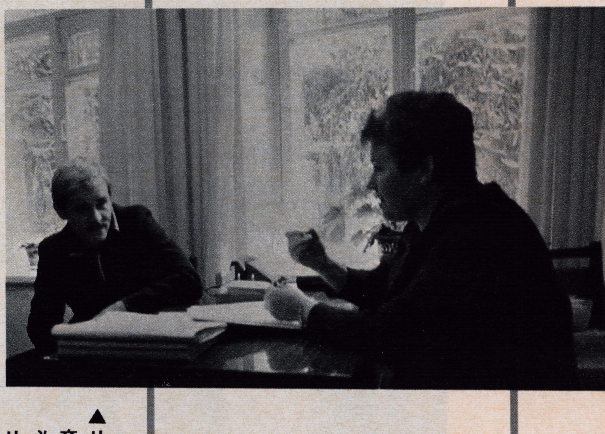
ウラジーミル・タトリン『水兵と中国人』



マルク・シャガール『負傷した兵士』（1914年）

転職を希望する人たち
――就職あっせん所での2時間

本誌記者　ゲンリエッタ・レピンスカヤ



▲リジア・ブラセンコ審査官の意見に同意は出来ないのだが、よく考えてみる必要はあるね……とピョートル・ポボリヤ。

ソ連の国民経済の全部門で働く一億二九〇〇万人のうち毎年約二五〇〇万人が転職している。職業選択の自由――これは働く権利の絶対必要な構成部分だ。

転職希望者あるいは初めて就職する人は専門の機関――就職あっせん所のサービスを利用できる。これは失業者に働き口を世話する資本主義国の職業紹介所とは違う。ソ連では一九三六年以来失業者はいない。

ウクライナのチェルカッスイ市（州都）にあるこのような就職あっせん所の一つを、本誌記者のゲンリエッタ・レピンスカヤとビクトル・チェルノフが探訪した。

「これが市内一五〇カ所の企業や機関から寄せられた求人申込書です。月末には新しい明細が届きます。そのどれにもいろいろな職種に対する求人が20項目ずつ記載されています」――チェルカッスイ市就職あっせん所のグリゴリー・ドビルヌイ所長はぶ厚くふくれあがった紙ばさみを一つひとつ机の上に並べながらこう言った。

求人申込書をめくって見よう。仕上げ工、旋盤工、縫製工、パン焼き職人、電気技師、熔接工、据え付け工の職がある。40ほどの職種を数えたところで、ちょっと戦術を変えることにした。自分が高度の技能資格を持っているとしよう。さあ、どうぞ。化学技師、機械技師、紡織技師、光学技師の口がある。人文科学系の場合はどうだろう――教師、司書、博物館職員のポストが空いている。それでは今度は、自分が人生経験を十分に積んだ人間で、経験だけでなく、若干の野心もあると仮定してみよう。

そういう場合には部長、副支配人のポストが用意されている。こうして求人申込書を30ページほどもめくっただろうか、そこで一つの疑問がわいた。こういう就職あっせん作業はもう機械にまかすべき時が来たのではなかろうか？

「そう、機械はいい助手です。しかし機械にまかせられるのは作業の技術的部分だけですよ。経験豊かな審査官がやっていることは機械じゃおそらく無理でしょう」――所長はこう言う。

もしそうならば審査官の仕事ぶりを見せてもらおう。隣の部屋で面接が行われている。

相談に来るのはどんな人？

小さな執務室に入り、紹介される。審査官の名はリジア・ブラセンコ。面接の場に割り込んでは邪魔にならないかと心配しながら椅子に腰を下ろす。特にカメラが心配だ。相談者がどんな態度を取るか？

心配には及ばないことが分かった。相談者は話したくなければ自分のことは何も話さなくてもいい。欠員のあるポストに関する情報の提供を求めるだけでいいのだ。ただそのためだけならわざわざここに来ることもない。求人情報はさまざまなチャンネルを通じて得られる。直接企業に問い合わせてもいいし、新聞や広告掲示板にも載っている。しかし就職あっせん所に来ればあらゆる可能なバリエーションについて審査官と話が出来るし、助言も得られる。ここでは人々は一方的な聞き手ではなく、対話がある――自分の名を言い、どこで働き、何を求めているかを話す。もっと個人的質問にも答える。カメラが入るのを拒否もしない。ここ

での取材中、2度だけカメラは困るとことわられたが、2件とも十分な理由があった。

さてここで最初の相談者を紹介しよう。ラリサ・ロマネンコ。商業学校（中等専門学校）を卒業し、結婚して現在は子育て中。専門を生かした職業に就くのは今は不可能。パートで簡単な仕事をしたいと思っている。

ブラセンコはすぐに土産品工房で日に3―4時間働く仕事を提案した。

小物入れの縫い方を覚えるのに一週間はかからないだろう。

「もう一つは、部屋の掃除というのもあります。早朝の2―3時間ですむから便利でしょう。ご主人が出勤する時間にはあなたはもう家にいられるわ。問題はつまり、お子さんを見てくれる人がいないし、幼稚園には預けたくない、そうでしょう？」と、審査官。

ラリサはうなずき、どうしてそうしたいかを説明する……

ブラセンコはラリサの言うことをじっくりと聞いて、また別の提案をする――「家で出来る仕事はどう？ニット工場が編み機を貸してくれて、インストラクターも派遣してくれます。少額だけどすぐに見習い期間中の賃金が出るし、出来た製品も買いとってくれるわ。お嬢ちゃんにどんな洋服を編んであげたいの？あとでご自分の専門に戻るにしても、編み物の技術は無駄にはならないわ。ご主人とも相談してよく考えてごらんなさい」――ブラセンコはラリサに以上3件の求人先の住所を書いたメモを渡した。

帰ろうとする女性の後を追いかけるように、しかし今度はもう私たちに向かって、ブラセンコは言う――「最近の傾向として求職者は、家庭の主婦と学校出たての若い人です。私たちの期待できる労働力の最後のストックがこの両者です。婦人は一年を通じて毎月コンスタントに来ますが、若い人がどっと押し寄せるのはある時期の2―3カ月。それが過ぎると静かになります。しかしその時期には市ソビエトが青年の就職状況を最後の一人まで把握し、報告するように求めてきます。卒業時から4カ月たった現時点では例えば、あなたには全部お話ししますが、チェルカッスイ市の中等学校卒業生は一八〇八人いたのですが、そのうち一一六六人は進学して大学や中等専門学校、職業技術学校に行き、六二九人が働いています。残りは13人になりますね。そのうち8人は入院中、5人は進路を思案中です……」

いかにも男らしい男性が執務室に入って来た。私たちの眼力もなかなかたいしたもの、その姿勢、物腰……もちろんこのワシリー・ラトゥシヌイは軍人だわ。

「元軍人です」――その人はより正確に自分の身分を名乗った。「25年間軍務にあり、退役したばかりです」

リジア・ブラセンコはこの元軍人さんに、建設トラストの仕事から市民生活を始めるように勧めた。

「次の2点で賛成できません。第一に私には建設の専門知識がない。第二に、人に接する仕事の経験を生かしたいと思っているのです」――ラトゥシヌイは正確に自分の気持ちを伝える。

ブラセンコは彼の気持ちがつかめたとばかりに喜々として言った。「大変結構ですよ！　あなたの学歴は先方を満足させますとも。仕事はあなたの希望にかなっています。職業訓練の指導員です。若い労働者の職業人としての成長を手助けして下さればいいのです。若い人を講習や職業訓練に派遣する仕事です。いろいろ援助してやったり、もっと勉強しなくては駄目だと分からせてやったり……」

ラトゥシヌイは建設トラストへの紹介状を手に就職あっせん所を後にした。

終わりよければすべてよし

「だめ、だめ、写真は撮らないで！神経が高ぶっているのよ、めちゃめちゃだわ、仕返しをするわよ！」――その女の人は手で顔を覆って抗議した。

「最後の部分は余計でしょう、どうしようもないシチュエーションなんてありませんよ。さあどういうことなのか整理してみましょう」――ブラセンコはきっぱりと言う。

私たちも一つひとつ整理してみる。タチヤナ・ソハツカヤは解雇された。職場の管理部が彼女のポストは必要なしと見なしたのだ。お決まりどおり管理部はタチヤナに別の職種に変わるよう提案した。交替勤務のある職種で、タチヤナはそれには応じられなかった。タチヤナは自分で新しい職場を見つけた。だがいよいよ就職手続きをする段になって不愉快な状況が明らかになった。元の職場でタチヤナはもうじき新しいフラットをもらえそうだった。2年間待ってやっと彼女の順番が来るはずだった。そして突然の解雇。新しい職場でも住居を取得するのは順番待ちだ。結局タチヤナはまたもや待たねばならないのか？

「助けて下さい、新しいフラットがすぐもらえる職場に世話して下さい。今の住まいは3人家族には狭くて。もう一人子どもも欲しいと思っていますし……」――タチヤナはすすり泣きながら訴える。

「そうねえ……」――ブラセンコは考え込む――「建てても建てても家が足りなくて、どこでも入居希望者が行列を作っているのよね。どこの職場をあなたにお世話しても、あなたは行列のしっ尾に立つことになるわ。もちろん、悔しいでしょう。でも行列の先頭にあなたを立たせるのも、新居への引っ越し準備を始めている人に対して不公平

だわね。どうやったらあなたをお助け出来るか分からないわ……解雇問題を審査した時、労働組合はこの件についてどういう判断をしたのかしら？」

タチヤナはとんでもない、というように手を振って言った——「労働組合なんて何も。企業長に呼ばれて、解雇を申し渡されて……」

ブラセンコがそれをさえぎって——

「だってそれじゃ法律違反じゃありませんか。州労評に今電話を入れますから、そちらにいらっしゃい。すぐ近くだから。行って、今までのいきさつをお話ししなさい。すぐ分かってくれますから。あなたがいた企業で住宅に関して何か小細工がされていないかどうか、あなたと一緒に調べてくれますよ。この解雇は何か変な感じがします」

まだ平静さを取り戻さないまま、しかし元気づけられて、タチヤナは出て行った。

「いろんなケースがあるんです。時にはここの仕事の範囲を著しく越えることもあります。でも今のケースは最も単純です。労働組合の同意がない解雇は完全に違法です。裁判所は管理部に直ちに彼女を元のポストに復帰させ、その上、やむを得ず欠勤した日数に対して賃金を払うよう命令するでしょう。もっともこの場合は裁判までいかないだろうと思いますが」と、ブラセンコは言う。

こうしている間に次の相談者リュドミラ・ロギノワが入って来て席につく。約20年間化学工場で働いて来た。年金受給開始年齢（化学産業従事者は一般の55歳より低くて50歳で年金生活に入れる）まで働いた。働くのをやめたいわけではない。ただ働き場所を変えたいと思っている。希望は一交替制で家に近い職場。賃金の額はそれほど重要ではない。賃金と年金を同時に受ける権利があるから。必要な条件は、動きのある仕事——老けこみたくない。

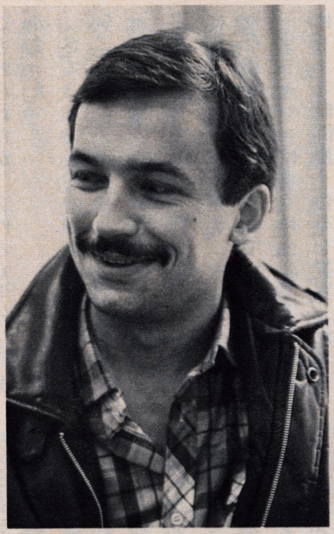
ブラセンコは建設トラストの実習コンビナートを提案する。ここからは修理工、配車係、倉庫係など沢山の求人が来ている。現場へ行って選んだ方がいいだろう。

詩人は言った——〝恋をしている青年は目を見れば分かる〟と。セルゲイ・ザイーカの場合はまた、ごく単純な質問に答える時の、その幸せそうな笑顔から察しがつく。1カ月後に結婚式を控えている。所帯持ちともなれば独身時代と違って金がかかる。今より収入のいい仕事に就きたいと言う。

職業は運転手。ブラセンコはてきぱきと必要な求人票を見つけ出す。通勤が大変ではないかしら？　トロリーバスからトロリーバスに乗り次がなくてはならないのだけれど。セルゲイは満面にあの幸せいっぱいの笑みを浮かべて、「大丈夫、遠くないですよ」と請け合って、帰って行った。

ピョートル・ポボリャ——自動車修理工場の仕上げ工もやはりもっと収入を増やしたいと言う。面接の順番を待っている間に所内のドアに張り出されている求人リストを物色し、その中から仕上げ工＝衛生設備管理工の仕事を選んでいた。だがリジア・ブラセンコはなぜか紹介状を書くのを急がず、ピョートルにただした。

「住宅管理事務所の衛生設備管理工ですね？　よーく考えたのですか？　ピョートル、あなたは若いわ。必要なのはお金だけではないでしょう、資格も権威も、それに地位だって必要でしょう。仕上げ工＝衛生設備管理工という職種は余計なわずらわしさを避けたい、年配者向きの仕事よ。まだ何も決めない方がいいわ。工作機械工場に行ってごらんなさい。近代的企業で、



首ったけの女の子と1ヵ月後には結婚するんだ！給料のいい職場へ転職しちゃおう！——23歳のセルゲイ・ザイーカ。



リュドミラ・ロギノワは自分で自分の運命を切り開いていくタイプの女性。自分がこれからやりたい仕事を的確に定義する。



ラリサ・ロマネンコは内職をしたいと思っている。「娘が学校に上がったら、私も何か技術を身に付けたいわ」

労働条件はいいし、すばらしいスポーツ総合施設もあり、将来性もあるわ。賃金の方も最高二〇〇ルーブル（ピョートルの現在の賃金のほぼ2倍）だし」

ピョートルは席を立ちながら、「考えてみます。でも住宅管理事務所への紹介状も書いて下さい……」と頼んだ。

タマラ・ボーリナが机の前に座った。電話のベル。ブラセンコは失礼、と言って受話器を取った。

「本当によかったわ、本当に！　お幸せにね、早く引っ越せるといいわね」——ブラセンコは私たちの方を向いて、「ソハツカヤです。私が言ったように解雇は違法だったようです。明日から元のポストに戻りますって」——と説明し、今度は相談者の方を向いて「お待たせしました」

タマラ・ボーリナは最近チェルカッスイに来たばかり。夫が転勤になったのだ。タマラの専門は教職だが、今まで住んでいた遠い遠い建設場では専門にあった職はなかった。ビュッフェで働いていた。講習を受けて商業関係はもう嫌だが、中学校で教えるのは経験がないので少し怖い。

「児童図書館で働いてみますか？」

ボーリナはやってみたいと思う。でも自分の目でどんな仕事か確かめないと、それに夫にも相談してよく考えなくては……

オリガ・シクワルの一家はほぼ家族全員が姿を見せた。オリガ自身と腕に抱かれた息子のアリョーシャ、ひざのところには娘のイリーナが寄り添うように母親にくっついている。いろいろ質問しなくても一目瞭然、内職がいい。専門はタイピスト。

リジア・ブラセンコは求人申込書を探す。

「ただ、私いまお金に困っているんです」——おずおずとオリガは言う。

ブラセンコは相手の立場がよく分かる——「あなたが働くことになる機関からタイプライターがご自宅に届けられるわ」

この日の最後の相談者がオリガ・シクワルだった。就職あっせん所全体だと34番目の相談者だった。

30—40人に年間このあっせん所が働いている日数を掛けると……だがリジア・ブラセンコは、目のまわるような数字を算出しようとしている私たちをおしとどめる。統計だと、ここで提案する仕事にすぐ同意するのは相談者の半分だけだという。転職を思いとどまる人もいるし、再度ここを訪れる人もいる。後者はここでもっとよく探し、はかりにかけ、考えに考えて、いろいろなバリエーションを検討する。これこそ自分が望んでいる仕事だと自分自身が納得するまで……



▲2人の子どもを育てながらでも内職はOKよ！　とオリガ・シクワルは自信満々。



「児童図書館てとても教育的な仕事だわ」——審査官が勧める仕事についてあれこれ考えるタマラ・ボーリナ。



審査官が紹介してくれた職場で働けそうなので喜ぶワシリー・ラトゥシヌイ。

はるかなりオーゼロ・バイカル（上）

文 伊藤 俊郎　絵 大塚 勇　写真 八木下 弘



同行４人。左から伊藤さん、大塚さん、ウラソフ記者、八木下さん（オリホン島の波止場で）。

八月三十日、新潟。フェーン現象で気温35度と暑いこの日。ある三人組がシベリアに出発するところである。べつに仕事のための出張や、大企業、大組織バックの旅行ではない。めざすはバイカル湖。大自然の面白さにひかれての、個人旅行である。

小柄で髪の長いのが、ツカさんこと、大塚勇さん。東京は銀座でデザイン事務所をもつ画家で、名に知れたウォッカ（あの強いロシアの酒）好き。苗字の発音が似ているので、「ウォッカさん」と呼ぶ人もある。

となりにいる、常時三台のカメラを首からぶらさげているのが、ヤギさんこと、写真家の八木下弘さん。彼にはすでに何冊かの写真集があるが、つぎの目標はシベリア写真集をまとめることである。

さて、その次のこれといって特色のない平凡な男が私、つまり伊藤俊郎で、某出版社の編集者を長くつとめ、いまは物書きのはしくれである。

この三人は、四十年前シベリアで捕虜だった。バイカル湖のほとりのイルクーツクで三年間働いていたのである。

もとより好んで捕虜になったわけではないから、当時つらいこと不愉快なことは山ほどあった。しかし、それは昔のこと。いまは平和な世の中になって、かつてそこにいた思い出の土地を自由に歩きまわれるのは、何よりめでたい。

むかし捕虜だったといえば、年はすぐ推定できる。三人ともすでに還暦を越えている。したがって三人の年を合計すれば、優に百八十歳を越えるわけだ。だが、よぼよぼしているだろうと想像されては困る。その証拠にこのシベリア旅行中、はじめて会うロシア人のほとんどが、私たちを四十代とかん違いしたものだ。しかし……年の話はもうやめよう。

私たちは「アンガラ会」のメンバーである。この会は私たちと同じかつてのイルクーツク第一収容所の捕虜の仲間がつくっている親睦の会で、会員は全国に二百数十人おり、平和を守ることを旗印に活動している。

バイカル湖を一周したいというのは、私たち三人の長い間の夢だった。南北636キロ、東西79キロ、最深部1620メートルにおよぶ神秘の水をたたえた海のような巨大な湖。いつの日か、この全沿岸をめぐり、その自然とそこに住む人々を訪ね、他日本にして出版しようという念願が

やっとかない、その第一歩がはじまろうとしているのだ。ただし残念ながら、今回だけでは一周できない。おおまかに言って湖の西岸はイルクーツク州に、北と東岸はブリャート自治共和国に属しているが、今回廻れるのは西岸だけであり、ブリャートへは他日、別にビザを申請しなければならない。

さて、定時に飛びたった飛行機は日本海を渡って無事にハバロフスクに着陸。一晩ホテルに泊まって、翌日ふたたび飛行機でイルクーツクに向かう。夕方空港に到着すると、果たして予期していた人が出迎えに来てくれていた！ それがノーボスチ通信イルクーツク支局の記者ウラソフ氏である。

この人とアンガラ会との付き合いは、もう十年以上にもなる。そして今回の旅行の一切のお膳立てをしてくれたのがこの人であり、しかも、これから私たちの長旅に終始同行してくれるという。まことにありがたい。まだ四十代に間のある氏は、私たちより首一つ背が高く口髭をはやした男前で、その目は羊のようにやさしく、心はあたたかい。

「兼六園クラブ」というイルクーツクにおけるソ日親善の団体をつくった人で、日本語にもかなり堪能である。したがって、この人が今後通訳の役目もしてくれるわけだ。今後は「ウ氏」と略称させていただく。



イルクーツク第25学校の人たち（大塚勇・画）

そのウ氏がいう。

「タトエバー（話の始めに、例えば、というのがウ氏のくせである）明日ハココカラ近イノ小学校デ入学式ガアルノデ、ゴイッショシタイデス。ゴ異議アリマセンカ？」

もちろん、三人とも賛成する。

さて、翌日は九月一日である。日本では四月だが、ソ連ではこの日入学式が行われる。行き先はイルクーツク第25小学校。行ってみると校舎の前には、もう子供たちと両親がいっぱいつめかけている。男の子は紺の制服、女の子は濃茶の服に頭には白い大きなリボン、白いレースのエプロンをつけて、まばゆいばかりに

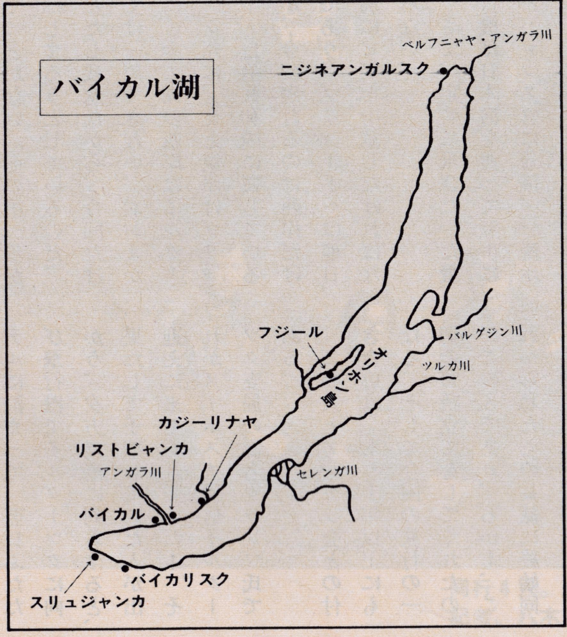


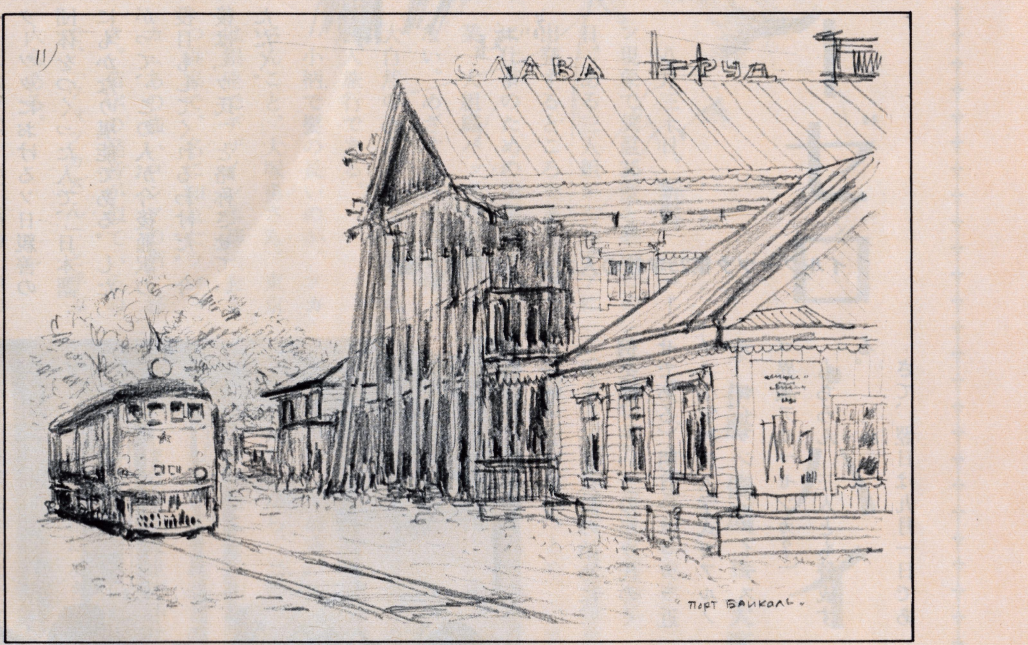
イルクーツク市バイカル区の第25小学校で

可愛らしい。手に手に色とりどりの花束をもっている。まず国歌の吹奏、そして生徒たちによる国旗の入場、校長、来賓の挨拶と式は進む。そして最後に、今年卒業する男生徒代表の一人が新入生のまだあどけない女の子一人を肩に、場内を一巡する。拍手また拍手。

式がすんだ後、生徒は全員教室に入って各学級ごとに一時間ずつの授業を受ける。そのテーマは「平和の重要さ」についてである。それは私たち日本人から見て、きわめてユニークなものだ。

私たちはこの旅行中、いたるところで、そしてあらゆる人の口から「平和」と「親善」の言葉を耳にした。そのことは、この国民の間に、戦争の愚はなんとしても避けるべきだという思想が、広く深く浸透していることを意味している。それはこのように小学校教育から組織的に行われている成果なのだ。そしてこのことは賞賛に値する。こうした「平和教育」はこの国だけでなく、日本でもアメリカでも、世界のいたるところで行われるべきなのである。





バイカル町で（大塚勇・画）

左上　人影のない湖畔を散策（カジーリナヤで）

左下　夫婦2人だけで狩猟小屋を守るオリガさん（カジーリナヤ）

入学式を見た後、私たちは日本人墓地に墓参し、翌日はイルクーツク外国語大学を訪ねた。また、むかし私たちが働いていた工場を再訪したり、知人に会ったり、というあわただしい時間をすごしたので、本格的にバイカルへの旅に出発したのは九月五日だった。

イルクーツクからバイカル湖畔の町リストビャンカまでの75キロを、タイガ（原生林）を切り開いてつくった一本の道がえんえんと延びている。その道を私たちの車は、ひたすら走りつづける。リストビャンカからは小さな船で岸に沿って北上し、波を蹴立てて走ること二時間。着いたところがカジーリナヤである。

ここには何があるか？　無限の空間と時間があるだけである。目のとどくかぎり広がる草原と森林、岩山、そしてバイカル湖の白波……。しかし、ここにも人が住んでいる証拠に小さな丸木小屋が四軒、



風の中に建っている。私たちはそこに荷をおろし、ここにご主人と二人だけで住んでいるオリガさんに挨拶をする。

部屋のペチカの上には、クマを追いたてている猟犬の絵が描いてある。つまり、ここは狩人たちの基地なのである。オリガさんの話では、この山奥にはオオシカやクマのほか、オオカミやヤマネコがたくさん棲んでいるそうだ。しかし、この長閑な風景にいると、そんな物騒な動物がいるとは思えない。猛獣はごめんだが、オオシカにでも会ってみようかと、四人で山をめざす。

ヤギさんは商売道具のカメラをもち、ツカさんはスケッチブックを手にしている。草地と白樺林を歩くこと一時間ばかり。

「タトエバー、ココマデガ人間ノ国、コノ先ガ動物ノ国デース」とウ氏。なるほど柵でしきられている。その「動物の国」を、オオシカをおどろかさぬよう、声をひそめて山深く10キロばかり分け入ってみたが、シカの姿はとうとう見えなかった。

夕方小屋に帰ると、ウ氏の提案でバーニャ（風呂）に入ろうということになる。これは今はやりのサウナ風呂の原形である。ペチカの中に石を積み、焚口から薪をどんどん燃やす。三時間もたつと、石は真っ赤に灼熱する。それに手桶で水をブッかけると、熱い蒸気がわっと風呂場の中にたちこめる。そこで片隅の木の台に横になったり、腰掛けたりしながら、葉のついた白樺の小枝で、からだをピシピシたたく。と、汗が身体中からどっと吹き出してくる。伝統的なロシアの風呂だ。



「ううっ、熱い、熱いっ！」

耐えられなくなると、外にとびだす。小屋の四、五メートル先は、すぐバイカル湖だ。いっさんに寒風の中を走って行って、とどろく高波を頭からかぶる。そして今度は寒いのでまた小屋にかけ戻る。私はごめんこうむったが、ウ氏とツカさんは何度もそれをくりかえした。

やがてカジーリナヤは、とっぷり暮れて、ペチカだけがあかあかと燃えている。私たちの旅はまだ始まったばかりである。

（以下次号）

話題を拾う

増えるソーラーハウス



ザカフカズとソ連中央アジアの諸共和国では、太陽熱を利用した暖房つきの家の建設が増えている。何しろ、これらの地域は年間の晴天日数が300—320日もあるので、うってつけなのだ。

家の大きさに合う何種類かの太陽熱暖房器のモデルが開発されている。屋根の南面に取り付けられた特殊アルミ合金製の集熱器が暖房システムの循環水を暖める。これによって家の暖房に必要な燃料が平均70％ほど節約できる。右の写真はアルメニア共和国メルツァバン町のソーラーハウス。

シベリアの少年ヨットクラブ



西シベリアのオムスク市のピオネール宮殿にピオネール・ヨットクラブが誕生してからもう4年以上になる。ここの設備の調った工房では、経験豊かな航海士ビクトル・チューシェフの指導のもとに、200人以上の子どもたちが帆走技術の基礎を学び、さまざまな船の模型やごく簡単なヨットを作っている。夏休みには自分たちが作ったヨットで幾日もかかってイルティシ川下りをしたり、各地のヨットレースに参加したりする。

家族サイクリングはこれで



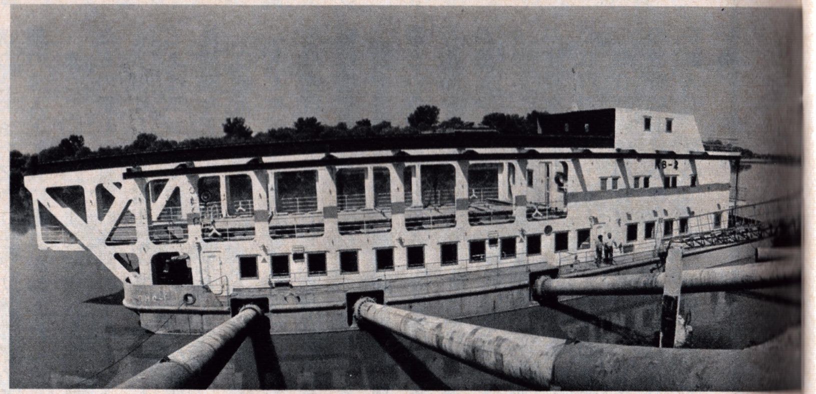
このユニークな自転車を考案したのはキルギス共和国の首都フルンゼのタクシー運転手セルゲイ・シチェルビナ。2台のスポーツ用自転車をパイプでつないで〃4輪車〃に仕立て上げた。シチェルビナ家には乗用車もあるが、一家は自転車で出かけるほうが好きで、1週間休日には郊外までサイクリングして、1週間分の英気を養うことにしている。

この4輪自転車の特長は、ほんの数分で元の2台の自転車にもどすことができる点だ。

改善されるバクーの水事情

アゼルバイジャン共和国の首都バクーがあるアプシェロン半島は、昔から淡水不足に悩まされてきた。160万人以上の人口と発達した工業を持つ都市バクーにとって、それは深刻な問題だった。

数年前、追加の給水システムを作ることが決まり、すでに工事は完成に近づいている。それは全長145㎞のパイプラインによってクラ川の水をバクーまで引こうというもの。この給水システムが運転を始めれば、バクーは毎分7.8立方mの水を新たに受け取ることになる。右の写真はクラ川に浮かぶ取水ステーション。



二〇〇〇年までに消費財の生産を倍増

――消費財生産とサービス分野の発展に関する新しい長期総合計画

レオニード・コレネフ

なぜ消費財生産総合計画が必要か？

10月9日、一九八六年から二〇〇〇年までの消費財生産とサービス分野の発展に関する長期総合計画が、ソ連各紙に発表された。

ではなぜこのような計画が必要になったか？　計画経済のもとでは資本主義諸国の市場経済のように、需要を価格の引き上げで人為的に操作することなどなく、住民の実質所得がたえず増加することをめざすとともに、消費財の価格の規制に努めている。ソ連ではここ数十年間ずっと消費財の価格を安定させる方針がとられている。たとえばこの20年間にアルコール飲料を除く消費財の国家小売り価格指数は、ソ連全体で約10%上がったが、一方人口一人当たりの実質所得はこの期間に倍増した。

それから家賃などのさまざまの非商品的支出が、大多数の住民層の家計の中でほんのわずかの割合しか占めていないことも計画経済の特徴である。たとえば家賃は世帯支出の平均わずか3%にすぎず、あらゆる種類の税金は支出の8—9%以下である。また多くの社会的サービスは無料か、ごく安い。それで全体としてソ連の世帯は支出の80%までを商品の購入に当てることができ、その結果客の購買力は上昇している。

しかし消費財の生産分野のある問題が解決されても、やはり別の問題が出てくるものだ。とくに緊急に解決しなければならない問題の一つは、需要の伸びに生産能力が追い付かないことである。ソ連では大多数の消費財は、所得の水準のいかんにかかわらずどの世帯も入手できなければならないとされており、価格も安く抑えられている。小売り価格がコストを割る商品もある。たとえば子供用品であるが、国は多くの子供を持つ世帯の支出をカバーするためにこれらの商品に助成金を出している。

現行の第11次5ヵ年計画では消費財の生産の伸び率は、ソ連の経済の伸び率よりも高く設定されており、一九七五年から現在までにソ連工業の消費財の生産高は40%増えた。

とはいえ、この伸びがスムーズに進行したわけではない。住民の量的需要が満たされるにつれて、生産の質の向上が要求されるようになったのは、むしろ当然といえよう。たとえばソ連の靴の生産高は世界一だが、客の好みに合っていないものがある。

つまり計画経済は、これまでの需要を考慮するだけでなく、明日をも予見しなければならない。こんどの消費財生産の長期計画は、さまざまの将来の需要を予想して策定されたものであり、科学的勧告に基づく多数の商品の合理的消費ノルマが計画の指針になっている。しかしこれらのノルマは消費者にとって指令的性格をもつものではなく、生産者にとって指令的なものである。

総合計画の概要

総合計画によると、一九九〇年には消費財の生産は一九八五年比1・3倍に、二〇〇〇年には1・8—1・9倍になり、有料サービスの量もそれぞれ1・3—1・4倍、2・1—2・3倍に増える。

二〇〇〇年までに国民所得は倍増する予定であり、消費財の質の改善と品目の増加、商業、公共給食、運輸、観光などにおけるサービスの進歩的な形態の導入と拡大に重点がおかれる。

また二〇〇〇年までに繊維製品、靴などの新しい良質の商品の生産をおよそ2倍にし、日常生活・文化用品、たとえばラジオ受信機、テレビ、冷蔵庫、洗濯機などの生産が優先される。

自動車も増産され、今後5年間にニューモデルの乗用車が数種登場する。その他自転車、オートバイの生産も大幅に増やされる。

勤労者の休息や余暇時間の合理的利用という観点から、スポーツ用品、旅行用品をはじめ、レジャー用品の生産が急ピッチで増やされる。またサナトリウム、保養所、旅行基地などの施設の建設を拡大し、二〇〇〇年までにその収容力を2・3—2・5倍に増やす。

総合計画は消費財の生産やサービスの分野における社会主義諸国との協力を拡大し、深めてゆくことをうたっている。

新刊紹介

歴史の現実に対する重厚な科学的照明

――P・フェドセーエフ著『20世紀のマルクス主義』

九州大学教授　荒牧　正憲

このたび、ソ連科学アカデミー副総裁、P・フェドセーエフ氏の著書『二〇世紀のマルクス主義』が社会主義協会出版局から翻訳出版された。

本書の著者は、革命後六〇年の風雪をくぐり抜けて現実に躍動をつづけているソ連邦の歴史的教訓と課題を、つぎのように総括している。

「確固たる唯一の地盤をもった科学としてのマルクス主義の一枚岩たる性格は、その弱さをではなく、その強さを物語っている。また、マルクス主義に様々な解釈が出現したという事実が物語っているのは、マルクス主義の危機ではない。運動のなかに何千万人、何億人もの人々が新たに参加し、しかも、政治的、経済的水準を異にした国々、独自の歴史的伝統をもった国々等が社会主義の旗印のもとに立っている今日、社会主義の理念が万人に一様に受けいれられるであろうと考えることこそ、ナイーブというべきである。だが、様々な国々、様々な大陸の何千万、何億もの人々が科学的社会主義に味方している状況そのものが、マルクス主義の影響力の伸長を物語っている」（二三三ページ）と。

本書は三部より構成されている。第一部では科学的共産主義の生成と発展が、三つの章で論じられる。科学的共産主義の創始者としてのカール・マルクス、フリードリッヒ・エンゲルスと共産主義の理論と実戦におけるその貢献およびマルクス主義と二〇世紀における根本的社会問題が、その内容となっている。マルクス・エンゲルスの思想と実戦的指針が、なぜに、どのような意味で、二〇世紀における根本的な社会問題解明の基礎となりえたのかが、ここで考察されているのである。

第二部は、現代のマルクス主義としてのレーニン主義が、共産主義の偉大なる理論家＝レーニン、レーニン主義による主観主義と客観主義の批判、民族問題にかんするレーニンの学説とプロレタリア国際主義の諸問題およびレーニンの芸術理論の諸問題という視角から評価されている。これをうけて、第三部において、活動する革命的イデオロギーが、大一〇月革命の歴史的経験の国際的意義、共産主義建設におけるソ連邦共産党の指導的役割、ファシズムにたいする勝利の歴史的教訓という三本柱でもって解明され、歴史的現実の理論的位置づけと諸課題が提起されている。

マルキシズムとは発展の理論である。それは、歴史的現実のなかに生起し、自然と社会に進歩をもたらすすべての新しいものを発見し、一般化し、革命運動と共産主義建設による新しい経験によって、みずから豊富化されねばならない理論である。搾取からの解放、民族的抑圧と戦争からの解放という三重の歴史的使命を負って誕生したソ連邦が、「歴史の処女地を開墾し」、試行錯誤の歴史的試練のなかから歴史の教訓を発見し、社会主義建設のための歴史的年輪をより強固にしてきたこと、そしてこの同じ歴史の過程が、社会主義世界体制の形成と展開、民族解放運動の発展、資本主義諸国の勤労大衆のたたかいの高揚という国際的意義を高めたこと、そしていまでは、このことの歴史的意義が全人類の現実的運命となっていることを、著者は、重厚な哲学的世界観でもって説得的に提起しているのである。

歴史はいつでも複雑な諸関係の重層的なからみ合いとしてしか現われない。しかし、こうした複雑な諸過程のからみあいの時間史的経過を通してのみ、歴史の法則が貫くのである。本書はまた、その意味で、歴史の現実にたいする科学的な照明でもある。必読の書である。

本書はA5判五三〇ページ、定価一万四〇〇〇円。発行所は社会主義協会出版局（東京都千代田区麹町5－3秋山ビル、電話03・263・4241㈹）

ノーボスチ通信 特派員報告

APH

人種差別政策を守るためのアンゴラ侵略

V・ミールヌイ記者（ルアンダ）

9月15日モザンビークのマプトでアンゴラ、モザンビーク、タンザニア、ザンビア、ジンバブエ、ボツワナのいわゆる〝前線近辺〟諸国の首脳会議が開かれ、「会議参加者は南アフリカ共和国によるナミビアの不法占領とアンゴラ、モザンビークに対する武力挑発を非難する」とのコミュニケを採択したが、このとき南ア共和国はナミビア・アンゴラ国境でアンゴラ侵入の準備を終えていた。

9月16日、南ア共和国の正規軍部隊は航空支援を得てアンゴラ国境を越え、アンゴラ領に侵入した。南ア共和国政府は南西アフリカ人民機構（SWAPO）に加わっているナミビアの愛国者を〝追撃する〟ためと称して、これまでにも何度もアンゴラ領を侵犯してきた。

現地の新聞は、こんどの南アの侵攻時期は、人種差別主義者が後押しするアンゴラ全面独立民族同盟（UNITA）の徒党に対するアンゴラ軍の戦闘行動が成功した時期と一致していると指摘している。南アのレオン・コク南アフリカ国際関係研究所長は、南ア軍の侵攻の目的の一つは、UNITAの部隊を救援し、部隊を壊滅から救うことであるとズバリ声明した。

南ア共和国軍の新たな侵略は、南ア自体の深刻な危機状態から国際世論の注意をそらすねらいをもっていることは、たやすくわかる。非人間的な人種隔離政策体制に反対するアフリカ住民のみぞうの規模のデモは全国に広がっており、官憲は残虐な弾圧によって反対行動の波を静めようとしている。

アフガニスタンの国境周辺部族代表の最高会議

V・トロフィーモフ記者（カブール）

アフガニスタンの首都カブールで、9月の半ばに建国以来初めて、パキスタンとイランとの国境沿いの地域に住む諸部族の最高ジルガ（人民代表評議会）が開かれ、40余の部族の代表二〇〇〇人余りが参加した。

ジルガとは、三〇〇〇年以上も前からアフガニスタンに存在する集団自治の伝統的な形態である。ジルガは、最重要の全国民的、国家的諸問題に関する決定を採択するために招集されるが、これらの決定は採択後に法律としての効力をもつ。

国境沿いの諸部族が住む地帯は、アフガニスタンの経済の最も後れた土地である。以前の王国の支配者たちはこのことにほとんど関心を持たなかった。現在人民政権は部族の習慣、伝統を尊重しながら、これらの地域を変革し、ここに工業を創設し、現代文化と生活の諸要素を導入するために多くのことをしている。政府は病院を建て（医療センターはいまではもうすべての国境沿いの諸州にある）、学校を新設し、反徒らに破壊された学校を修復し、井戸を掘り、灌漑網を建設している。アフガニスタンの水問題は経済問題だけでなく、政治問題でもあるからだ。部族間の不和を引き起こす矛盾を一掃するためにも多くのことが行われている。

国境周辺部族の最高評議会の代議員の多くは、アフガニスタン最大の民族（全人口の55％）――パシュトゥン族のさまざまな部族を代表している。最高ジルガの代議員のうち部族の長老が65％、イスラム教の導師と聖職員が18％を占め、元国会議員、議員、部族義勇軍の指揮官もいる。

代議員の中には、かつて反革命の陣営に加わっていた人々やアフガニスタン人民の敵のこうかつさを体験した人々も大勢いる。その一人、パクチカ州出身のシャイスタ・ハンさんの話――「反革命側の幹部は、アフガニスタンではイスラム教徒は社会ののけ者にされている、としょっちゅうわれわれに吹き込んだが、私は都市や村に行ってみて、全く正反対のものを見た――依然空き地だった所に新しいイスラム寺院の建物が立っていた。勤行時報係の声がきまった時間に祈とうを呼びかけている。それなら私の衣の下のピストルは何のためなのか、と考えた」

シャイスタ・ハンさんと一緒に一五〇人の同じ部族の人々が政府の側に移った。しかもこのような傾向は増大している。

最高ジルガの参加者たちは国境警備に関する主要な問題を討議して、次のような声明を採択した――「今後パシュトゥン族、ベルジ族は、自分たちの居住地域で合法中央政府にほこ先を向けた活動を一切許さず、武装反革命ゲリラや武器を携行した隊商、外国の基地で訓練され、装備された破壊活動グループの国内浸透を阻む政府の努力を助けるだろう」

ソ連の新聞記事から

（一九八五年10月前半）

党中央委員会で

ソ連共産党中央委員会政治局は一九八六年から二〇〇〇年までの消費財生産とサービス分野の発展に関する総合計画を検討し承認した。このような計画が策定されたのは初めてであり、勤労者の高まる需要の充足に転換をもたらすはずである。この総合計画の採択は飲酒とアルコール依存症に対する党の妥協を許さぬ闘争が展開されている状況の中で特別な意義をもっている。

国民福祉の向上は党の最重要の綱領的要求であり、党の社会・経済政策の核心である。国民のための商品の生産拡大、品質改善、あらゆる種類のサービスの速やかな発展を党は、国民の生活水準を質的に新しい、より高い段階に引き上げるための必要条件とみている。

商品生産に従事している諸部門の急テンポの発展、発達した有料サービス網の新設、国民経済のすべての部門の企業、企業合同、機関をその専門分野のいかんにかかわらずこのサービス網に引き入れることが重要な課題である。

商品の生産と住民サービスは科学技術進歩の成果の利用に基づいて行われるが、それは消費財とサービスの質を新しい段階に引き上げ、商品の種類を大幅に増やすことを可能にする。

（プラウダ紙10月1日号）

党中央委政治局の定例会議

政治局は二〇〇〇年までの期間のソ連国民経済の化学化総合計画を検討した。この計画によって鉱物肥料と農薬、最新のプラスチック、化学繊維とその他一連の重要な化学材料の大幅な生産増が予定されている。

一九八六年から九〇年までの資源基地の優先的発展および非鉄金属工業の技術水準の向上に関する諸措置についてのソ連共産党中央委員会とソ連閣僚会議の決定が採択された。

政治局はM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長のフランス訪問の結果を検討した。書記長とフランスのF・ミッテラン大統領、その他の政治家、社会活動家との会談、交渉の結果達成された合意は、ソ仏間の友好関係の一層の発展に良好な基礎を置くものであると強調された。欧州の安全強化、全欧州協力の拡大および国際情勢の改善にとってのソ仏首脳会談の重要な意義が強調された。

A・A・グロムイコ同志の、D・ラチラカ・マダガスカル民主共和国大統領との会談についての報告を聴取し、第40回国連総会でのソ連代表団の活動および米国での米大統領、その他諸外国の政治家との会談についてE・A・シェワルナゼ同志の報告を聴取し、承認した。

ソ連共産党中央委政治局の会議では国内外の政策の他のいくつかの問題に関する決定が採択された。

（ソビエツカヤ・ロシア紙10月11日号）

ビーバー移住作戦終了

カレリア地方やレニングラード州からカムチャツカ半島へビーバーを移住させる実験は8年前から行われているが、このたびめでたく終了。先日レニングラード州から空輸された最後のビーバーの一団が半島の川に放たれた。

8年間を通じて二五〇頭以上のビーバーが空輸され、この火山半島の20以上の川や湖がビーバーたちの住みかになった。カムチャツカの風土が肌にあったようで、専門家の調査によるとすでに一〇〇〇頭に近い数になっているという。

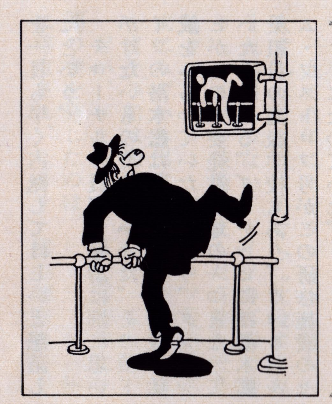
最近はヘラジカもカムチャツカの谷間のタイガに移された。ミンク、マスクラットも新環境に順応し、今や産業頭数に達し、毛皮産業で主要な地位を占めるようになった。

（イズベスチヤ紙10月9日号）

ルノーとの契約まとまる

全ソ自動車工業輸入公団とフランス国有会社ルノー自動車の間でこのほど契約がまとまり、レーニン・コムソモール記念自動車工場のモスクビチ二一四一モデルとそのバリアント車の組立て・溶接用の自動ラインがわが国に供給されることになった。現在、ルノー自動車とリブヘール社（西独）が共同でモスクビチ生産合同の諸工場の拡張・改造技術プロジェクトを作成中である。

（ソビエツカヤ・ロシア紙10月4日号）



（E・ミルトカ作、クロコジール誌9月27日号から）

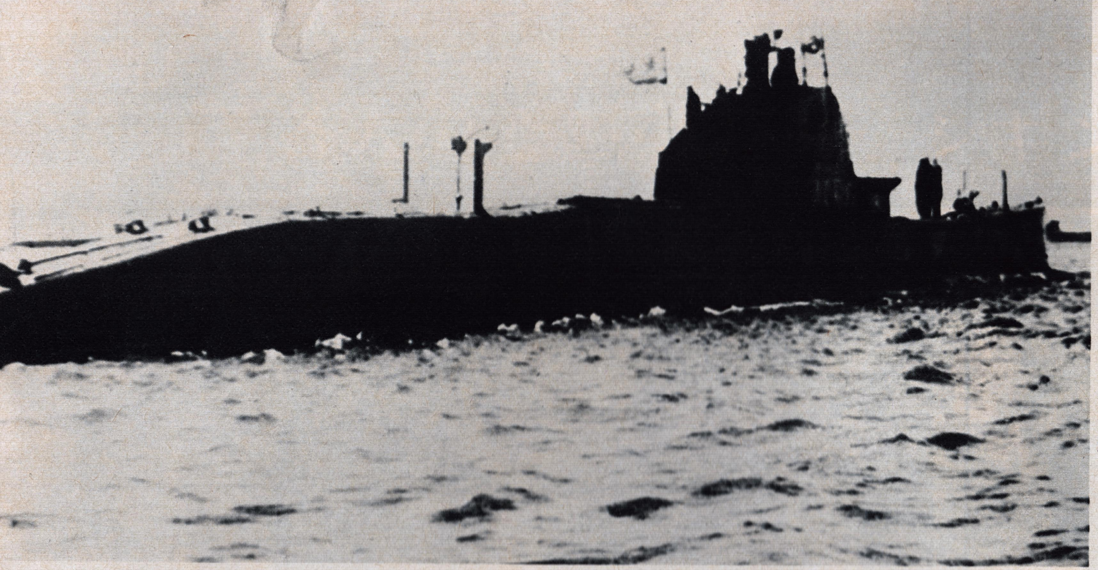
大祖国戦争勝利40周年

第三帝国の仇敵だった男

ドミトリー・アルダマツキー



アレクサンドル・マリネスコ海軍少佐



大祖国戦時のソ連の潜水艦

この1年間にわたって本誌は大祖国戦争（一九四一―四五年）勝利40周年に関連した記事を掲載してきた。あの困難だった年月のわが国の戦いと生活のさまざまな側面に照明を当てることに努めたつもりだが、〃画面に現れずに〃しまったものももちろん多かった。そこで、同じ戦いと勝利を題材にしたシリーズをこれからも続けることにした。本号では海上の戦いの実に興味深いエピソードの一つを紹介する。

海軍少佐アレクサンドル・マリネスコ（一九一三―六三）は、大祖国戦争の終盤でヒトラーが第三帝国（ナチス・ドイツ）の敵ナンバーワンであり自分個人の仇敵だと呼んだ人物である。「これほど高い名誉」を勝ちとったソビエトの海軍士官はいったいどんなことをやったのだろうか。

アレクサンドル・マリネスコが艦長であったソビエトの潜水艦C13号は、わずか一回の出撃でドイツの大型客船ウィルヘルム・フストロフ号（二万五四八四トン）と大型軍用輸送船ゲネラル・シュトイベン号（一万四五〇〇トン）を撃沈したのであった。この損害は非常に手痛いもので、ヒトラーが3日間の喪を発したほどであった。

チャーチルの懇請

ソ米英三国首脳のヤルタ会談（一九四五年2月4―12日）に出席したソ連のニコライ・クズネツォフ提督の回想録によると、チャーチル首相は第1回の会議で、ソビエト軍のダンチッヒ（現在のグダニスク）占領はいつになるのかとスターリンに質問し、ドイツ海軍にとって重要なこのバルト海の港を一日も早く占拠してほしいと懇請したという。

チャーチルの質問と懇請は別に思いがけないものではなかった。その頃ドイツの潜水艦は英国の海上連絡線で猛威をふるっていたのであり、ダンチッヒがその主要発進基地の一つとなっていたのである。ダンチッヒには潜水艦乗組員の高級学校もあり、ウィルヘルム・フストロフ号がこの研修施設のセンターになっていた。

英国側は、ドイツが新鋭の潜水艦隊を使って英国の海上封鎖をやる準備を進めていることに気付かないわけにはいかなかった。そして、英国側の心配は間もなく事実で証明された。一九四五年1月21日ドイツ海軍のデーニッツ最高司令官はダンチッヒ地区に待機中の全潜水艦に対して至急キールとハンブルグ両港へ入って新しい潜水艦隊を編成せよとの暗号電信を打ったのである。

1月の末ウィルヘルム・フストロフ号に三五〇〇人を超える潜水艦乗組員が乗りこんだ。これだけの人数で約一〇〇隻の潜水艦の乗組員と、ほぼ同数の艦の士官の乗組員を編成できるはずだった。

C13号の攻撃

ソビエト潜水艦C13号は一九四五年1月9日出撃した。ドイツ軍部隊の後送を妨害し、敵の大型艦艇および輸送船を撃沈せよとの命令を受けたのである。

1月30日アレクサンドル・マリネスコ艦長は、ダンチッヒ港の西の入り口から12マイル北のリックスヘフト灯台へ針路をとれと命令した。この地点で大きな護送船団がダンチッヒ港から出て北西の方向へ針路をとっているところを発見した。水中聴音器はその護送船団に双スクリューの大型船がいることを教えた。

C13号はさまざまな機動行動をとり、護送船団より海岸寄りの位置に入った。船団と平行する針路をとり、水上には司令塔だけを出して追いかけたが、目標の速力の方が速く、艦の速力は大きくなったが、C13号は護送船団より遅れつづけた。マリネスコは海岸側からの攻撃計画を立てた。これは大変な危険と紙一重の計画だが、実は敵はこの方面からの攻撃の可能性が最も少ないと予想していたのである。

追跡は2時間にわたった。マリネスコはエンジンを全開してできるだけの速力を出せと命じ、自分は艦橋から離れなかった。視界は極端に悪く、雪が顔に当たって、照準が困難だった。だが、そのかわり護送船団の方でも潜水艦に追跡されていることに気付かなかった。

23時02分C13号は攻撃路に入る作戦ラインに達し、魚雷発射点についた。緊張は限界に達した。命令一下3発の魚雷が扇の形をとって夜霧の中を突進した。数秒後、海面が炎で真っ赤になり、すぐ鈍い爆発音が起こった。3発全部が命中したのであった……

しかし、C13号も危地におちいった。敵の駆逐艦6隻がC13号めがけて爆雷攻撃を加えてきた。潜水艦狩りは4時間続いた。合計二四〇発の爆雷が投下されたが、一発もC13号に損害を与えなかった。潜水艦はうまく敵の攻撃をかわして安全な場所へ逃げた。間もなくマリネスコ艦長はまた新しい大きな目標の所在を示す情報を無電で受けた。数隻の駆逐艦に護送された大型の軍用輸送船ゲネラル・シュトイベン号がケーニヒスベルク（現在のカリーニングラード）を出て西方へ進んでいた。

C13号は目標を発見した。二度目の追跡、二度目のエンジン全開、全乗組員の緊張はふたたび限界に達した。こんどは艦の位置からみて、マリネスコ艦長は艦尾の魚雷2発を発射した。ゲネラル・シュトイベン号は三五〇〇人のヒトラー・ドイツ軍将兵を乗せたままバルト海の海底深く姿を消した。

潜水艦C13号が基地に帰投したとき、マリネスコ艦長は自分が達成した成功の詳細を知らなかった。けれども、ドイツ国内ではもはやこの〃全国に影響をおよぼす〃海上の悲劇のうわさが流れていた。このことを最初に報じたのはスウェーデン放送だった。

ヒトラーにとっての破局

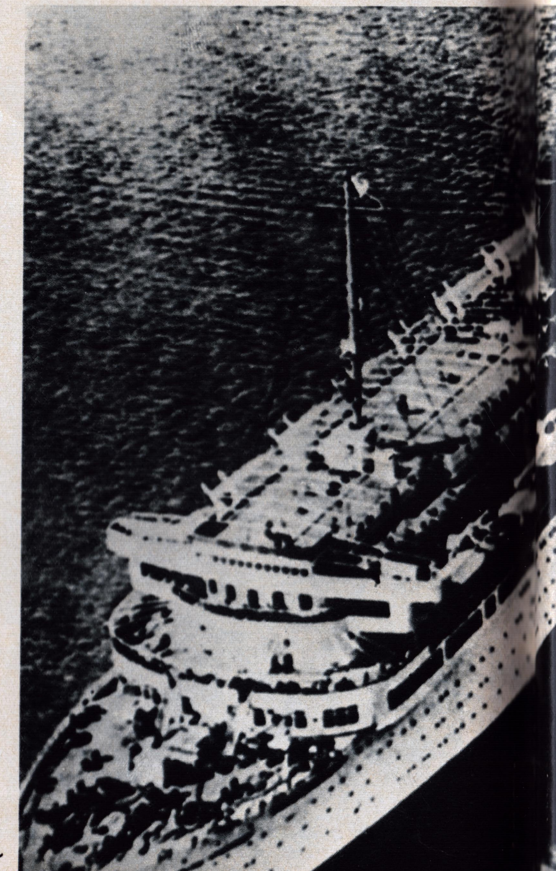
ヒトラーは気も狂わんばかりになった。彼は護衛艦の司令官の銃殺を命令し、ソビエト潜水艦の艦長を〃ドイツ帝国の敵ナンバーワン〃であり〃自分個人の仇敵〃と宣言し、欠席裁判で死刑を宣告した。

一九三八年にヒトラーは、〃最も巨大で〃、〃最も近代的で〃、〃沈没するおそれが最も少ない〃ドイツの客船であり〃ドイツの技術が生んだ奇跡〃であるウィルヘルム・フストロフ号の進水式にみずから出席して祝辞を述べたが、いまその船は海底に横たわっていた。

だが、ヒトラーがドイツ国内で3日間の喪を発したのは、ヒトラーから特に尊重され、ヒトラー用の個室がいくつか常に設けられていたこの船が沈んだためではない。まして、ソビエト潜水艦C13号による2回の攻撃の結果1個師団に相当する約一万人のドイツ軍将兵が死んだためでさえもない。この頃は毎日一万人をはるかに超すドイツ軍将兵が死んでいたのである。

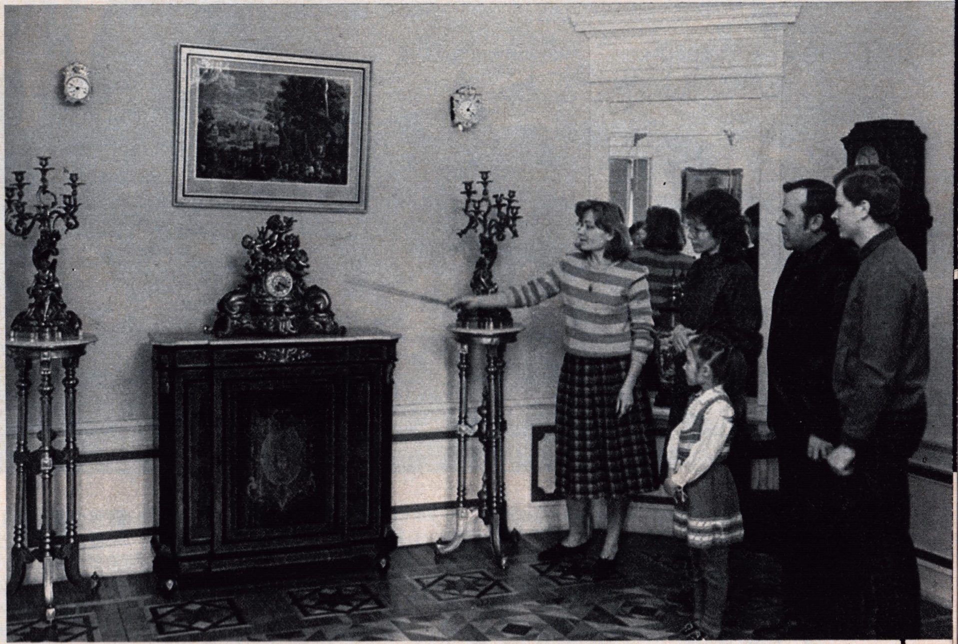
これを悲劇、破局というのは、マリネスコ艦長が放った魚雷が、新鋭の潜水艦隊（その乗員をウイルヘルム・フストロフ号がキールとハンブルク両港へ送り届けるはずであった）の助けを借りて海上の戦いの転換を図ろうとしたヒトラーの希望をたたきつぶしたという点にあったのである。

マリネスコがこの勇敢な出撃を遂行したとき、彼は30歳そこそこだった。彼はオデッサ（黒海の港町）で生まれ育ち、地元の航海学校を出た。この航海学校の建物には名誉ある海軍士官アレクサンドル・マリネスコの顕彰板が掲げられている。



1945年1月、ソ連の潜水艦C—13に撃沈されたドイツの客船ウィルヘルム・フストロフ号

文化トピックス



クライペダの時計博物館

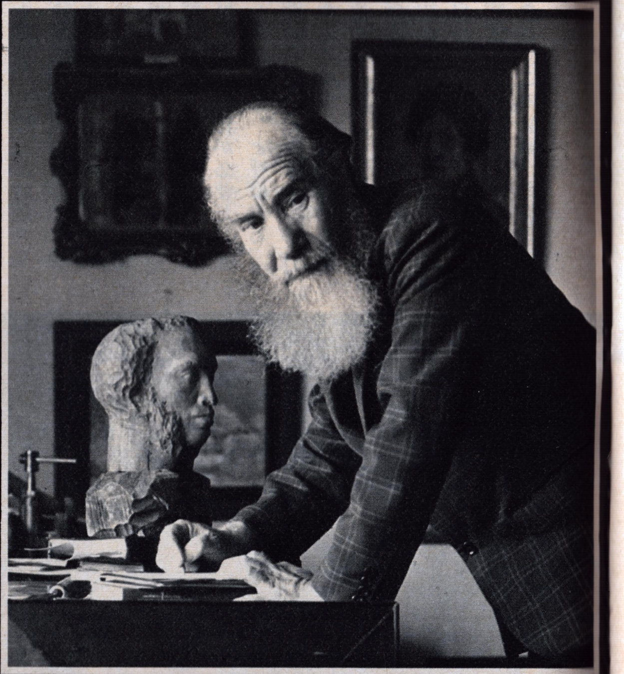
リトワ共和国（バルト海沿岸）クライペダ市の時計博物館には、日時計、水時計、砂時計、機械時計など、じつにさまざまな時計がある。展示物は何世紀にもわたる時計の歴史を物語っている。写真上は参観者に展示品の説明をするガイドのN・イワナウスカネ。写真下右は18世紀のフランス製の時計を修理するT・コロンキャビチュス。写真下左はかつてクライペダ市の望楼に取り付けられていた時計で、19世紀中ごろに作られたもの。





各人の心の中のプーシキン

画家エブゲニー・ウスチノフ（一九二八年生まれ）の創作活動は多方面にわたっているが、中でもロシアの大詩人アレクサンドル・プーシキン（一七九九―一八三七）のテーマは特別の位置を占めている。周知のようにプーシキンはソ連で最も愛されている詩人のひとりであり、この詩人を愛する人々はそれぞれ〝自分のプーシキン像〟を心の中に持っている。ウスチノフはもう15年以上もプーシキンの作品のさし絵を描きつづけており、19世紀前半に流行した石版画の技術を好んで使っている。プーシキンの時代の雰囲気を再現するのに最もふさわしいと思っているからだ。写真右は制作中のウスチノフ。作品〝プーシキン・シリーズ〟から、右下　3枚つづきの『婚礼』の中央部、左上　石版画『モスクワのプーシキン』、左下　グアッシュ画『腕白な騎手』









短信アラカルト

生活しながら心電図

心臓病の多くの症状は、特に初期の段階では一時的な性格を帯び、しばしば特別の条件下で（たとえば仕事中か睡眠中に）起こる。従って病院での診察のさいの普通の心電図では症状はとらえられない。連続的な長時間（1昼夜かそれ以上）の検査が必要だ。

〝レンタMT〟と呼ばれる、人間の心血管系をふつうの日常生活の中で検査する装置が、ソ連の学者によって開発され、量産されている。重さはわずか約七〇〇gで、完全に行動の自由を維持している患者の心電図を連続30時間まで記録できる。この装置は効率の高いマイクロモーターを備えている。得られたデータを処理するために、新しい専用のマイコンが予定されている。

運動下での拍動記録は不整脈発見の確実性を5%から90%に高め、薬の選択と使用の面ですぐれた役割を果たす。

この方法は、パイロット、自動車の運転手、鉄道の運転士その他、特殊な職業の人々に対する予防検診のさいに非常に役立っている。

低酸素療法

重い病気の時、十分な量の純粋の酸素が必要であることはだれもが知っている。ところがN・I・ピロゴフ記念第2モスクワ医科大学の研究員たちは、ある場合には普通の空気中の酸素の量を減らした方がかえっていいことを発見した。空気中の酸素は約21%だが、医師たちは酸素がわずか15%、あるいは10%しかない混合気体を患者に吸わせる。

酸素を減らす目的は何か？酸素の含有量を、高地へ登る時と同じように、圧力とともに次第に減らしてゆくと、生体内では補足的な力が目ざめる。この発明は「生体の補償能力を高める方法」と呼ばれている。高血圧の人では数回の治療で血圧が下がり、低血圧の人は逆に血圧が上がる。

播種の前に冷却

ビート畑の除草は魅力に乏しい仕事だ。しかしクラスノダル地方（ロシア連邦共和国の南部）だけでもそのために一〇〇万人時の労力が費やされる。ここでは除草剤は役に立たない。問題は雑草にあるというよりもむしろビートそのものにあるからだ。すなわち1粒のビートの種は通常数本の芽を出すが、必要なのは1本だけなのだ。そこで余分なものを摘み取らなければならない。R・ブイチコフ工学博士候補（クラスノダル）は播種前にビートの種を零下約50度の塩水で〝洗礼〟することを提案した。このような処理を受けると種は生気を失い、もろくなる。あとは種をバイブレーターで振動させるか破砕機の回転盤を通過させさえすればよい。種は胚の仕切りに沿って分かれる。1粒の種は今度は一本の芽しか出さない。零下数十度の冷却は種の発芽力に影響を与えないばかりか、ついでに消毒作用を及ぼす。

アリストテレスの論文集の貴重版

タルトゥ大学（エストニア共和国）の学術図書館の蔵書に加わった古書は15世紀のもの。これは『デ・アニマリブス』――古代の偉大な哲学者アリストテレスの動物学に関する論文集である。彼が約五〇〇種の動物を記述したことは知られている。一一二ページのこの本にはアリストテレスの三つの労作と、15世紀にアリストテレスの論文をギリシャ語からラテン語に翻訳した翻訳者T・タズの序言と解説が含まれている。

羊皮紙装丁のこの本は今世紀の初めにタルトゥ大学で教えていたB・ストゥカチェフの書庫に保管されていた。図案で飾られた扉ページには〝ベネチア、一四九二年〟と記載されている。

タルトゥ大学のこの有名な学術図書館には現在48冊のインキュナブラ（西暦一五〇〇年以前の活字印刷術のごく初期に印刷された本）が保管されている。

モスクワの気候温暖化

モスクワの気候の温暖化は今世紀の当初からすでに始まり、一九三〇年代後半に最大となった。その後も温暖化は続いたがこのプロセスに主に貢献したのは冬と春の平均気温の上昇であって、秋の貢献はずっと少ない。

一九七三―一九八三年の期間をとると、冬の平均気温は平年より2・1度、春は2・2度も高かったが、秋はわずか0・8度高かったにすぎず、夏は平年並だったが、それ以前の数十年よりはずっと低かった。

というわけで気象観測データは、近年冬と春が暖かくなり、夏は少しばかり涼しくなったというモスクワ市民の生活実感を裏づけている。

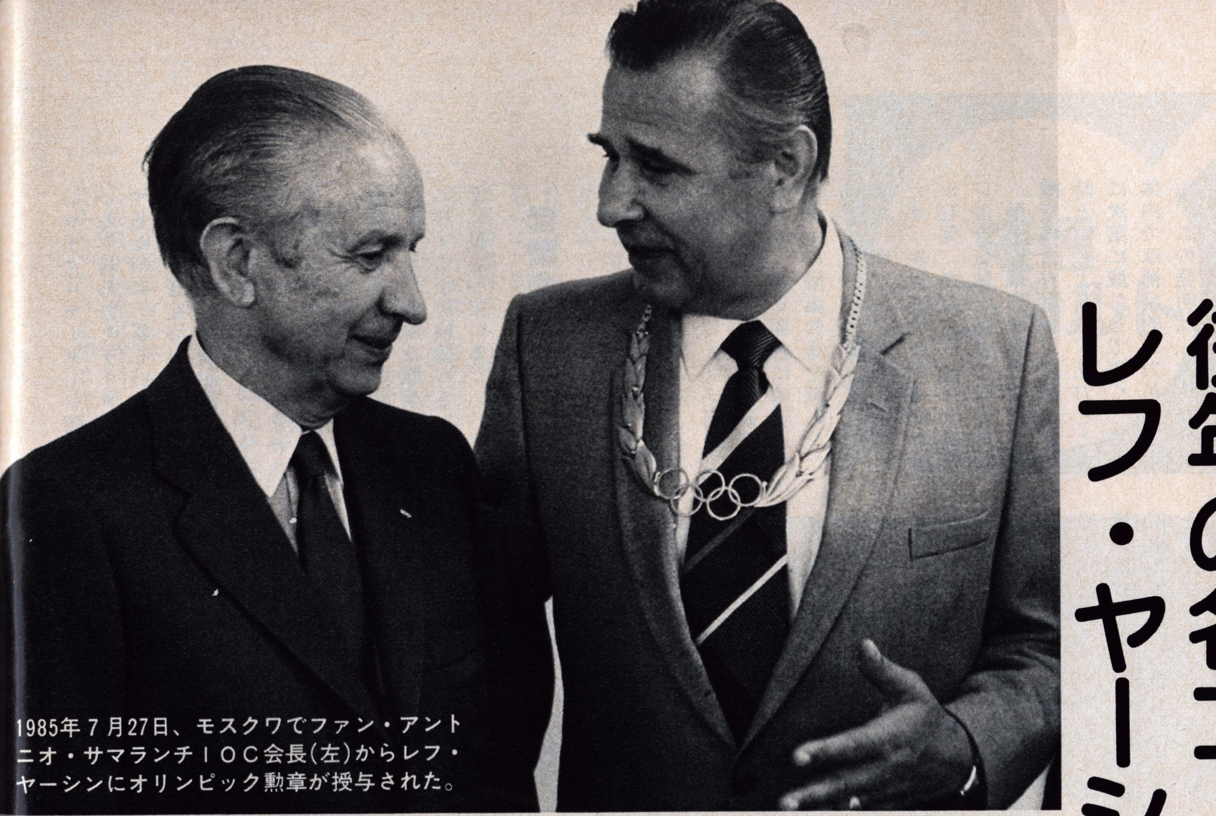
その原因はいろいろ考えられるが、大方の専門家に言わせるとこれはソ連欧州部全体で進行している自然のプロセスによるところが大きく、都市化などの人為的要因の影響はごくわずかだという。



英才教育？…（F・グリンベルグ撮影）

往年の名ゴールキーパー レフ・ヤーシンにオリンピック勲章

本誌スポーツ評論員　ウラジーミル・キリリュク　カメラ　I・ウトキン



1985年7月27日、モスクワでファン・アントニオ・サマランチＩＯＣ会長(左)からレフ・ヤーシンにオリンピック勲章が授与された。

今年7月、ソ連サッカーの往年の名ゴールキーパー、レフ・ヤーシン（55歳）にオリンピック勲章が授与された。これは国際オリンピック運動に対するヤーシンのめざましい貢献と、彼のスポーツの才能、勇気、高い人間的資質をたたえたものである。

レフ・ヤーシンが生涯で最も困難な日々を送っているとき、われわれは彼の本当の人気を改めて認識させられた。昨年のハンガリー遠征のさい、コーチの激務がたたって、急拠2回の手術をしなければならなくなった。1回目はブダペストで、2回目はモスクワで。この優れたスポーツマンの生命を守るため、医師たちはあらゆる手段を駆使し、最後には片足を切断しなければならなかった。

いまヤーシンは、ひとりではこんなにも早く危機を克服し、ふたたび自分を取り戻すことはできなかっただろうと確信している。そこには大勢の人々の支援があった。知っている人も、見ず知らずの人も、声援し、手紙で励まし、手を差し延べたのである。

われわれは以前にも、ヤーシンはスポーツ・ファンの間で、ソ連でも多くの外国でも、人気者だということを知っていた。この人気は困難な日々にあって、サッカーやスポーツの枠を越え、何よりもまず人間的、個人的な性格を帯びるようになった。スポーツとは縁遠い人や、グラウンドでのヤーシンの活躍ぶりを観戦したことのない人までもが、見舞いにやってきたり、手紙をよこした。

まだヤーシンが17歳にもならない頃だった。彼が世界的に有名になるとはまだだれも思っていなかったが、仲間や多くの人々は彼を評価し、彼を手本にしていた。大祖国戦争（一九四一―四五年）後しばらくのうちに、ヤーシンはすでに工場で年季を積み、腕のいい仕上げ工として認められ、政府の賞――〝大祖国戦争労働献身〟メダルを受章していた。

ヤーシンとあまりつき合いのない人でも、彼のまじめさ、親切、勤勉、自分に対する厳しさは、だれもが必ず認めた。彼は個人として人々に尊敬される資質にふんだんに恵まれていた。まさにこれらの資質が、ヤーシンがサッカーで有名になり、同僚や仲間、隣人、多くのファンの変わらぬ共感を得るのに役立った。

運命はヤーシンに多様な才能を付与したが、彼はそれに甘んじることは決してなかった。未来のソ連ゴールキーパーNo.1の栄光への道は、平坦ではなかった。むしろ逆だった。どの勝利も、楽々と、即座に勝ち取られたわけではなかった。大小さまざまな障害が立ちはだかるこの長い道のりを乗り切るためには、根性が必要だった。

レフ・ヤーシンが12歳のとき、戦争が始まった。間もなく彼は両親とともに、生まれ育ったモスクワを出て、当時父親が働いていた工場が疎開して本拠地を移していたボルガ川流域へ移らなければなら



ソ連の往年の名ゴールキーパー、レフ・ヤーシン。



モスクワ・ルジニキのレーニン・スタジアムで



レフ・ヤーシン現役最後のお別れ試合のあと(1971年)

なくなった。一九四三年の春、5学年（10年制の学校で）を終えたばかりのヤーシンは、工場へ働きに出、仕上げ工見習いになった。最初の教師は、高い技能資格を持つ父親だった。のちにヤーシンは他のいくつかの職種も身につけ、積極的、良心的に働いた。

一九四四年、ヤーシン一家はモスクワへ戻り、息子と父親はトゥシノの工場で働き始めた。トゥシノはいまではモスクワの区の一つだが、当時は郊外だった。あるときヤーシンは、工場の通用門で「サッカー希望者はウラジーミル・チェチェロフのクラブへ来たれ」という掲示を見た。掲示は驚きでもあった――まだ戦争が行われているというのに、スポーツだなんて。それでも、勤務時間が終わると、クラブに入るために駆け出して行った。チェチェロフもやはり労働者で、前線で戦い、身体障害者となって復員した人だった。彼は子どもたちを整列させると、全員を巡閲し、眺めまわして、各人にポジションを指示した。背の高いヤーシンに彼は言った。

「ゴールに立ちな」

こうしてヤーシンは、ゴールをたたき込むフォワードを夢みていたのに、逆にそれを阻止するキーパーになった。

ヤーシンが全スポーツ人生を結びつけることになったモスクワの名門チーム〝ディナモ〟から声がかかったのは、かなり遅く、彼が20歳のときだった。レギュラー・メンバーになったのは24歳のときだったが、その代わり一九七一年まで、すなわち42歳まで出場しつづけた。それは〝ディナモ〟とソ連ナショナルチームのゴールキーパーを世界のゴールキーパーの地位にまで高めた、輝かしい、長い道のりだった。この間ヤーシンは〝ディナモ〟のメンバーとしてソ連選手権、ソ連カップで優勝し、ナショナルチームのメンバーとしてオリンピック（メルボルン大会、一九五六年）、欧州選手権（パリ、一九六〇年）で優勝し、世界選手権で3位（ロンドン、一九六六年）に入賞した。一九六三年には、ヤーシンは週刊誌〝フランス・フットボール〟の恒例の人気投票で、欧州最優秀選手に選ばれた。一九七一年にモスクワでヤーシンのお別れ試合が行われ、国際サッカー連盟（FIFA）のスター選手と〝ディナモ〟チームが対戦した。FIFAチームは英国のボビー・チャールトン、西ドイツのゲルト・ミュラー、イタリアのジャチント・ファケッティ、ユーゴスラビアのドラガン・ジャイッチ、ポーランドのブロジミエシ・ルバンスキ、ハンガリーのカルマン・メゼイその他、そうそうたる顔ぶれだった。だが、だれひとりとして、レフ・ヤーシンのゴールを抜くことはできなかった。〝ディナモ〟チームは2対0で勝った。

試合後ミュラー選手は、ついに一度もヤーシンのゴールを抜くことができなかった、と認めた。

すでに述べたように、サッカーでのヤーシンの名声は、一朝一夕に勝ち取られたのではなかった。特に最初のころは、何度もスランプに陥り、絶望し、自信を失い、そして立ち直る、のくり返しだった。ねばり強さ、努力、自分の誤りを分析し、直す能力が、ヤーシンが技術の奥義をつかみ、こんにち〝ヤーシン流〟と呼ばれるキーパー術を生み出すのを助けた。〝ヤーシン流〟の主な特徴は、ゴールキーパーが常に動いていること、打って出て大胆にプレーすること、手を使ったロング・パスによって味方の攻撃のきっかけを作ること、バックスとの連係プレーのさい、ペナルティ・エリア内で他のポジションのプレイヤーの技を使うこと、そして、言うまでもないが、ゴールキーパー本来の技が高度なことである。

このようなスタイルを自信をもって実行できるのは、肉体的にすばらしく鍛練されているゴールキーパーだけだ、とヤーシンは言う。彼自身そのために、常にまず他のポジションのトレーニングをして、そのあと純粋にキーパーのためのトレーニングをやった。

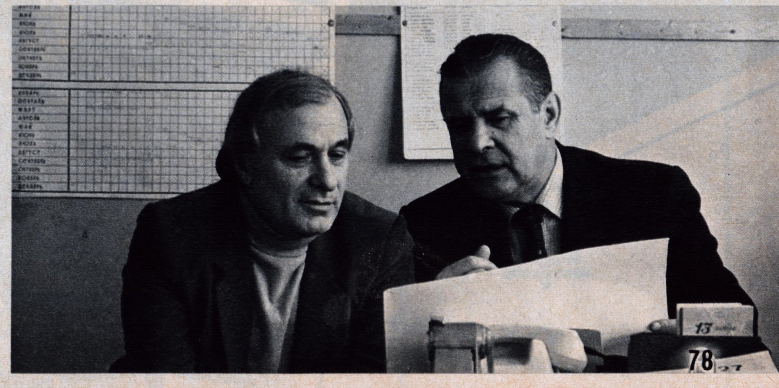
ヤーシンは概して、サッカーに多くの時間を割いた。どんな風に練習するのか、という質問に彼はしばしばこう答えた。

「練習はよくやる。そのさい、私にはノルマはない。必要だと感じる限りやるだけだ」

彼はいまでもほとんどすべての時間をサッカーのために使っている。ナショナルチームの選手養成プログラムに通じたソ連国家体育・スポーツ委員会サッカー局次長、サッカー振興のために活躍するソ連サッカー連盟幹部会副議長としての仕事のほかに、権威あるレフ・ヤーシンとして、求めに応じて援助したり、貴賓、審判あるいは主催者としてあれこれの競技会に出席する忙しい毎日である。

病気のあと、改めて歩くことを習い、以前の職務に復帰したレフ・ヤーシンは、アマチュア・チームによるヤーシン・カップ大会の開催期間中、フィンランドを訪れた。この大会には現在、大人のチームと並んでジュニアのチームも参加している。これがことのほかヤーシンの自慢だ。彼は若いゴールキーパーのために喜んで時間を割き、経験を伝授し、長年にわたって蓄積してきた奥義を伝えている。要するにサッカーのこと、若者たちへの援助のこととなると、ヤーシンは時間を忘れてしまうのである。サッカーのこと以外にも、もちろん、家庭やその他の仕事もある。2人の娘は成長して、すでに結婚し、ヤーシンはすでにおじいちゃんになった。孫娘のナターシャに目を細め、2人目の孫の誕生を待っている。彼はなぜか、2人目の孫も女の子だと思っている。いずれにしても、もっと忙しくなる。

とはいえ、それは決してヤーシンのサッカーへの愛着を弱めるものではない。そうなったら、それはもうレフ・ヤーシンではない。



モスクワ〝ディナモ〟時代の同僚アリクペル・マメドフ・アゼルバイジャン石油化学大学講座主任・功労スポーツマスター（左）と



ヤーシン一家。後列右からレフ・ヤーシン、娘イーラ、娘レーナと孫娘ナターシャを抱くワレンチナ夫人。



ソ連ナショナルチームのゴールキーパー、リナト・ダサエフ（右）と。





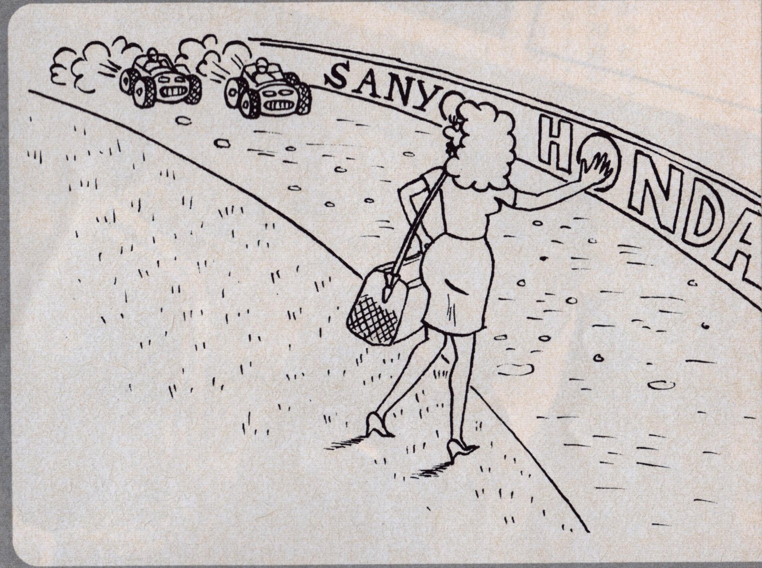


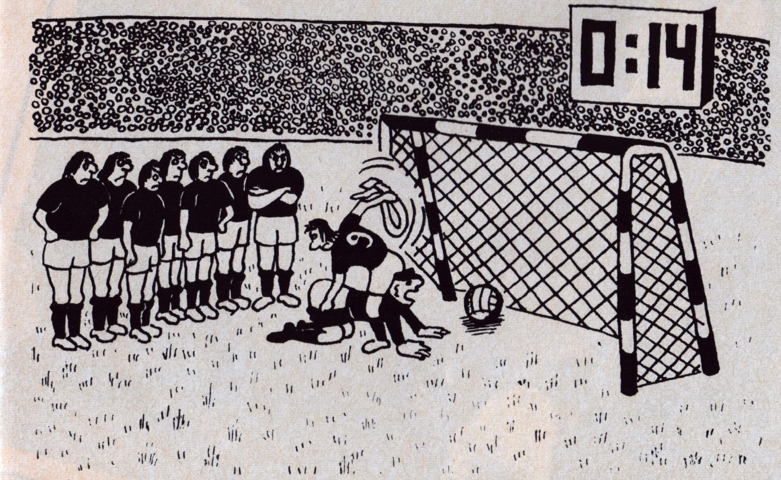
ユーモア

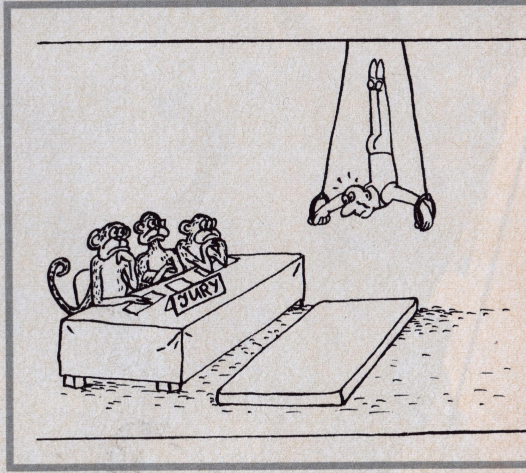


せっかちな子ね…













今日のソ連邦 一九八五年11月15日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可 発行人 加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3—9—13・電話03・447・3536）
定価 一五〇円（購読料は会費に含まれる）